
千年王国ものがたりエイシア創記

みづきゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千年王国ものがたりエイシア創記

【Nコード】

N7227W

【作者名】

みづきゆう

【あらすじ】

あの日突然、海の方こうからやってきた侵略者により、エイシア島の一領地であるクリストンは占領されてしまう。領主家であった一人生き残った娘シエラは、敵国への護送中、謎の老人により救出される。そんなシエラの前に、一人の青年が現れた。彼の名はレックス。かつて、自分の父が島内で反乱を起こし、この島の宗主の座から追放した、十三年間行方不明の王子だった。

序（前書き）

はじめに投稿します。みづきゆうと申します。よろしく願います。

序

シエラが領主の娘として育った国クリストンは、一年前に海の向こうからやってきた侵略者、バテントス帝国に占領された。シエラは、その時の戦いで、クリストン領主である兄ライアスと、もう一人の兄シゼレを亡くしている。

シエラには、ライアスとシゼレ以外のきょうだいはいない。シエラの父親である前領主は二年ほど前に病死し、母親もシエラが物心つく前に亡くなっており、二人の兄が戦死したあとは、領主家の人間はシエラ一人だけとなっていた。

バテントス帝国は、たった一人残った領主家の娘シエラを、クリストンの新領主にしたあと、極秘裏にバテントス帝国へ護送する事にした。

帝国がクリストンを占領したとはいえ、クリストンの首都サラサをおさえ、シエラを人質に取っただけだったので、各地にちらばるクリストン国内の反バテントス勢力すべてをおさえこめたわけではない。帝国に護送する事にしたのも、シエラが反勢力に奪回されるのを警戒したからだった。

護送日当日、シエラは睡眠薬を飲まれ、棺おけによく似た長い行李に入れられた。そして、運び屋に偽装した兵士達に守られた荷馬車に荷物同然に積まれたのである。

首都サラサから、バテントスの船があるクリストン北部の港までは、どんなに急いでも数日かかる。荷馬車で棺おけなどという、非常識な方法での護送になったのも、あくまでもシエラの移動が反勢

力に知られないようにするためだった。そして、そのために、首都サラサには、シエラの偽物まで用意しておいたのである。

シエラが、首都サラサを旅立ち幾日か過ぎ、睡眠薬と棺おけでの屈辱的な日々にもあきらめがついたころ、荷物輸送のための運び屋に化けたバテントス軍の隊商が、とつぜん何者かの襲撃をうけた。襲撃は、もうすぐ港だという隣国ゼルムに近い山間でおこった。

シエラ護送のために選抜された少人数ながらの精鋭部隊は、襲撃者達が使った今まで見た事もない筒状の細長い武器によって、あつというまに蹴散らされてしまい、睡眠薬でウトウトしているシエラを奪われ、それきり見つける事はできなかった。

その後、バテントス軍は、サラサにいる偽物を本物のシエラ姫とし、そのまま何事も無かったかのよう、占領政策を続けていた。

物語は、ここから始まる。

序（後書き）

全9章で構成されています。すべて完成済みですので、順次発表させていただきます。長い物語になりますので、最後までおつきあいただけたら幸いです。この作品をお読みいただき、まことにありがとうございます。

一、クリストンの姫君（1）

おい、おい、いい加減におきろよ。いつまで寝ている。もうすぐ夜明けだぞ。

（おねがい、もう少し、もう少しだけ寝かせて。つかれているの、とても。）

まったく、いくら睡眠薬を飲まされているからって、よくそんなに寝られるもんだよ。こちらら、お前さんのせいで、昨日の昼からずっと山ん中を逃げっぱなした。

（眠いの、とても。もう、本当につかれちゃった。兄様達のように眠りたい、ずっと。）

いい加減にしろってんだ。本当につかれたのはこっちだ。おろすぞもう。

（バテントスについたの？　ずいぶん早いね。）

ドサッ！

シエラは、一発で目がさめた。つもった枯葉の上に落とされたので、それほど痛くはなかったが、眠っていたのをいきなり落とされたので、びっくりして心臓が飛び出しそうになる。

ちよっとお、乱暴じゃない。お姫様になんてことをするのよ。

黒髪の若い女が、中年の赤毛の男にどなったのが見えた。

「シエラ様、大丈夫ですか。お怪我はありませんか。」

山の中だった。シエラは朝の冷たさにブルリとふるえる。季節は秋なので、山の明け方の寒さは身にこたえる。黒髪の女の笑顔が見えた。

「簡単な物しかありませんが、何かお食べになりますか。喉は渇いてはいませんか。」

「何も、何もいりません。ここは、バテントスですか。」

赤毛の中年男と黒髪の女は、顔を見合わせた。中年男は、やれやれという顔をし、黒髪の女はやさしく笑う。

「ここは、クリストンの隣国ゼルムの山の中です。バテントスの船がとまっている港に着く前に、私達がシエラ様をおたすけしました。私はミランダ。この男は、」

マールブル。赤毛の男はめんどくさそうに答えた。そして、赤い髪と対照的な緑色の瞳でチラとシエラを見たあと、黒髪の女に視線をうつした。

「ミランダ。この先に山小屋がある。少し休もう。国境を越えちまえば、いくらバテントスでも追ってこない。夕方までにリクセンにつけば、グラセンのジジィも安心するはずだ。」

グラセン、シエラは聞き覚えがあった。ベルセア国教会の偉いお坊様の名前だ。たしか、ライアス兄様がクリストンの領主になったとき、ベルセア国教会からお祝いにきてくれた人だったはず。

「グラセン様、グラセン様とおっしゃいましたね。私、その方を知っております。たすけてくださったって本当ですか。私、本当にたすかったのですね。バテントスに行かなくてもいいんですよ。」

赤毛の中年男は、あきれたように頭をかく。かくたびに、ボサボサとフケのような物が落ちてくるのを見ると、そうとうフロに入っていないようだ。

「歩けるんなら、ついてくるんだ。ついてこなけりゃ置き去りにするぞ。こちとら、世話になってるグラセンのたのみでたすけたんだ。」

黒髪の女は、ムツとしたように男を見た。

「どうしても行きたいってグラセン様にたのんだのは、あんたじゃない。素人のあんたじゃ、足手まといだって私は反対したのにね。」

「おれは、この銃の威力をためしたかっただけだ。グラセンが、バテントスの大砲をヒントに設計した新武器なのに使わないじゃ宝の持ち腐れだろ。」

マールは、右手に持っている細長い筒状の道具をシエラの前にさしだした。シエラには、ただのへんてこな杖にしか見えない。

「ま、そういう事だ。いくぞ。おれは少し眠りたい。」

と言い、さっさと行ってしまふ。ミランダが、枯葉の上に座りっぱなしのシエラを立たせた。少し、フラフラする。ミランダは、シエラの服についている枯葉を払い落とした。

「シエラ様、すみません。乱暴者で。山小屋は、すぐですから。」

「あの、二人だけで？ 私を護衛してたバテントス軍は、少数ながらも精鋭ばかりときいてましたから。」

ミランダが、クスリと笑う。

「他の者達は、まだここにいますよ。シエラ様の目に見えないだけです。二人だけでは無理ですよ。」

シエラは、周囲を見回した。カサカサという山の音しかきこえない。

「さあ、行きましょう。こんなところに長居は無用です。いろいろと疑問もあるでしょうけど、今は私達を信用してください。決して、悪いようにはしませんから。」

シエラには、ついて行くしかない。

ミランダは、詳しい事はリクセンで待っているグラセンにきけと言った。そして、山小屋で少し休んだあと、シエラは、なれない山を歩き、夕方にはリクセンという小さな町へと到着した。

町の食堂で三人は夕食を済ませたあと、シエラは小さな宿へと案内された。

宿の前でマールブルは用事があると言い、そのままどこかへ行ってしまう。シエラはミランダとともに宿のギシギシとした階段をのびた。そして、たてつけの悪い扉を開くと、愛想のよい小柄な老人

が待っていてくれた。

まちがない、ライアス兄様の領主就任のさいの老人だ。

シエラを見た老人は、すわっていたイスから立ち上がり、シエラの手をとった。

「おお、こんなに素敵なレディになれまして。いやはや、月日のたつのは早いものですな。」

老人はシエラを、自分がすわっていたイスにすわらせた。

「私を覚えておりますか？ お兄様のお祝いにベルセア国教会からかけつけたジジイです。」

「あ、あのその、はい、覚えてます。グラセン様ですね。あの、ありがとうございます。私、バテントスなんかに行きたくなかったんです。」

「そうですね。あそこは知らない異国の地です。シエラ様が行ってよい場所ではありません。お国があのようになりまして、さぞつらい思いをされたでしょう。ですがもう、何も心配はございません。すべて、このジジイにおまかせ下さい。」

老人は、うんうんと、うなずきながら言う。シエラは部屋の片隅に、大きな青年がいる事に気がついた。

サラリとした金色の長い髪を、むぞうさに頭の後ろでたばねている、緑色の瞳をしたかなりの美青年だ。グラセンは、

「レックス、ごあいさつなさい。クリストンの姫君ですぞ。」

レックスと呼ばれた青年は、ムツとしたように顔をそむけた。グラセンは、青年の態度にため息をつく。

「もうしわけございません。この夏十八になり成人しましたが、このようにあいさつ一つできない世間知らずの若者です。レックス、こちらにきなさい。初対面の女性に対して失礼ですぞ。」

青年は、しぶしぶシエラにあいさつをした。が、すぐにバタンと扉をならし、部屋から出て行ってしまふ。ミランダは、あきれたように扉を見たあと、お茶をもってきますと言ひ部屋から出て行った。

すぐに廊下から、どなりあう声がきこえる。シエラは、グラセンを不安そうな目で見つめた。

「私は、これからどうなるのでしょうか。せめて、サイモンに連絡はとれませんか。サイモンは、長年領主家に仕えてくれた側近で、私にとっては肉親同然の人ですから。それに、サイモンの妻は、私の母の妹で、彼は私の叔父にもあたるんです。」

グラセンは、しぶい顔をした。

「サイモン様ですか。たしか、シエラ様の母君と、彼女の妹であるサイモン様の妻は、お二人とも、ベルセア国教会の総本山があるベルセア国の出身でしたな。」

ベルセア国教会の総本山は、同じ名前のベルセアという小さな国にある。その名のおり教会が支配する国だ。グラセンはそこに住んでいる。シエラの母と叔父であるサイモンの妻も、ベルセアの僧

侶階級の家の出だ。

「グラセン様、たすけていただいたことには、とても感謝しております。叔父は、私がたすかったことを知れば安心なさるでしょう。叔父もバテントスとの戦いの最中、看護兵として参戦していた叔母を失っています。叔父にとっても私は、今はただ一人の身内なのです。おねがいします。」

「もうしわけございません。サイモン様は、反バテントス勢力の一つとして、活動なさっているときいております。つまり、居場所は転々と変わっておられるはずです。連絡をとるなどとても無理です。

それに下手にサイモン様をおさがししたら、シエラ様がこうして私の手元にいることが知られるとも限りません。バテントスは、シエラ様をさらったのが誰か、まだ分からないはずです。

今はシエラ様の安全が優先されます。まずは、このゼルムからベルセアへまいりましょう。その後の事は、そこでご相談します。」

「ベルセア国教会が私を守ってくれると？」

グラセンは、首をふった。

「今回は私の独断です。教会は何も知りません。教会の内部には、この島、エイシア島へ攻めてきて、クリストンを占領したバテントスに対する恐怖心があります。

もし、私がシエラ様を保護した事実が知られたら、シエラ様の安全どころか、私の身も危険になってしまいます。それどこか、ベルセア国教会がバテントスの敵とみなされてしまうかもしれません。

ですから、あくまでも私の独断なのです。ですが、ご安心を。シエラ様は私の命にかえても守りぬいてみせます。」

「なぜ、そこまで私を？　グラセン様は、バテントスがこわくはないのですか？」

シエラには信じられなかった。自分とほとんど縁のない老人、しかもただの僧侶が、危険をおかしてまで占領された国の姫をたずねる理由が。

グラセンは、深いため息をついた。

「彼らのねらいは、このエイシア島の全占領です。このエイシア島は、バテントスがある大陸よりも南に位置しており、食料にはこまりません。バテントスは山岳地帯が多く、冬が長いときいております。だから、豊かなこの島へとやってきたのでしよう。」

「食料なら、お金をだして買えばいいでしょうが。貿易なら、クリストンは歓迎します。なのに、どうして突然おそってきて、このような事をするのでしょうか。」

「貿易は相手のつごうによります。確実な食料確保には、占領のほうがいのです。特に急激な領土拡大をし、大陸の支配をもくろんでいるバテントスにとり、貿易などという考えは最初から無いのですよ。」

シエラは、うつむいてしまった。グラセンは、

「クリストンが占領されたとき、この島の宗主であるダリウス王国

と、ここゼルム、そしてこの島のもう一つの国カイル、我がベルセアは対応を考えました。ですが、バテントスが持ち込んだ武器、大砲ですか、あれの威力に太刀打ちできる方法が見つからなかったのです。

それに今は、かんじんのダリウス王国の王である、ダリウス王が不在の時期です。現在のダリウス王国には、ゼルムとカイルをまとめあげて、バテントスに対抗するだけの力はないのです。

古い伝説によると、かつて、この島は千年前に一度だけ、今と同じように大陸の異国人に支配された事がありました。そして、その支配から島を解放したのが、伝説の英雄、女王ミュティカでした。

ミュティカは、神から授かったとされる神剣と、二つの首のある双頭の白竜と呼ばれるドラゴンを使い、この島を支配している異国人と戦い勝利し、ダリウス王家の始祖となり、千年の長きにわたる、安定した国をつくったと伝えられております。

そしてこの千年、どこからも占領されず、島内で小さな争いばかりでしたが、ダリウス王国を宗主とし、ゼルム、カイル、クリストン、それに宗教国家ベルセアの安定したこの島の統治は続いていました。

ですが今、また再び異国からの支配を受けようとしています。ミュティカ以前の時代にもどろろとしているのです。それだけは、防がなければなりません。」

シエラは、ぎゅっと手をにぎった。

「もうしわけございません。クリストンが占領されたのも、私がこ

うなったのも、自業自得というものです。父が、亡き父が、十三年前、あのような事件をおこななければ、このような事態には、おちいらなかったでしょう。父が、マルガリーテ女王様を殺めてしまつた事を大変つらく感じております。」

シエラの父、ドーリア公はダリウス王家の出身だった。代がとだえた領地の跡継ぎは、王家から出されるのは、この島の慣例となっていた。

十五年くらい前になるだろうか。当時のダリウス王が世継ぎをもうけないまま狩猟祭の落馬事故で亡くなり、次の王位を、亡くなった王の弟でクリストンに養子に出されていたドーリア公か、妹のマルガリーテ王女かで、ダリウスはもめていた。

慣例ならば、養子に出されたドーリア公よりも、ダリウスに残っているマルガリーテ王女が女王で決まりだろう。だが、マルガリーテ王女は政治的能力が皆無の上に、性格もかなり身勝手で、しかも奔放なふるまいをしたあげく、低い身分の男と恋愛結婚をしており、女王とするには非常に問題がある王女だった。

おまけに、マルガリーテ王女の母親は、正妻の侍女だった女だ。父王が、酒に酔ったせいで正妻と侍女を間違えたという、いわくつきの王女でもある。対するドーリア公は、前王と同じ正妻を母としていた。こういう理由があったので、養子に出されたドーリア公が、王候補に浮上したのである。

しかも、ドーリア公には、ライアスという優秀な跡継ぎがいた。ライアスは当時十三歳で、神童と呼ばれるほど、文武にすぐれた才能を持つ少年だった。おまけにライアスは、ダリウス王家の特徴でもある金髪と青い目をしており、非常に美しい容姿の持ち主でもある。

った。

マルガリーテ王女にも、当時三歳か四歳かの男の子がいたが、父親の身分が低い上に、あのバカ王女から産まれた子だという理由で、たいして話題にもならず、王子という扱いもされていなかった。

慣例をとるか例外をとるかで、ダリウスは一年近く議論を繰り返していた。一時は、ライアスという強力なカードがあるドーリア公で決まりかけた。だが、伝統を重視したベルセア国から横槍が入り、慣例通り、マルガリーテ王女が女王として即位する事で決着がついた。

そして、ドーリア公は、一年もたたずにダリウスへ兵をすすめ、王都マーレル・レイをおそったのである。結果、マルガリーテ女王は、宮殿に火をはなち燃え尽き、マルガリーテ女王の夫と王子は行方不明になってしまった。

王都はドーリア公にふるえあがった。このまま、ドーリア公が王として即位するのではないかとおそれていた。又は、ドーリア公を王としなかったことで、どんな報復を受けるかとおびえてもいた。

が、ドーリア公は、女王の死を確認しただけで他には何もせず、王都マーレル・レイからあっさり兵をひきあげ、クリストンに引っ込んでしまった。王都の略奪もせず、もう用は無いとばかりに帰ってしまったのである。

その後、ダリウスは、ドーリア公の襲撃に対して沈黙を守った。非常に憤^{こたえ}ってはいたが、下手に騒ぎ立てて、せっかくクリストンに引っ込んでくれた災いを、ゆり動かしたくなかったからだ。

ダリウスは、ドーリア公をどうこうするよりも、王子を搜索する事に専念した。だが、何年たっても見つけれなかった。しだいに、王子は人の記憶からうすれ、ダリウスも、これだけ搜索しても見つからないのであるならば、死んだかもしれないと考え、搜索をやめたのである。

一、クリストンの姫君（2）

シエラは、

「私には、王子様が亡くなられたとは、とても思えません。きっと、どこかで生きていらっしやると信じております。亡き兄ライアスも信じておりました。」

グラセンは、

「シエラ様、あなた様も王家につらなる人間でございます。バテントスは何も考えずに、あなた様を本国へ護送しようとしたのではありません。バテントスは、理論的に物事を考えます。もう、お分かりでしょう。」

シエラは首をふった。首の動きにあわせ、シエラの豊かな栗色の髪がゆれる。

「私は王になる気はございません。王家との縁は、父が反乱を起こした時点でなくなりました。私は罪人の娘です。グラセン様、私をベルセアに連れて行ってください。そこで、どうすればいいのか、いっしょに考えてくださいませ。私にできることは何でもします。」

トントン、ミランダがお茶と茶菓子を運んできた。シエラは、さっきの青年が気になった。

ミランダは、

「ああ、あのバカですか。マーブルをさがしてくると言っていましたよ。リクセンはせまい町ですから、すぐにもどってきますよ。」

「あの、レックスさんでしたっけ。マーブルさんと、どういうご関係でのですか。瞳の色が同じですし、親子なのですか。」

シエラは、お茶を受け取った。ミランダは、グラセンにもわたしたあと、茶菓子用小皿にとりわける。

「親子に見えますか。まあ、見えるでしょうね。レックスの両親は亡くなっているんです。それを独り者だった叔父が引き取って育てたんです。まあ、叔父と甥ですからね、瞳の色が同じでも当然ですよ。よく、まちがわれますしね。」

「あの、皆様、どういう方達なんですか。グラセン様はお坊様ですけど、あなたは？　ふつうの人では救出なんてとても。」

グラセンは、

「ミランダは、それなりの訓練をつんだ女です。政治の世界は、いろいろとむずかしい事ばかりでしてね、ただの坊主では、やっていけないのですよ。私は他に数人、ミランダのような者を使っています。ですから、シエラ様をこうして救出できたのですよ。」

「レックスさんもそうなんですか？　とてもそうは見えませんか？　ただ。」

グラセンとミランダは意味ありげにほえんだ。ミランダが答えた。

「レックスとマールは民間人です。ここの地理が詳しいので案内をたのんだんです。彼らは運び屋です。荷物運びのね。マールは、グラセン様のたくさんいらっしゃる知り合いの一人、ですかね。」

「じゃあ、素人さんですね。バテントス相手に、おそろしくはなかったのでしょうか。」

「ああ見えても、けっこう腕がたつんですよ。運び屋は、時と場合によっては盗賊の出る危険な場所を通らなければなりません。高価な荷物も運びます。グラセン様はゼルムにいくと、いつも彼等の馬車に同乗させてもらっているんです。」

グラセンは、ずずっと熱いお茶をすすった。

「私は旅には、お金はかけませんよ。運び屋さんに荷物として、安く乗せてもらってるだけです。」

シエラは小さく笑い、ミランダから茶菓子をもらった。そつと口にふくむ。ほんのりと甘い素朴な味がした。シエラの目から急に涙がこぼれた。

「ごめんなさい。悲しくないのにどうして。」

グラセンが、ハンカチをとりだした。

「お泣きなさい。無理をしなくてもよいのですよ。ずっとがんばってこられたでしょう。今は泣いてよいのですよ。」

「私、だめですね。涙なんか、兄様達が亡くなられた時、なくなっ

てしまったと思ったのに。ライアス兄様が生きてさえいたなら、私なんかよりも、ずっとたよりになったはずなのに。」

「亡くなられた人を考えても、どうしようもありませんよ。あなた様でよいのですよ。ありのままのあなた様で。ですから今はお泣きなさい。」

グラセンは、骨ばった手でシエラの涙をハンカチでやさしくなでた。シエラは、まだ十七でしかない。少し泣いたあと、シエラはおちついた。

「グラセン様、私、王子様をさがしてみようと思います。今、必要なのは、この島をまとめあげる王です。」

ライアス兄様の話では、父は生前、王子様をさがしていたそうです。もちろん、悪い意味です。父の跡をついだライアス兄様もさがしていましたけど、見つける事ができなかったのです。

私なんかではとても無理だと思いますが、ベルセアにつくまでの間、このゼルムをさがしてみようと思います。ライアス兄様は、王子様は、ゼルムにいるのではないかと考えてたようですから。」

グラセンは、うなずいた。

「何もしないよりは、何か行動をおこしたほうがよいでしょう。ミランダ、あれを。」

ミランダは、はいと返事をし、グラセンの荷物から何かをとりだした。布につつまれているが、どうやら小さな片手剣のようだ。グラセンは布をほどき、むき身のままの、銀色の剣をシエラにさしだ

した。

「これは宝剣です。ですが、武器としては小さく、まったく切れません。儀式用と考えてくださればけっこうです。」

シエラは、剣を、おそろおそろ手にとった。銀でできていると思ったが、色合いが銀よりもずっと明るい。白金だった。そっと刃に指をあてる。

「切れない。すごく切れそうなのに。宝剣とおっしゃいましたよね。これを私に？」

「それは、ダリウス王家の物です。伝説の女王ミュティカが、エイシア解放のために、女神からたくされた神剣だとされています。数年前に、私がゼルムの古物商で見つけました。」

どういう経緯で、ゼルムまで流れてきたのかはわかりませんが、これはまちがいに本物です。いろいろ調べた結果、本物だと断定しました。

私もあなた同様、王子は生きていると信じております。王家の剣が焼け落ちず、こうして無事だったのならば、持ち主である王子もかならず生きているはずです。さがしてください、あなた御自身の目で。その目で見つけてください。」

シエラは、刀身をながめた。持つ手がほんのりと暖かいのは気のせいだろう。

やってみようと思った。可能性があるのなら、ぎりぎりまで賭けてみよう。グラセンは、シエラの手をとった。

「もう、お休みください。となりにお部屋を御用意しています。今夜は、ぐっすりとお休みください。ここ、ゼルム北部のリクセンからベルセアまでは、一カ月の長旅となりますからね。」

シエラは、剣を返そうとした。グラセンは、それをおしとどめる。

「あなたが持っていてください。そして、王子を見つけたあとは、あなた様の手からそれを返してください。ドーリア公のまいた種は、そうしてでしか刈り取れませんから。」

シエラは、静かにうなずいた。

夜遅く宿へもどってきた金髪の青年レックスは、まんじりともしない夜を、ベッドですごしていた。

居酒屋にいるはずのマーブルは、町の居酒屋という居酒屋をさがしても見つからなかった。たぶん、居酒屋で仲良くなった女の家で朝まで過ごすつもりだろう。めずらしくない事だった。

レックスの本名は、アレクシウス・ダリウス・レイと言った。レイは、王都マーレル・レイにもあるように王家の称号だ。光とか栄光とかいう意味もあり、由緒ある王家への敬称にもなっている。

レックスは、十三年前に行方不明になった、マルガリーテ女王の息子だったのである。

グラセンは、ダリウスから逃げてきた親子を、ずっとかくまっていた。マルガリーテ女王とドーリア公との王位争いするとき、時のベ

ルセア法王を動かし横槍を入れさせ、マルガリーテ王女を即位させたのは、このグラセンでもあった。

なぜ、マルガリーテ王女だったか。グラセンは、学問や神秘術、占星術、その他諸々に通じており、いろいろ試した結果、ドーリア公よりもマルガリーテ王女と判断したからである。

（大きな災いが、海を越えてこの島へとやってくる。その災いをしりぞけ、時代を変える英雄が、マルガリーテ王女の子だ。この子を王にしよう。それに、マルガリーテ女王は短命と出ている。この子が王とされる日は、そう遠くはない。）

グラセンが、マルガリーテ王女を女王にしたのは、レックスを王にするためだった。だから、問題のある王女でもかまわなかった。真のねらいは、王女の息子にあったのだから。

そして、グラセンの予言は当たった。ドーリア公の反乱による女王の死と、バテントス帝国の襲来である。

レックスは、起き上がり宿の外へと出た。そして、宿の裏口から、せまい路地へと出て、ゴミゴミとした街角から天にかかる月を見上げる。そして、ため息をついた。

逃亡生活が長かったせいか、レックスには王都マーレル・レイで過ごした記憶がない。自分が王族だという自覚もない。勉強もきらいで、読み書きはほとんどできず、生活一般も父親にたよりきっていたので、世間の事は年齢のわりには分かってはいなかった。

レックスは、こんな自分では、王都へ帰っても、なんにもできないと考えていた。そんなレックスにグラセンは、賭けを持ち出した

のである。

「アレクス様、一つ、このジジイと賭けをなさいませんか。シエラ様がベルセアにつくまでに、アレクス様を行方不明の王子だとお分かりになられたら、すなおにシエラ様と御結婚し、マーレル・レイへとおもどりになられて下さい。

だが、お分かりになれなかったら、シエラ様と御結婚するもマーレル・レイへもどられるのも、アレクス様の御判断におまかせします。」

ムカつく言い草だったが、シエラが自分がそうだと見抜ける可能性は低い。なにせ今の自分は、下町の一般庶民と変わらないのだから。

（グラセンのやつ。ダリウスとクリストンの関係修復には、シエラと結婚するのが一番だと言ってたっけ。ほんと、身分の高いやつと結婚てやだな。何もかも政治がらみだもんな。）

結婚については抵抗はない。年齢的に当たり前の事だから。だが、いくら関係修復の為とは言え、さすがにいい気はしない。そして、父親のマーブルでもある。だが、グラセンがこうと決めて、まちがいだった事は、今まで一度もなかった。

（けど、実際見たシエラは、かなりかわいいな。いや、かなりなんてものじゃない。上品でフンワリしていて、何かこう、守ってやりたいって気になってしまう。あんな女の子、はじめてだ。やられた。）

グラセンのしたたり顔が目にかげ、レックスは思わず、近くの

ゴミ箱を乱暴にけりとばした。くさった魚の臭いがツンと鼻をつく。ふと気がつく、そばにシエラがいた。レックスは、びっくりして後ずさりをした。

「な、なんでここに。夜中だぞ。」

「君も夜中なのに、ここにいないか。」

レックスは、シエラが王家の剣を持っているのに気がついた。シエラは、

「これ？ グラセンからあずかったんだよ。あとで君にわたさせてさ。なんなら、今わたしてもいいけど。」

レックスの頭から血がひいた。まさかもう？

シエラは、にやにやしている。

「くさいね。ゴミ箱にあたるもんじゃないね。うわ、魚の内臓すててんのか。これ、塩きかせて発酵させれば、いい酒の珍味になるんだけどだね。このあたりじゃ、ただのゴミか。もったいないね。」

レックスは、違和感があった。グラセンの部屋で見たシエラとは、あきらかに様子がちがう。シエラは、

「気がついたみたいだね。ぼくは、シエラじゃないよ。まあ、シエラって呼んでもいいけどね。ね、ぼくがだれか当ててみてよ。ぼくが君を一瞬で見抜いたようにさ。」

「一瞬、一瞬で見抜いたって言うのかよ。おれがだれか。」

「うん、わかった。だって、ぼくはずっと君をさがしてたんだもの。ごめんね、ぼくのバカな父親のせいで、君にこんな苦勞をさせちゃってさ。でも、安心して。ぼくが、君を立派な王様にして、マーレル・レイに帰してあげるから。」

「お前、だれだ？」

「わからないか。無理ないね。ぼくは生前、君と面識がなかったから。」

生前？ こいつ、憑き物か！ レックスは、ゾツとした。

「フフ、ぼくはライアス。シエラの兄さんだよ。バテントスに負けて死んじゃったね。ほら、あの大砲に当たっちゃってさ。あっさり即死。苦しみ間もなくてさ。でも、すなおにあの世に逝けなかったんだよ。」

なんで逝けなかったって？ 君が気にかかってたんだよ。どうしても君を見つけて、王様にしてあげたくてさ。別に父親の罪がどうこうじゃないよ。ぼくが、そうしたいと思っただけ。それで悪いと思っただけ、シエラに憑いたんだ。シエラはもちろん、ぼくの事は知らないよ。

内緒にしてってくれるかな、みんなにさ。それに、グラセンは坊さんなんだから、ぼくがいるって知ったら、イクソシズムしちゃうよ。ね、たのむよ。ぼくは君の力になりたいんだ。」

いくらなんでも、これは怖い。レックスは、話の半分も耳に入ら

ない。ライアスは、困ったように首をかしげた。

「まあ、今晚はこれくらいで勘弁してあげるよ。初対面だしね。でも、なんで君が十三年も行方不明か理由がわかって安心した。ドリア公が死んで、ぼくの代になっても姿を見せなかったのは、君がとてもしゃべり・レイへ帰せる、いや王族にもどせるだけの王子様ではなかったから。」

レックスは、カッとした。

「幽霊だからって、言っている事と悪い事くらいあるはずだ。全部、お前らのせいじゃないか。おれがこうなったのも。どうせおれは、読み書きもできない、世間知らずの甘ったれたガキだ。」

おれは、シエラと結婚なんかしない。マール・レイにも帰らない。このゼルムでただの男として生きていく。だから、さっさと成仏しろ。お前の御執心の王子なんて、どこにもいないんだからな。」

ライアスは、ため息をついた。

「とりあえず、この剣はあずかっておくよ。シエラは、君に一目惚れしたみたいだよ。あまり、冷たくしないでほしいな。妹が傷つくのは、これ以上見たくないからね。」

ライアスが持つ剣が、路地の影にもかかわらず、キラリと光ったような気がした。ライアスは、その場にレックスを残し、静かに宿へと入っていった。

二、ベルンの事件（1）

バテントス帝国に護送される途中、救出されたシエラは、グラセン、ミランダとともに、レックスとマーブルが運びの仕事に使っている幌付きの荷馬車で、ベルンという要塞の町へとやってきた。

ベルンは、要塞の名のとおり、ゼルム軍が駐留している。が、ベルンは、交通の便がよいことから、ゼルム北部の商取引の中継地としての役割も果たしていた。

「ここはもともと、クリストンの襲撃にそなえてつくられた場所だ。お姫様の国から、悪い軍隊がゼルムへやってきた時、迎え撃つためさ。今は、クリストンのバテントス軍をにらんでいる最中だ。」

馬車をかりながら、マーブルは意地悪く言う。マーブルのシエラへの態度は変わらない。冷たくよそよそしい。シエラがたすけてくれたお礼を言っても、銃の威力をためしたかっただけ、である。

レックスはマーブルのとなりの御者席で、長い金髪を風にゆらしたまま、だまっていた。おとといのリクセンでのあいさつ以来、レックスが言葉を口にしたのを、シエラはきいていない。

ベルンが近づくにつれ、マーブルはベルンの様子がいつもと違う事に気がついた。

ベルンは戦争のためにつくられているから、町の周囲を頑丈な壁でおおっている。何百年ものあいだ、壁の補強には念には念を入れ続けたせいで、今では鉄壁の防御を誇るまでになっていた。

出入り口の門も、街道のそつての南北二つだけで、その門には門番がいつもいる。その門が、いつもより監視がきびしい事に、マーブルは気がついたのである。

馬車に緊張が走った。シエラの逃亡が知られたのか？

門番の兵士は、

「顔見知りのあんたの身分証なんて、ほんとは必要ないんだけど、以前から、この近辺を荒らしていた盗賊を、やっと昨日になって軍が取り締まったんだ。なかなか、つかまらない盗賊だったんだよ。」

盗賊の親玉は、なんとか生け捕りにして、軍の牢屋にブチこんでおいたけど、手下の何人かは逃がしちゃってね。明日の見せしめの公開処刑までに、逃げた手下が親玉を取り返しにベルンに侵入しないか監視してるんだ。」

兵士は、マーブルに身分証を返すついでに、荷台のシエラを見てニヤニヤした。

「かわいい娘さんをのせてるね。レックスの嫁さんかい。で、そっちの黒髪の美人は、あんたのアレかい。いいねえ、両方そろっておめでたいことで。」

「くだらねえこと言ってんじゃねえ。娘は、たしかにレックスの嫁だが、黒い方は、この馬車を足代わりにコキつかってる、荷台の坊さんの使用人なんだよ。この坊さん、あんたも見覚えがあるだろ。娘は、黒い方の遠縁なんだ。リクセンからもらってきたんだよ。このままナルセラまで行って、結婚式って寸法さ。」

「ナルセラで結婚式ね。ゼルムの首都で式って、運び屋家業のあんたでなきゃできないことだ。うらやましいね。さ、行った行った。次！」

マーブルは、馬車と進めた。盗賊の親玉の公開処刑とはおだやかではないが、とりあえずホッとする。ミランダが、

「あいかわらず、口がうまいのね。シエラ様の事をきかれたら、どうしようかと思ってたけど。」

「軍がうるさいベルンなんざ、ほんととは通りたくもなかったんだが、シエラを安全にベルセアに連れて行くには、身分を偽装する必要がある。ここの運び屋組合で、シエラを組合員に登録してもらおう。」

ここの組合長は、おれのなじみで融通がきくんだ。他の町の組合で登録するよりも、あれこれ、きかれなくてすむ。シエラ、組合はもうすぐだ。適当な名前でも考えておけ。お前は書類に偽名を書くだけでいい。いっさい、口をきくな。あとは、おれがやる。」

あいかわらず怖い口調のマーブルに、シエラは冷や汗をかいてしまう。シエラは、御者席のレックスを見た。レックスは、無言のまま座っていた。

グラセンが、やさしくシエラの肩をたたく。その目は、マーブルは気にするなと言っている。だが、シエラは、やるせない気持ちになった。自分は、マーブル同様、レックスにきらわれているのではないかと思ってしまう。

ベルンは、壁の中の町らしく、道はどこもせまくせせこましい。ごちゃごちゃとした建物や人が、ひしめきあって生活している感じ

だ。

「シエラ、組合で登録が終わったら、ミランダと、この町を見ておけ。まだ夕方までには時間がある。あんた、今まで雲の上での生活だったろ。庶民の暮らしがどういうものか知らなきゃならない。」

この町は東と西にわかれている。ここは東だが、西は軍の町だ。一般人も出入りしているが、この町の住民でないお前は近づくな。ミランダ、宿はいつもの場所だ。夕飯は、すませてくるんだ。」

「うっさいわね。そんなに命令口調でなくてもいいでしょ。私は、あんたの家来になったおぼえはないんだからね。レックス、案内は、あんたがしてあげなさい。私は、あんた達を見失わないようについていくから。」

「なんでおれが。おれは組合で仕事があるんだよ。ナルラセまでの荷物を形だけでも積んどかなきゃ、あやしまれるだろ。」

レックスは、露骨にいやな顔をした。シエラは、泣きたくなくなってしまった。ミランダは、

「そんなの、マールブル一人で間に合います。あんた、組合にいたって、めんどろな事務手続きはしないでしょ。」

「悪かったな。けど、案内はいやだからな。」

「バカ、偽装のためよ。シエラ様は、あんたの花嫁よ。カップル演じなきゃ、あやしまれちゃうわ。」

レックスは、ムツとした。が、これ以上、下手に逆らっても、口

ではミランダに勝てない。

「わかったよ。カップルでもなんでも演じてやる。けど、その分、割り増し請求してもいいんだよな。そのお姫様のベルセアまでの運び賃に足してな。」

シエラは、しゅんとなっていました。ミランダは、困った子、とつぶやく。

馬車は入り組んだ道を進み、組合に到着し、シエラはそのまま組合長に紹介され、マーブルの指示通り登録をすませたあと、レックスとともに組合から外へと追ひ払われてしまった。

そのあと、マーブルは、ナルセラ行きの荷物を多少積み、荷馬車と馬を組合にあずけ、グラセンとともに宿へと徒歩で向かった。

道すがら、グラセンは、

「あなたのお気持ちはわかります。けど、それは父親の罪であって、娘は関係ありません。ウォーレン。」

「ウォーレンは、やめてくれ。とつくの昔に捨てた名前だ。ああ、頭じゃ分かってるよ。けど、おれと息子を宮殿から脱出させた時のマール（マルガリーテ）の顔が忘れられねえんだ。おれは、女王なんてやめておけと言ったんだよ。親子三人で静かに暮らそうってな。なあ、グラセン、なんでマールなんか女王にしたんだ。バカだと分かっているな。」

「なんども申し上げたでしょう。私は、時間の流れのなかで物事を決めています。今の最善ではなく、結果としてどの選択が最善であ

るか、さまざまな角度から見極めているんです。

マルガリーテ様は、たしかにお気の毒でしたけども、それも時間の流れのなかで起きた事。あなたには、まだ御理解できないでしょうけども、いずれ、この選択が正しかったとわかる時が必ずくるはずです。」

マーブルは、うーんと背伸びをし首をコキコキさせた。

「あいもかわらず、むずかしいお言葉でして。おれにとっては今がすべてなんだよ。あの、たよりないレックスをどうやって一人前にするか。嫁をもらえば、大人になるんじゃないかと言ったのは、あんただぜ、グラセン。」

「シエラ様は、やはり気に入らせぬか。」

「おれの意見なんか、どうでもいいんだよ。あのバカが気に入ってくれて、シャンとしてくれれば、それで上出来。あんた、わたしんだろ。あの剣を。」

グラセンは、うなずいた。

「シエラ様は、ミランダにあずけてしまいましたけどもね。」

「気がつくのかね。にぶい小娘にしか見えないが。」

「決意は固いようですよ。まあ、気がつかなくても、アレクス様のお気持ちが固まれば、それでうまくいきます。だから、ミランダも、アレクス様に案内するよう言ったのです。」

マールは、ため息をついた。

「マールと初めて会ったのは、ダチの誕生パーティだったな。お忍びで女友達ときてたんだよな。身分違いの大恋愛が始まったんだよな。おれもいつたい、あの女のどこに惚れたんだが今になってもさっぱりだが、気がついたらもう後戻りできなくなっていた。」

マールの父親に、おれ達の関係がばれてしまい、しかも妊娠というオマケつきだったから、大慌てで結婚させられたっけ。バカ王女が自由奔放したあげく妊娠して、身分の低い男と結婚したって、マール・レイ中の笑いものになったのが昨日の事のようにだ。

でも、やっぱり王女様は王女様だったな。つつましい、マール・レイのおれの家じゃあ、しょせん収まりきれなかった。女王になって宮殿に帰って、大喜びしてたんだよな。ほんと、バカな女だ。」

それきり、マールは何も言わなくなった。二人は、無言のまま宿へと向かった。

一方、レックスはシエラとともに適当に町をブラついていた。町は、どこに行っても似たような景色で、あいかわらずゴミゴミとしている。

「あ、あの、レックスさん、どこに向かっているんですか。さっきから、同じ場所ばかり歩いているような気がします。」

「この町の景色は、どこもおんなじなんだよ。行きたい所があるのか。」

「教会は、ここから遠いですか？ 休憩をかねて、少しお祈りしたいです。」

ついてこい、それだけ言うと、レックスはさっさと行ってしまう。シエラは、ゴミゴミとした町中を、レックスを見失わないよう必死でついていった。

そこは、小さなベルセア教会だった。十人も入れば、満員になってしまう小さな教会である。今はだれもいない。

「おれの知っている教会は、ここだけだ。ここは、いつもの宿が近いからな。おれは宿に向かう。夕飯は、ミランダと食べばいい。ミランダは、おれが消えれば、すぐに出てくるはずだ。」

シエラは、教会のイスにペタリとすわった。すぐくつかれた。レックスは宿に向かうと言ったが、そのまま教会の壁に背をもたれ、ムツとしたように目をつぶる。シエラは、レックスを見つめた。

（よく見ると、この人すごい。背が高いだけじゃない。肩や胸の筋肉がすごい。運び屋さんは重労働だし、それでこんなにきたえられたのかな。力もそうとうあるはずだわ。ライアス兄様も、見た目はほっそりしてたけど、すごく強かった。）

けど、とてもきれいな顔をしてる。ライアス兄様ほどじゃないけど、目鼻立ちがきれい。髪の色も濃い金色だわ。兄様も金髪だったけど、色なら、この人のほうがあざやかだわ。やだ、私、恋したのかな。ずっと気になってるし。）

レックスがいつのまにか目をあけ、こちらをにらんでいる。シエラは、あわてて祭壇にむかい祈り始めた。レックスは、ふたたび目

を閉じた。

（何やってんだ、おれ。なんで、祈りなんかにつきあってんだ。一人で飯食って宿に向かうつもりだったのによ。）

「じゃあ、ばくとおしゃべりしようよ。シエラ、少し眠らせたからさ。」

レックスは、ぎょつとして目を開けた。シエラが子犬みたいな顔をして、自分を見上げている。

「お前、また幽霊か。なんでシンセイな教会なんかに出てくるんだ。ここは、神様のリョーイキだろうに！」

「べつにいいじゃん。どこでだってさ。でも君、リクセンとちがって、今日は怖がらないね。」

「怖いにきまつてるだろ。幽霊だしな。」

「なんか、ヤケクソみたい。なんでそんなにイライラしているの？」

「なんでって、お前、幽霊のクセにわからないのか。」

ライアスは、ため息をついた。

「君の本音なんて、バカでも分かるよ。シエラが気になってしょうがない。けど、グラセンやマーブルのおもわくにはまるのもいやだ。君は、十三年前の事なんて、たいして気にしてないだろ？」

「おれが、なんでシエラが気になるんだ？ たしかに、おれは十三

年前なんて、どうでもいい。おぼえてないんだからな。いらいらしてんのはな、おれは教会のふんいきがきらいなだけだ。」

「なら、さっさと出て行けばいい。ほんと、困った坊やだね。壁によりかかってないで、そこにイスにすわろう。立ち話じゃあ、おちついて話なんかできないからね。」

レックスは、うごかなかった。ライアスをにらんでいる。

「おれ達の話は、ミランダがどこかできいてるぞ。お前が幽霊だと知られたら、グラセンにつつぬけになって、イクソシズムだ。」

ライアスは、笑った。

「ざんねん、彼女には、ぼく達の話は聞こえない。ここで何が起きているのか、外部からは察知できない。ぼくが、結界を張ってるからね。」

ライアスに手に、一本の剣があらわれた。これはたしか、ミランダにあずけている王家の剣だ。

「おどろいた？ この剣はね、本物の神剣なんだよ。ぼくは君をさがすと同時に、この剣の行方もずっとさがしてたんだ。グラセンの方から持ってきてくれてありがたかったね。」

「お前、魔法つかったのか。いきなり、お前の手にあらわれたぞ。それに、神剣だって？ ミュティカの神剣だって伝えられているだけで、ミュティカが使った本物かどうかもはっきりしないんだぞ。」

ライアスは、教会の天井画をながめた。翼のある白馬に騎乗した

女神がそこにいた。ライアスは、天井画を見上げながら、静かに口を開いた。

「天かける乙女、女神ミュティカ、または建国の英雄。千年前、大陸に支配されていたエイシアを、奇跡の剣と現王家の紋章となっている二つの首を持つ巨大なドラゴン、双頭の白竜を使役し、大陸の支配を断ち切った英雄と伝えられている。

現ダリウス王国は、彼女から始まったとされ、彼女の子孫であるダリウス王家に、代々、この剣はうけつがれてきた。この剣は、エイシアの宗主である証だ。

だから、グラセンは、この剣をシエラにわたしたんだよ。クリストンが君からうばったものを、君へと返すためにね。」

「おれは、王様にならないと言ったはずだ。」

「ミュティカは、今では伝説となっていて、その実在すらはつきりと分かっていない。歴史にも教会の教義にも、そういう英雄がいたというだけで、それ以上の記録は無い。

けど、ミュティカは実在した人物だ。それに、この島は、千年前に大陸の支配から独立したんじゃない。もっと古い時代だ。千六百年、いや千五百年前だろうね。ぼくの記憶が正しければ、それくらいたっているはずだ。

五百年単位で歴史が縮められてしまったのは、当時の記録があまりなかったせいかも知れない。それとも、削除せざるをえない理由があったかだ。今となっては調べるすべもないがね。」

「お前、何言ってるんだ？ 歴史のお勉強なんて、おれはやだぜ。」

レックスは、うんざりしたように口をとがらせた。

二、ベルンの事件（2）

ライアスは天井画から、祭壇にある二つの神像に視線をうつした。男女の神像だ。

「天空の神ダリウスと、大地の女神ベルセア。世界の創世神だ。神話では、二人の神は世界を創世するにあたり、それぞれ役割を分担したという。

ダリウスは空を創造し太陽と風を創り、天空の神となり、ベルセアは大地を創造したあと、大地の女神となって、地に人を満たし人の母となった。世界は、この二人の神から始まったとされ、人の母である女神の名をもらいベルセア教会がつくられ、そこに天空の神ダリウスを奉ったとある。」

ライアスは、目をつぶり、両手でしっかりと剣をにぎりしめた。かすかに剣が光っている。

「だんだん思い出してきた。なぜ、ぼくが君に執着していたのかもね。この剣をにぎりしめていると、記憶の底にしずめられた古い記憶がよみがえってくる。

建国の英雄ミュティカは、この二人の神から産まれた娘とされ、国教会では、ダリウス、ベルセアにつぐ地位を持つ女神であるが、現実には、ごくふつうの両親から、ふつうの娘として産まれたんだよ。

そして、女神ベルセアから、ミュティカ・ダリウス・レイ、つまり、栄光あるダリウス神の娘としての意味を持つ名をもらい、歴史

の表舞台に出てきたんだ。

「ぼくが、ライアスとして生きる以前の記憶。彼女は、ミュティカには、人間の親と魂の親の双方がいた。この世的な家族の絆を持つ両親、そして、魂の親である存在。それが天空の神と大地の女神、ダリウスとベルセアだったんだ。」

だまって聞いていたレックスは、聞きつかれたように頭をかいた。

「何が魂の親だよ。人間だったら、みんなそうじゃないか。世界と人間をつくったんだからな。国教会でも、この世の人間はみんな、この世界を創造したダリウスとベルセアの子だって教えてるんだしな。」

ライアスは、目をひらいた。

「ダリウスとベルセアも人として実在したんだよ。ミュティカよりも、もっと古い時代にね。ダリウスとベルセアは夫婦だった。二人して、数百人の一族をひきつれ、この島へとやってきた。そこから、この島の歴史が始まり、一時的に大陸の支配を受け、ミュティカが解放し今に至った、と言うのが真相だよ。」

「しょせん神話だ。実在も真相も何もないさ。お前がそう信じたかったら信じればいい。おれは坊主じゃないし、教会もきらいだしな。とりあえず信者になっているけど、産まれた時に自動的に洗礼を受けさせられただけだ。もういいよ、話がずらされた。なんの話をしてたんだっけ。」

「この剣の真偽についてだよ。この剣は本物だよ。ミュティカが実際に使った、本物の神剣なんだよ。この剣の本来の持ち主である、ミ

ユティカの事を話すついでに、君の歴史認識を調べただけ。グラセ
ンは、最低限の知識は教えてたんだね。」

「おれの事、バカだと思ってるんだろ。」

「事実、バカじゃないか。こうして話していても、知性のカケラも
感じられないし。」

レックスは、ムカツときたがこらえた。ライアスは、

「この剣はね、魔法の剣なんだ。何せ、女神ベルセアがミュティカ
を守るために与えた神剣なんだしね。ちょっと持ってるらん。ふつ
う、剣は持つと冷たいよね。」

レックスは、さしだされた剣をしぶしぶにぎった。大柄なレック
スが持つと、小さな剣はまるでオモチャだ。

「ほんのり、あったかいな。お前がさっきから持ってたせいじゃな
いのか。」

「そう判断されても反論できないね。にぎりしめてたもんね。じゃ
あ、こうしよう。剣よ、熱くなれ。火のように熱くなれ。」

ライアスがそう言ったとたん、レックスの持っている剣が、熱湯
のように熱くなり、思わず放り投げてしまう。

「あっちい、ヤケドする。急に熱くなったぞ。」

手をフーフーするレックスの前で、ライアスは床に転がった剣を
手にとった。そして、レックスにさしだす。

「もう、熱くないよ。」

剣は、ヒンヤリしていた。ライアスは、

「なんとも言っている通り、本物の神剣だからだよ。まあ、知らなくても無理ないよ。この剣が王家の剣となってから、千年以上もたっているしね。けど、グラセンは、この剣の正体にすぐに気がついたようだ。」

こうして、シエラを救出できたのも、この剣でバテントスの動きを知る事ができたから。そして、君達がドーリア公から逃げ続けられたのも、この剣のおかげ。どうりで、あれだけさがしても、だれも君達親子を見つけられなかったわけだよ。」

レックスは、剣を少しながめたあと、ライアスにわたした。

「グラセンが、その剣をよくいじくってたのは知ってたが、そんな剣だったなんて知らなかったよ。本物かどうかはともかくとして、不思議な剣だったのは分かった。なあ、それ、おれでも使えるのか。」

「興味が出てきたの？ 今は使えないね。霊能力の持ち主でなければ使えないんだよ。グラセンが使えたのは、彼が強い法力を持っていたからだ。」

「じゃあ、なんでお前は使えるんだ。幽霊だからか。」

「幽霊だからじゃないよ。並の幽霊じゃあ、この剣はビクともしない。クリストンのライアスはね、霊能力を持ってたんだよ。びっく

りさせるといけないから、本人はかくしてたけどもね。」

「もういいよ。なんかつかれてきた。グラセンがなんでバテントスの動きを知ったのか、疑問に思ってたけど、そういうカラクリなら納得できる。前々から、不思議ジイサンだと感じていたけど、相手が坊さんだから、そういうモンだろうと思ってた。」

ライアスは、ニコニコとしている。レックスは、成仏できないほど不幸な死に方をした幽霊のくせに、なんでこんなにニコニコできるんだろうと不思議に思った。

ライアスは、

「ね、女の子だきしめたことある？ シエラ、かわいいだろう。きゅーっとだきしめるとき、かわいくてたまなくなるんだよ。ぼくが許可するから、今だいてごらん。」

「なんで、許可なんだよ。おれには、そんな気はない。それに、いくら女の子とはいえ、なんで中身がお前をだかなきゃなんないんだ。」

「練習だよ、練習。シエラ相手じゃ、君はムスツとしたままじゃないか。あーあ、シエラ、かわいいそう。マール同様、君にきらわれてると思うはじめてるし。」

レックスは、ライアスから顔をそらした。レックスは、女の子とつきあった経験はない。どうやって、女の子と接したらいいのか分からないし、第一、グラセンもおもわくもある。

ライアスは、

「とりあえず、だきしめてみて。一度、思いっきり近づいたら、少しは君のシエラへの気持ちもほぐれると思うよ。グラセンのおもわくなんて気にするなよ。結婚相手を紹介されただけだと考えればいい。世間一般の結婚もそんなもんだしさ。紹介されて、自分の意思でシエラを妻にすると決めれば、それでいいんだよ。」

「なんでそんなにうるさいんだ。お前も結局は、グラセンとおんなじだろう。」

「かもね。おんなじこと考えてるしね。けど、ぼくは、君の意思を尊重する。いやなら強制はしない。けど、正しい方向へは導きたい。それが、ぼくがここに残った理由の一つだ。」

そつぽを向いているレックスの前髪に、やさしい手がふれた。

「そんなに警戒しないで。ぼくは生きている人間ではない。君の前ではウソは言わないし、だましたりもしない。第一、幽霊がいくら君を応援したって、この世の人間は、ぼくを見ることができないから、だれからも感謝されたりしない。クリストンのライアスが生きていたら、君をたすけるメリットを考えたらうが、今のぼくはただの幽霊だ。」

レックスは、ライアスの手をはじいた。ライアスは、やさしく笑う。

「今日はおしまいにするよ。剣をもどして結界をとくよ。レックス、この剣はね、もともと、ぼくが持っていたんだ。生前、ずっとさがしていたと言ったろう。これは、ぼくの分身みたいな剣なんだ。手放したくないけど、今はしかたないね。ミランダのもとへ

おかえり。」

ライアスの手から、剣がすーっと消えた。

「呼べば、剣はすぐにでも、ぼくのもとへもどってくるのを、どうして生前、気がつかなかったのかな。これがあれば、もっと早く君を見つけれられたかもしれない。ううん、バテントスなんかに負けなかったかもしれない。ぼくはね、死にたくなかったんだよ。生きて、君の力になりたかった。」

ライアスは、祭壇にむかい目を閉じた。シエラが、ハツとしたように目を開ける。

「やだ、私、いつのまに眠っていたの。ごめんなさい。ずいぶん、時間がたったんじゃないかしら。」

「たいして時間がたってないよ。眠かったら、宿へ行こう。少し休んでから、夕食をとればいいさ。この町の店は、夜遅くまで営業しているからな。」

「う、ううん、平気。ちょっとウトウトしただけだから。ミランダさんといっしょに夕食にしましょう。レックスさん、お腹すいてるでしょう。」

「いや、おれは宿に帰るよ。マーブルから、明日の仕事の話をきかなきゃならない。グラセンといっしょだから、まっすぐ宿にむかったはずだ。」

シエラは、ちょっとがっかりした。ミランダは、教会の前で待っていた。

「ずいぶん、熱心にお祈りなさってたようですね。何をお祈りしてたんですか。」

「さがしている人が見つかりますように。でも、祈ってる最中、眠っちゃったみたい。」

レックスは、ミランダが持っている大きめの荷袋が気になった。ミランダは、グラセンの荷物と自分の荷物をまとめて、一つの大きな袋に入れてある。この中に、例の剣が入ってるはずだ。

「ミランダ、荷物ん中、ちゃんとたしかめてんだろうな。ジーサンの大事なモン、あずかってるんだろ。」

「あれの事？ 荷物あけるたびに確認してるわよ。それに、どうやって私の荷物を他人がさわれるの？」

ミランダは、何もするにしても隙のない女だ。貴重品をミランダにあずけておいて、盗まれたり無くしたりする事は無い。

シエラは、

「あれって、あの剣の事ですか。私、グラセン様からあずかったんですけど、あのような大切な物をずっと持つてる自信がなくて、ミランダさんに持ってもらう事にしたんです。レックスさん、あの剣の事は知ってますよね。」

「なんか、ごたいそうな物なんだろ。おれは、ただの運び屋だ。客であるジーサンの荷物なんか興味ないね。」

「そうですか。あの、私もレックスさんにとって、お客、なんですよね。」

ミランダが、レックスを見た。レックスは、そんなミランダをジロリし、

「まあ、大切な客だな。マーブルが、好奇心でたすけに行くくらいだからな。ちゃんとベルセアまで送ってってやるから安心しろ。」

シエラが、がっかりしたのは書くまでもない。ミランダが、もう少しやさしくしろと、レックスをつつく。レックスは、あとはミランダにまかせると言い、その場から退散するよう、宿へと直行してしまった。

マーブルが、宿にいた事はいたが、酒を持ちこんでおり酔っぱらっていた。レックスは、あきれた。

「まったく、仕事がおわったとたん、酒か女かよ。他にする事は無いのかよ。」

「あー、他に何するってんだよ。大人の男はな、仕事がキチッとおわったらな、酒と女以外に興味もたなくていいんだよ。」

「あんたみたいな大人になるつもりはない。それより、あんた、マジでシエラって考えてるのかよ。ずっと、うらんでたんだろ。」

マーブルは、酒ビンごとグイとやった。プハーツと酒臭い息をはく。

「お前の事は、グラセンにまかせてある。お前ももう十八だ。おれの出る幕はない。」

「あいっかわらず、いい加減だな。その場その場で、適当な言い訳つくって。この十三年、おれ達は、ジーサンがいなきや、まともに生きてこれなかった。ジーサンにいやと言えないのは、頭があがらないからだろ。」

けどな、いやなら、いやだとはつきり言えよ。こんな娘なんか、息子の嫁にする気はないってさ。それが言えないから、ねちねちシエラにあたってんだろ。大人の男のする事じゃないさ。」

マーブルが、カラの酒ビンをなげつけてきた。レックスは、あっさり受け止める。

「青二才が、一人前の口をきくな。ほんとにいやだったら、たすけになんか行かないさ。憎たらしいバテントスに、銃の威力を見せつけてやりたかったのは確かだが、それ以前に、お前の国を荒らしたやつらに腹がたったんだよ。」

「おれは、ただの運び屋だ。」

「お前は、マールの息子だ。ガキは、親の仕事をつがなきやなんないんだよ。」

「なら、運び屋でいい。」

二人は、フンとそっぱをむいた。マーブルは、

「なあ、レックス。どうするにしても、お前がしっかりしなきやな

らんのは確かだ。おれも、もう四十五だ。いつまでも、親のスネかじってんじゃない。」

「わかってるよ。けど、今のおれにどうしろってんだよ。運び屋はダメだと言うし、マーレル・レイもどったって、王様なんてできない。バテントスなんて、とても無理だ。」

マーブルは、頭をかいた。

「だよな。今のお前に王様なんてできっこない。宮殿で暮らしていた事すら覚えてないもんな。最初のころは、ドーリア公の追跡がしつこかったし、身分を捨てての逃亡生活だけで精一杯だったしな。」

ドーリア公が運よく死んでくれたと安心して、お前の反抗期がひどかったし、とてもじゃないが、マーレル・レイへもどせる状態じゃなかった。

運び屋も、グラセンの援助にたよるのにも嫌気がさして、逃げ回るついでに始めた仕事だったが、お前はそれにすっかりなじんじまったし、今じゃあ下町の男でしかない。」

「だから、身分の高い女と結婚させようとたくらんだのか。少しでも、もとにもどすために。」

レックスは、あきれたように言い放つ。マーブルは、

「まあ、王様の嫁は、ベルセアの僧侶階級からもらうのがふつうだよな。王様だけじゃあない、三国の領主もみーんなそうだ。シエラの母親もそうだしな。グラセンがシエラをすすめたのは、クリストンとの関係修復だけが目的じゃあないはずだ。シエラが王位継承で

きるから、お前の嫁にしちまえと考えたかもしれんし、他にもあるかもしれん。」

レックスは、ライアスの幽霊を思った。

「もし、もしもだよ。もし、クリストンのライアスが生きていてさ。バテントスに護送されるのが、シエラじゃなくライアスだったら、グラセンはたすけたのかな。」

マーブルは、酔っぱらった頭で少し考えた。

「お前の嫁にはできないな。けど、たすけたはずだ。ライアスもシエラとおんなじだしな。」

「ここへきたのが、シエラじゃなくライアスだったら？」

マーブルは、なんでそんなことをきく、と目線をする。そして、

「シエラよりは、たよりになるな。やつは、神童とまでウワサされた貴公子だ。お前の教育係りでも任命してやるかな。びしびしきたえてくれて注文つけてな。」

マーブルは、あくびをする。あと、二、三口飲んだら眠ってしまった。うだろう。そこへ、組合からの使いという男が部屋へ飛びこんできた。大変な事が起きたから、すぐに組合へきてくれと、半分眠りかけたマーブルを無理やり引っ張ってった。

二、ベルンの事件(3)

シエラとミランダは、マーブルと入れ違いにやってきた。シエラは、両手にいい匂いのする包みをかかえている。どうやら、屋台で仕入れたようだ。ミランダは、

「マーブル、あわててどこへ行ったの。窓あけてよ。この部屋酒臭い。」

部屋に入るなり、あきれたように室内を見回すミランダに、レックスは顔をしかめながら窓をあけ、酒ビンをかたづけた。シエラは、包みをテーブルに置いた。

「グラセン様は、おとなりのお部屋ですか。夕食を買ってきたので、みなさんで一緒にしましょう。レックスさん、マーブルさんはおそくなりますか。」

「組合に行ったんだよ。大変な事が起きたってさ。マーブルのやつ、荷物を積むときに壊してしまったかもな。」

ミランダが、グラセンを呼んできた。そのかん、シエラが包みをほどき、ミランダの荷物の中から皿などを取り出し分けていた。

「私、お水もってきます。お水もらうには、宿の人に言え方がいいんですね。」

「私が行きますわ。シエラ様は、すわっていてください。」

「いいえ、やらせてください。お世話になってますから。」

シエラは、そそくさと廊下へと出て行った。グラセンは、

「ずいぶん、気をつかわれていますな。まあ、だれかさん達の態度が冷たすぎますからね。」

「おれのせいだったのかよ。冷たいのはマールブルだろ。」

ミランダは、

「あんたも冷たいわよ。婚約者には、もっとやさしくしなきゃね。」

「おい、だれが婚約者だ。おれは、シエラと結婚するなんて、ひとつことも言っていないぞ。」

「はいはい、ベルセアまでは、まだ一カ月あるわ。レックス、あんた、水をもってくるのを手伝ってあげなさい。たぶん、裏の井戸に行けと言われてるはずよ。シエラ様、井戸の使い方わからないんじゃないかって。」

「無理やり二人きりにさせるな。くっつけようたって、そうはいかんぞ。おれは、おれの意味で物事を決める。」

レックスは、ボタンと部屋を出て行った。

ミランダの予想通り、シエラは井戸の前につつまっていた。井戸なんてさわった事がない。

（やっぱり、ミランダさんにたのめばよかった。私、なんにも知らないのね。でも、井戸つかえませんでしたって、お部屋にもどって、

レックスさんに、なんにもできない女だと思われるのもいやだし。」

やっぱりもだろう。見栄をはったって、水はくめない。裏口へもどろうとしたシエラを、おそう者がいた。シエラは、軽く悲鳴をあげ、あっさりと何者かに、その場からつれさられてしまう。

レックスが、裏口でシエラの悲鳴をきいたときには、シエラをかかえた男は、風のようにその場から去っていった。

「まさか、バテントスが？」

ミランダは、シエラに水をまかせたのが失敗だと思った。一人にしてはいけなかったのだ。グラセンは、

「いくらなんでも早すぎます。私達の足取りは、まだ彼らはつかんでいないはずです。このベルンの周囲に潜伏している私の部下達からは、バテントスを見かけたという情報はとどいておりませんからね。」

しかもこのベルンは、出入り口を軍が見張っています。バテントスが、ベルンに入ろうにも、今日のようにきびしければ、顔立ちや肌の色がちがうバテントス兵など、あやしまれてしまうでしょう。ミランダ、剣を。少し調べてみます。」

グラセンは、剣を自分のひたいにあてた。そして、しばらく目を閉じる。

「分かりました。シエラ様は今、北部の倉庫街へとむかっています。さらった男は、ゼルム軍の兵士です。どうやら、シエラ様の正体を知っての犯行ではないらしい。目的は、運び屋組合にあるみたいで

す。何かを運んでほしくて、その取引材料ですね。」

レックスは、びっくりした。

「取引？　ゼルム軍が人をさらってまで、なんの取引だよ。マーブルがさっき組合に行ったのもそれが原因か。」

グラセンは、意識を集中させた。

「あせらないでください。今、調べてますから。うーん、どうやら、運んでほしいのは、盗賊の親玉です。ゼルム軍の一部の兵士が、盗賊の親玉から買収され、軍の情報を流していたみたいです。親玉をベルンから脱出させるつもりです。」

そう言えば、ベルンの門で見張り兵が、盗賊は、なかなか捕まえられなかったと言っていた。情報が流れていたなら当然だ。レックスは宿をとびだした。ミランダが後を追う。グラセンは、少し頭をかいたあと、剣を見つめた。

（シエラ様を守るための偽装工作があだとなりましたか。身内の婚約者として、組合登録したのを利用してしまふなんて。）

組合にも、買収されている者がいるはずだ。でないと、こうも簡単にシエラに目をつけるはずがない。マーブルがいつも使う宿を知っている者の犯行だろう。

（ミランダの他にも部下を呼んだほうが良いですね。今、ベルン内部にいるのは、二人、ですか。一人はミランダの応援に行かせて、もう一人にはゼルム軍の内部を調べさせましょう。）

グラセンは、窓をあけ、なんらかの合図をした。グラセンは、見えない部下を呼ぶときに使う合図である。

一直線に北部へ向かうつもりだったレックスは、ミランダに説得されて、とりあえず組合へ行く事にした。マーブルも同じ用件で呼ばれているのなら、今ごろ、シエラをさらったとの脅迫がとどいているだろう。

組合事務所には、組合長とマーブルの他に、組合幹部と呼びにきた男が四人いた。レックスとミランダが顔を出すと、マーブルは苦い顔を二人に向ける。

「きたか。ったく、お前ら何やってたんだ？　なんで、フラム（シエラが登録した偽名）を一人にさせたんだ。」

ミランダは、

「私のミスよ。この町は安全だと思って油断したの。」

「どこかのガキが、小遣いもらって、ついさっき手紙を運んできた。娘を返してほしくば、夜半過ぎに北部の倉庫街、十八番倉庫へ馬車を持ってこいとな。十八番倉庫と言ったら、軍の倉庫じゃないか。」

「そこに、フラムがいるのか？」

レックスの問いに、マーブルはうなずいた。

「さらわれたのは、フラムだけじゃない。組合長の娘もだ。その件で、おれは引っ張られたんだ。それで、どうやってたすけるか相談

してたら、今度はフラムときた。」

組合長が言うには、人さらいは、マーブルを運び屋に指名してきたという。マーブルは、

「おれ達が、ベルンへきた時期が徹底して悪かったんだよ。今日きたばかりのフラムをすぐさま利用し、おれを指名したところを見ると、組合の中にも犯人とつるんでいるやつがいるはずだ。」

ミランダは、

「まずは、フラムさんと組合長さんの娘さんの安全が先よ。私が先回りをするから、あんた達は、指定されたとおり夜半過ぎに馬車できてちょうだい。」

「先回りするにもミランダ、お前一人で大丈夫か？」

「この町には、私の仲間が、あと二人しのびこんでいる。グラセン様は、一人くらい回してくれるわ。あんた達がくる時間に、倉庫街の入り口付近でまっているからね。」

ミランダの姿は、あつというまに見えなくなった。レックスとマーブルは、組合の倉庫に行き、自分達の荷馬車から、ナルセラ行きの積荷をおろした。マーブルは、

「暗くなっちゃったな。月明かりもないし、今夜は銃は使えないな。しょうがない、荷物にまぜこんで、ここに置いておくか。レックス、荒事になるぞ。覚悟はいいか。」

「覚悟も何も、人の命がかかってんだよ。あんた、さっきまであん

なに飲んでたんだぞ。まともに戦えるのかよ。」

マールは、荷馬車から片手剣を取り出し、ブンブンふりまわした。

「酔いはさめちまったよ。しかし、災難がついてまわるような娘だな、シエラは。たすけたと思ったら、これだ。」

シエラをさらった男は町民の姿をしていた。けど、顔は目以外かくしており分からない。シエラは、宿からさらわれたあと、近くにあった馬に乗せられ、人の少ない裏通りを走り、北部倉庫街へと連れてこられた。

ここは、商業基地であるベルンにあつまる荷物を、一時的に保管しておく場所だ。倉庫街には、軍の使う物品を、軍に納入する前に保管する倉庫もある。シエラが連れてこられた倉庫も、軍の倉庫の一つだった。

今は夜で、倉庫街には人はおらずガランとしている。シエラは、倉庫内にある、暗い一室に閉じ込められていた。そこには、組合長の娘もいた。組合長の娘まだ小さく、すっかりおびえきっている。シエラは、娘とだきあい、ふるえていた。

（シエラ様、シエラ様。）

自分と呼ぶ小さな声。ミランダの声が、暗闇のなかにかすかに聞こえてくる。

（シエラ様、今しばらくのご辛抱を。敵は武装しており、六人ばかりおります。なんとしてもおたすけますから待っていてください。）

ミランダは、どこかへと行ってしまった。シエラは、とりあえずホッとしたが、真っ暗闇の部屋に閉じ込められては、やはり不安になってしまう。

こういうときは、たいてい、たよりとなる人（シエラの場合はレックス）にたすけを求める事になる。シエラはおびえつつ、心のかで精一杯、レックスの名前を呼んでいた。

夜半過ぎになり、ミランダは、倉庫街の入り口付近で馬車を待っていた。

「シエラ様と組合長の娘さんが監禁されている場所は見つけたわ。私のもう一人の仲間が見張ってる。」

マーブルは、

「盗賊の親玉を、あの軍の牢屋から脱出させられるなんて、一般兵じゃあできないことだ。まさかと思うが、買収されてんのは下っ端兵士だけじゃなく、上官もなんじゃないのか。」

ミランダは、うなずいた。

「かもね。倉庫には、かなり強そうな兵士が六人ばかりいるわ。あれだけの兵士を、こんな短時間で選抜できるなんて、ベルンのゼル

ム軍の一部の組織が、まるごと盗賊の手下になりさがっている可能性があるわ。私達が、ベルンに入ってからの手際もよすぎるから、出入りのきびしいベルンからの脱出は、運び屋にさせるのが一番との計画がねられていて、あんたに白羽の矢がたったのかもね。」

マーブルは、歯ぎしりをした。

「運び屋組合のいったいだれが、盗賊の手下になってんだ。くそ、あそこの組合は、みんななじみの連中ばかりだ。」

「ねえ、組合長さんの娘さんは、いつから拉致されてたのかしら。二人が監禁されている部屋には、便器の他に毛布や食べかけの食事があったわ。」

マーブルの顔色が変わった。レックスは、

「マーブル、組合長はおれ達を盗賊に売ったんだぞ。どうするんだ。」

マーブルは、やや考えた。

「ミランダ、レックス、今の話はきかなかったことにする。」

レックスは、

「おれは許さないぞ。ここの組合長には、運び屋を始めたころ、いろいろと世話になったが、やっていい事と悪い事がある。」

「お前はだまっている。子供を拉致されれば、だれだって同じだ。組合長も被害者だ。そこんことを、よく考えろ。」

レックスは、ムツとして顔をそむけた。ミランダは、

「あんた達は、このまま馬車を手紙で指定された十八番倉庫まで運んで。敵は、六人のゼルム軍の兵士よ。倉庫の前に一人、中に三人、シエラ様が監禁されている部屋の前には一人。残り一人は、倉庫の近辺をうろついているわ。」

できるだけ、話を長引かせてちょうだい。決して、あんた達だけで、なんとかしようとしなくてね。あんた達が交渉しているあいだに、私が、監禁されている部屋の見張りをやって、二人をたすけます。」

私の仲間が、倉庫の外の兵士二人をころあいを見て倒して、倉庫にかけつけてからが本番よ。あんた達は、シエラ様と組合長の娘さんを馬車にのせて、そのまま逃走して。あとは私達にまかせなさい。」

マーブルは、

「盗賊の親玉も、六人の兵士のうちの一人なんだろうな。お前、親玉の顔を知ってるのか。」

「調べるヒマなんてなかったわよ。たぶん、倉庫内の三人の中の一人のはずよ。寄り道なんかしないで宿に行くのよ。そして、グラセン様の指示をあおいでちょうだい。」

「わかった。お前もじゅうぶん、気をつけろよ。」

マーブルは、馬車を出した。レックスは、汗ばんでいる手をギュ

ツと強くにぎった。

事は、ミランダが話したとおり、うまく進んだ。ミランダの仲間が血まみれの剣を持ち、倉庫に飛び込むと同時に、ミランダが二人の人質を連れ倉庫に現れ、三人の兵士達をかいくぐり、シエラと組合長の娘を馬車へとおしこむ。

そして、マーブルは、レックスとともに馬車を走らせ、倉庫入り口前の遺体と、やはなれた場所にあった遺体を確認しつつ、倉庫街から出ようとした時、荷台からシエラの悲鳴がきこえてきた。

いつのまにか若い男が一人のっている。

「このまま、ベルンから出る。」

ベルンの夜間の出入りは民間人は禁止されている。出入り口も閉ざされており、外へ出るのは無理だ。シエラを人質にとった盗賊は、懷から何かをだし、御者席へ投げつけた。

「軍の特別通行証だ。それがあれば、民間人でも夜間、外へ出られる。もっと穩便に脱出しようと思ってたんだが、はでにやってくれたおかげで、その通行証がむだにならずすんだ。まあいい。おれは、ずっと倉庫の荷物の中にかくれてたんだ。あんたらが馬車を出すと同時に飛び乗ったのさ。」

マーブルは、クソと思った。ミランダにしては、めずらしいくらい単純なミスだ。たぶん、この鉄壁の防御を誇るベルンの要塞が油断をうんだんだろう。

マーブルは、受け取った通行証をレックスにわたした。そして、

北か南かを盗賊にきいたあと、倉庫街を出て南に馬車を向けた。

マールブルは、目印のために自分の腰にさげていた手ぬぐいを落とした。ミランダがこれに気づき、どれだけ早くかけつけてくれるかが、運命の分かれ道だ。

「お前、歳はいくつだ。親玉と言うからには、もっと歳がいった男とばかり考えていた。」

男は、笑った。

「組合長が、えらんだだけはあるな。あんた、度胸がすわってるな。これなら、あやしまれずに出入りを突破できそうだ。」

「見たところ、二十半ばか。三十前だな。その若さで、軍まで買収するとはな。」

「ゼルム軍の給料は、いくら知っているか。何年か前に新領主に交代したら、軍の縮小が始まり、待遇もグッと悪くなったんだ。まあ、いくらおれでも、ベルンの軍を全部買収できない。外に出て仲間と合流したあと、クリストンに逃げて、今度はバテントス相手に仕事をしようかと考えている。」

マールブルは、チ、と舌をうった。馬車は、ガラガラとベルンの入り組んだ道を走り抜ける。もうすぐ、南の出入り口だ。レックスは、がまんの限界にきた。マールブルからたづなをうばい、乱暴にムチをあて、馬を暴走させ馬車を横転させた。

盗賊の親玉は、その場から逃げ出そうとしたが、レックスに足をつかまれ、力任せに建物の壁にたたきつけられ動かなくなった。

「バカ、レックス。あとさきを考えろ。早く逃げよう。このさわぎで、みんな、起きだしてくるぞ。馬車と馬は、このまま捨てよう。」

レックスは、気絶しているシエラを抱き上げ、マーブルは組合長の娘を背負い、走った。すぐにガヤガヤという声がきこえてくる。町を巡回している軍の兵士もやってきたようだ。

二人は、休むまもなく走り、ようやく宿へたどりついた。二人ともヘトヘトだった。グラセンは、

「シエラ様は、ひたいを軽くすりむいていますし、娘さんは、肩に多少の打ち身をしています。馬車を横転させて、これだけですんだのは奇跡でしょう。お二人とも、となりの寝室でよくお休みです。けど、アレクス様、なんという無茶を。馬車の事故はおそろしいものですぞ。万が一の事をお考えになってください。」

「盗賊の親玉は、やつつけたよ。軍もかけつけたことだし、親玉は生きていたとしても、もうおしまいだろう。頭にきて、バカやったのは悪かったと思ってる。けど、あのままじゃあ、ベルンの外へ出ていた。」

マーブルは、

「レックスがバカなのは、どうしようもない。けど、たよりのミランダも間に合いそうもなかったしな。ベルンの外へ出たらたぶん、シエラの命はなかったさ。走る馬車に飛び乗る身軽さなら、シエラを殺して、あっさり姿をくらますだろうしな。結果良しでカンベンしてやってくれ。そういや、レックス。お前にやった通行証はどうした。」

「まだ、持ってるけど。」

「アレクス様、それを見せてください。だれが発行したのか分かるかもしれません。あとで私の方から、この証書をつかい、ゼルム軍にゆさぶりをかけてみます。不正は正さなくてはなりませんのでね。」

マールは、ため息をついた。

「グラセン、すててきた馬車には、所有者名と運び屋の登録番号が焼印されているんだ。どうする。」

「それは心配ございません。軍は、まず組合に行きます。組合長が、こちらに軍がまわらないよう、うまく説明してくれます。そろそろミランダが組合についているはずです。娘さんもたすけましたし、馬車が壊れていたら、組合長さんに調達してもらいましょう。」

「ま、それくらいの事はしてくれなきゃな。娘をたすけた代金だ。馬車の用意ができしだい、ベルンから出よう。街道を南下し、予定通りナルセラに向かう。」

夜が明け、目をさましたシエラがレックスにだきつき、大泣きしたのは言うまでもない。よほどショックだったようだ。シエラは、レックスに胸のなかで、しばらく泣き続けていた。

三、ナルセラの襲撃（1）

その日、大雨が降り、一行は町に足止めされてしまった。雨は次の日も降り続き、三日目にやっと小雨になり、太陽が出たのはその翌日だった。この時期、ゼルムは秋の長雨の季節であり、こうして馬車の足がのびるのはめずらしくない。

雨でぬかるん道をしずかに進んで行くと、自分達よりも先に出発した馬車や旅人が、もどってくるのが見える。マーブルが話しかけると、旅人は、

「いやー、まいったよ。三日降った雨で橋が流されたんだ。このあたりには、橋は、あそこしかないだろ。今、この近くにいる軍が大急ぎで修理しているが、復旧はいつになるか分からないそうさ。」

マーブルは、疑問に思った。

「たしかにひどい雨だったが、あそこの川幅はけっこうあるんだぜ。橋が流されるほどの雨じゃあないと思ったがな。」

ミランダは、

「上流のほうで、雨はひどかったんじゃないの。ゆるんだ地盤がくずれて、大木でも流されてきたんじゃない。あの橋、橋脚は石だけど橋自体は木造じゃない。古い橋だったしね。しかたないわ、もどりましょう。」

マーブルは、少し考えた。

「遠回りしよう。橋は一本だけじゃない。シエラの事もあるし、一つの所に長くいるつもりはない。グラセン、それでいいか。」

「それでいいでしょう。お任せします。」

マーブルは、道を引き返した。そして、宿をとった町を通り過ぎたあと、進路を東へと向ける。そして、予定よりもかなりおくれ、やっとナルセラに到着した。

「いやはや、最初の予定では、すでにベルセアに到着しているはずですな。雨と橋のせいで、ずいぶんと時間がとられましたな。」

グラセンは、つかれたようにナルセラの町を見わたしていた。ここナルセラは、ゼルムの首都である。シエラは、はじめて見たナルセラに興奮をかくせないようだった。

「大きな町。クリストンの首都サラサとは、だいぶふんいきが違いますね。サラサより何かこう、いろいろなものが混じっている感じがするわ。活気があると言ったらいいのかしら。」

マーブルは、

「サラサは、そんなにでかい町じゃあないときいている。首都にしては、さびしい感じだと、向こうに仕事で行った事がある運び屋仲間が言ってたな。」

シエラは、

「サラサはどちらかと言えば、エイシアの田舎ですから。クリストン全部が、そんな感じだと兄様は言っていました。あの、兄様、ライ

アス兄様は、エイシアの国を全部訪問してますから。一番、活気があるのはカイルの首都マデラだと。」

「ライアスが、あちこち訪問したのは、ドーリア公の戦後処理のためだろ。ライアスの代になって、ドーリア公でこじれた関係を修復するために行ったんだろ。まあ、ごくろうなこった。」

シエラは、うつむいてしまう。自分が何を言っても、マールブルはこうだ。マールブルは、

「だが、マデラが一番だという意見には、おれも賛成だな。町もきれいで、住人の顔も明るい。マデラに比べたら、ナルセラなんて、いろんな人間が入り乱れているだけの雑多な町さ。」

「あの、マデラに行った事があるのですか。」

「昔な。少しだけ、いたことがある。そろそろ組合につくぞ。レックス、荷物をおろしたら、次の仕事はお前にまかせる。宿は、組合のとなりを使え。おれは、ちょっと用事がある。」

「おれにまかせるなんて、めずらしい事もあるんだな。ベルセア行きの荷物でいいんだな。なかったらどうする。」

「ベルセア方面に向かう荷物ならなんでもいい。積み込みは明日にしよう。仕事をとったら、お前達は宿に向かってくれ。」

レックスは、マールブルを見つめた。

「あんた、また嫌な事でも思い出したんだろ。遊びでごまかすのも、ほどほどにしろよな。」

マーブルは、レックスをにらんだ。

「ガキが、えらそうに言うな。明日の朝には帰る。」

シエラは、

「あの、私、何か気にさわる事でも言いましたか。もし、そうでしたら謝ります。」

「あんたは、何も言っちゃいないよ。いろんな事を思い出しすぎる、おれが悪いのさ。」

マーブルは、馬にムチをあてた。馬は、少し足をはやめた。

「後悔から、ぬけだせないのです、マーブルは。あなたの母上を見捨てた事を、ずっとくやんでいるのです。彼の時間は止まっているのですよ。十三年前から。」

グラセンは、宿でレックスにそう言った。二人部屋だったので、シエラとミランダはとなりだ。レックスは、

「やっぱり、まだ好きなんだな、おふくろが。おれは、どんな母親だったか覚えてないけど。」

「アレクス様は、まだ五歳かそこらでしたからね。たいそう、美しいお方でしたよ。」

「けど、頭の方は、たいした女じゃない、マーブルはそう言ってた

よ。おれ、母親似だとマールブルに言われているから、頭の方も似ちまったんだな。」

「それは、いいわけですぞ。最初から良い頭など、だれも持つてはおりません。神童と呼ばれたクリストンのライアス様の御努力ぶりは、実に有名でしたしな。」

レックスは、少しいやな顔をした。ライアスの幽霊は、ベルンの教会で会ったつきり、まったく現れてない。

「グラセン、ベルセアまでって賭けだったけど、もう一ヵ月になるし、その賭け無しにしてくれないか。だれかに強制されてじゃなくて、ちゃんと考えてみたいんだ。」

「なら、賭けは、やめにしましょう。大事な事ですからね。」

グラセンは、かすかにほほえんだ。レックスは、

「おれ、シエラといっしょに旅してきて、こうしていっしょにいるのが、当たり前のように感じ始めているんだ。気になるのは確かだけど、マールブルからきいている大恋愛という感じでもないし、けど、シエラがいなくなったら、何かこう心の一部がなくなってしまうような、そんな気もしている。」

あー、なんだか言ってて分かんなくなってきた。シエラが、おれの事、どう考えているのかも、よく分かんないしさ。ミランダは、もっと優しくしろとそればかりだし。うーん。」

レックスは、頭をかかえた。グラセンは、

「あせって答えを出す事でもありませんよ。自然にまかせればいいんです。私からミランダに言っておきますよ。」

グラセンは、すわっていたベッドから立ち上がった。

「アレクス様、私は少し、このナルセラに留まろうと思います。明日の出発は、私を待たなくてよろしいです。」

と言い、部屋を出て行こうとする。レックスは、

「ナルセラに、なんか用事でもあるのか。」

「はい。ベルンの件で。アレクス様からあずかっている通行証の件です。ここ数年、ゼルムでは作物の出来が悪く、税収が悪化しているんです。盗賊が横行しているのも、それが原因でしょう。」

ですが、軍が盗賊に買収されるのは問題です。軍事費の縮小が給料の極端な削減であれば、この先いくらでも似たような問題がおきます。まして今は、軍事費の削減などやっている時期ではありません。」

「ゼルムの領主に文句言いに行くのかよ。いくらあんだでも、領主がすんなり会ってくれんのかよ。」

「会うのは、軍を引退した知り合いの元將軍です。彼からなら、くわしい事情がきけるでしょう。必要であれば、彼を通して領主に会うつもりでいます。」

レックスは、笑った。

「あいかわらずだな、あんたは。逃げ場のないおれ達を引き取ったのといい、シエラをバテントスから、かつさらったのといい、怖いもの知らずだよ。なあ、グラセン、前々からきこうと思ってたんだけど、なんのために坊主であるあんたが、そこまでするんだ。」

部屋を出て行こうとした、グラセンの足が止まった。

「憂いは、できうる限り、取り除いておこうと考えています。ゼルムに開いた穴は、可能ならば、ふさいでおかなければなりません。そこから、バテントスに入られても困りますので。」

グラセンは、となりのミランダに声をかけた。レックスは、ゴロリとベッドに転がる。少しだけ開いている窓から、ナルセラのどんよりとした空が見えた。

グラセンは何を考えているのだろう。グラセンの勇気と行動力は賞賛にあたいする。けど、本心はどうだろうか。グラセンの行為は正義感とか、善意とか、そういうレベルから出ているだけではないような気がする。これは、マーブルも感じている事だ。

マーブルは、いつだったか、グラセンについてこう語っていた。

「あの、ジーサン。何、考えてんだろうな。なんか、おれ達は、あのジーサンの考えたシナリオにそって生かされているみたいだ。」

そう、自分達は、グラセンという一人の僧侶により生かされている。レックスの母、マルガリーテを即位させたのも、この坊さんだ。

レックスは、寝返りをうった。

（わかんねえな。おれを王にして、裏で権力をにぎるってんなら理解できるけど、グラセンにはその気がまるでない。あの坊さん、いったいなんの得があって、こんな事ばかりしてんだろ。一步まちがえば、自分の身もあぶなくなるのにな。）

そうこう考えているうちに、レックスは眠ってしまった。ふだんから考える事が、あまり得意ではないので、すぐにつかれて眠ってしまう。夕食もとらずに寝てしまったので、レックスは夜中に腹がすいて起きてしまった。

（やべ、真っ暗じゃないか。この時間にあいている店なんて、ナルセラにはないしな。ミランダのやつ、シエラといっしょに夕飯食いに行くとき、起こしてくれればよかったのに。）

となりの部屋に何か食べ物があるかもしれない。シエラが、お菓子とかよく宿に持ち込んでいるから。レックスは、廊下に出ようと扉に手をかけたとき、ドサリと音がし、窓から侵入者が現れた。侵入者は片手剣を持っており、有無を言わずレックスに襲いかかる。

幸い、レックスは、運び屋家業で盗賊相手になんとか戦っており、こういう事態に比較的なれていたので、敵の攻撃をぎりぎりかわし、相手の股間をけりあげ部屋から逃げようとした。

が、廊下から新手があらわれ、また襲われてしまう。これも、瞬間的に、いや脳神経よりも発達した運動神経によって間一髪でのがれ、レックスは廊下へと出た。

侵入者は、隣の部屋にもいたようだ。ミランダが敵といっしょに廊下に飛び出してくる。ミランダは、自分が手にしていた二本の小刀の一本を、レックスになげつけた。ミランダは、二刀流使いだっ

たので、武器はいつも二本身につけていた。

「レックス、私が血路をひらくから、あんた、シエラ様をつれて逃げて。早く!」

ミランダは、一人倒した。レックスは、自分に襲いかかる侵入者の剣を小刀でうけとめた。マールに小さいころより、手ほどきを受けていたので、武器のあつかいには自信がある。

ミランダが、レックスの敵をひきうけた。賊は、何人いるか分からない。外にもいるはずだ。レックスがとなりの部屋に入ると、賊が一人、床に倒れており、シエラは部屋のすみでふるえていた。

レックスは、シエラをだきあげ、窓から脱出しようとした。二階だったが、これくらいの高さなら、なんとかなるはずだ。窓から、また新手が入ってきた。

レックスは、シエラをかばいつつなので動きがにぶい。荒い息遣いのミランダが二人を守ろうと、新手に襲いかかった。

ミランダは強い。一人で数人相手にできるほどの実力をもっている。でなければ、グラセンがいつもそばにおいておくはずがない。

ミランダが、窓からまた室内に侵入しようとした敵を、窓の下につきおとした。何かが廊下から室内に転がってくる。火のついたビンである。それも一つではない。五つも六つだ。

「レックス、火炎ビンだ。爆発するぞ!」

シエラのなかのライアスがさげんだ。ライアスは、バテントスと

の戦争で、この火炎ビンを見ている。これも、エイシアにはない危ない物だった。

だが、火炎ビンをはじめて見るレックスとミランダには、爆発すると言われても瞬間的に理解できない。火炎ビンは爆発した。それと同時に火が宿の二階をつつむ。賊は、ビンが爆発する同時に、宿に火をつけたようだ。たちまち宿はパニックになり、泊り客は我先に逃げ出した。

三、ナルセラの襲撃（2）

マーブルが明け方、ほろ酔い気分で宿に帰ってきたとき、宿が半分、燃え尽きているのを見て仰天した。警察が宿を取り囲んでいたので事情をきくと火事だと言う。

マーブルは青くなった。死者も出ており、宿のそばの路地に布をかけられ、横たわっている。マーブルは、そのなかに自分の身内がまじってないか、おそろおそろ調べ、とりあえず安心した。

マーブルは、もしやと思い、運び屋組合に向かった。避難した客は、すべてそこに集められており、警察の事情徴収に応じていた。そのなかに、三人の姿を確認したマーブルは、全身から力がぬけた。

レックスは、シエラをだきしめ、組合の長いすにすわっている。ミランダが、マーブルの前にやってきた。

パンという響きがきこえ、周囲の視線が一瞬あつまった。

「バカ！ あんた、今になってよく顔を出せたわね。大変だったんだから。」

「何が、何があったんだ。」

「わからない。とつぜん、火があがって。廊下のロウソクが原因じゃないかって、みんな話している。」

ミランダの目は、詳しい事は後で話すと言っていた。マーブルは、まさかと思った。レックスは、シエラをだきつつ、じっとこっちを

見ている。シエラの手には、あの剣があった。

爆発から逃げられないと判断したライアスは剣をつかい、三人の周囲に結界を張った。結界に守られたから、三人は無事だったのである。

とうぜん、シエラにはそのときの記憶はない。気がついたら手にあった剣を、お守り代わりに、にぎっていた。

マーブルは、フラフラとレックスの肩に両手をのせた。

「よく、よく、無事だったな。よく。すまん、おれが不甲斐ないばかりに。」

「もういいよ。無事だったしさ。荷物は、運び出すヒマがなかったんで燃えちまったがな。シエラもこうして無事だしさ。」

シエラは、ボンヤリとマーブルを見上げた。マーブルは剣を見つめる。

「それを持ち出してくれたのか。よく、気がついてくれたな。他の荷物なんて、どうでもいい。お前らが無事だったらそれで。そういや、グラセンはどうした。」

マーブルは、レックスの肩から手をはなした。レックスは、

「用事があるって、どっか行つた。先に出発してくれってさ。」

「そうか。警察が引き上げたら、荷物をととのえて出発しよう。ミランダ、お前、持ち合わせあるか。」

「また、スツたの。お金ならあるわよ。でも、ちゃんと返してね。」

ミランダからもらった金で急いで出発の準備をし、一行はグラセンを残してナルセラを旅立った。馬車にゆられながら、ミランダから事のでん末をきき、マーブルの顔はこわばっていた。

「いつまでも、ばれないわけがない。ここにくるまで、なんにもなかったのが奇跡だろう。お前一人で、よくがんばってくれたな、ミランダ。」

「グラセン様と、酔っ払いがいないだけ、やりやすかったわ。でも、きつかったわね。ただの運び屋だと、甘く見られていたようだから、なんとかなかったけど、爆発したときは、もうダメかと思ったわ。」

マーブルは、

「爆発したって、何が爆発したんだ。爆発するようなモンなんて、宿にあったのか。火事の原因もロウソクじゃあないだろう。いきなり、燃え広がったって言うし、どう考えてもバテントスの火付けだろう。バテントスの姿は、だれも見なかったようだし、やつらの死体も消えていた。宿を襲った者達以外にも、仲間が外にいたんだな。ミランダ、実際、どうだったんだ。」

「爆発したのは、火炎ビンだって、きいたわ。バテントスが持ち込んだ武器よ。それが爆発したの。片手でつかめるくらいの小さな武器よ。あんなの見た事ない。」

「火炎ビン、おれもはじめてきいた。バテントスは、いろんな武器をもってたんだな。」

ミランダは、荷台のシエラとレックスを見た。ミランダは今も御者席にいる。シエラはずっとおびえ続け、レックスがそばにいないと泣き出してしまう。

マーブルは、

「それで、爆発寸前に逃げたってのか。まあ、お前がいてくれたたすかったよ。」

ミランダには、どうやってたすかったのか、いまだに理解できない。シエラがいつ、剣を袋から取り出したのかも。ドンと音が響いたと思ったら、自分達は宿の外にいて、火の手があがる二階を見つめていたのである。

ただ、シエラが、たすけてくれたであろう事は、なんとなく分かっていた。それを、シエラにたずねようとしたら、レックスに何もきくなど先制されてしまう。シエラもおびえきっており、それきりだった。

（レックスは、たすかった理由が分かってるみたい。やはり、あの剣。でも、シエラ様がああ剣をつかうなんて信じられない。あの剣は、そういう力の持ち主でなければ、ビクともしないし。シエラ様は、どう見ても身分が高い以外、ごくふつうの娘さんよ。あの惨事から、私達を守るだけの力があるはずない。）

でも、あのとき、たしかにシエラの声をきいた。火炎ビンだ、爆発するぞ。たしかにシエラの声である。でも、いつも聞きなれていて、ひかえめな声ではない。

一行は、昼食をとるために、水のあるところで休憩をとった。

「手早くすまそう。茶はわかさなくていい。食べたなら、すぐ出発だ。」

マーブルが、荷台から馬をはずし、水場につれていった。ミランダが食材をとりだし、切り株の上で簡単な昼食をつくっている。シエラは荷台から、おりようとしなかった。

「シエラ、何か食べよう。朝も食べなかったじゃないか。体に毒だよ。」

「レックスさん、私こわい。あの人達、本気で私を殺そうとしたわ。私、バテントスに見つかったら、つれもどされると考えていた。けど、殺されそうになった。私、バテントスに殺されてしまう。」

レックスは、シエラの手をつかんだ。シエラは、今にも泣きそうである。

「殺されない。おれが守るから。そうだ。あの剣を持ってるよ。なんかすごい、言い伝えがある剣なんだろ。きっと、シエラを守ってくれるぜ。」

レックスは、荷物から剣をとりだし、シエラの手にしっかりとにぎらせた。

（剣を持たせていれば、夕べみたいにライアスが出てきて、シエラを守ってくれるはずだ。盗賊ならともかく、夕べみたいのがまた襲ってきたら、おれじゃあ、たちうちできない。たのむ、ライアス。シエラを守ってくれ。）

「うん、わかった。ちゃんと守ってあげるね。」

ライアスだ。もう出てきた。レックスは、

「シエラを、また眠らせたのか。」

「しょうがないよ。おびえちゃってさ。ぼく、お腹がすいてんだ。お昼、食べたいしね。」

「ばれないようにしろよ。」

「シエラのふりなら楽勝だよ。こうしてずっといつしよにいるとき、時々、ぼくはシエラじゃないかって、思えてくるときがあるんだ。さ、外に出てお昼を、」

ライアスの顔に緊張が走った。目つきが、するどくなる。

「レックス、武器を出せ。水場にとまったのがよくなかった。やつらが、こっちが油断していると見て、襲撃をかけようとしている。敵は、四人、いや、五人か。ゆうべの残党だ。」

レックスは、剣をとりだした。そして、マーブルの銃も。この銃は、前装填式火縄銃だったので、レックスは銃に火をつけたあと、なれた手つきで弾を仕込んだ。ライアスは、

「マーブルが、水場からもどってきたら銃を投げわたせ。そして、敵襲だとさげび、幌のあのあたりを剣で思いっきりつくんだ。それで一人片付く。」

「お前はとうするんだ。」

「シエラは非力だ。戦えない。けど、ぼくの事は気にするな。目の前の敵だけ、君は見ている。ぼくは、身を守りつつ君の援護をする。」

「分かった。だが、無理はするな。」

マールが馬を水のそばの木につなぎ、持って行ったヤカンに水をくみ、もどってくるのが見えた。

「レックス、今だ。」

レックスは、敵襲だとさげび銃を投げつけ、幌に剣をブスリとさした。ギャアと言う声とともに、血が剣をしたたりおちてくる。レックスは、幌から剣をひきぬき、ライアスとともに荷台からとびだした。

すぐさま、この馬車を遠巻きに護衛しているグラセンの手下がかけた。銃声が響き、少し応戦したあと、仲間を三人失ったバテントス兵は不利とみると、あっさり逃げた。グラセンの手下が、それを追う。

「つくしょう。やっぱり、おっかけてきやがった。ねらいは、すでにシエラだけじゃない。かかわったおれ達もだ。」

マールは、幌の上から死体をひきずりおとし、血まみれの幌をひきはがし、やぶの中に捨てた。そして、荷台の血を水で洗い流したあと、昼食もとらずにその場を去った。

レックスは、手に傷をおっていた。ミランダは、レックスの傷に包帯をまいた。

「すり傷ね。あんた、バテントス兵と戦っているとき、勢いあまって馬車に手をぶつけてたものね。もう少し、戦い方を考えなさい。あんたの戦い、すきだらけよ。」

「悪かったな。けど、おれはあんたとちがって、ただの民間人なんだよ。」

レックスは、ムツとして顔をそらした。ミランダは、やれやれと思ってしまう。

マーブルは、

「不利と分かれると、あっさりひきやがった。夕べといい、やつらは体勢を立て直しつつ、これから、なんどでも襲ってくるだろうな。シエラごと、おれ達を消すまではな。」

マーブルは、チラと荷台のシエラを見つめた。いつものシエラは、ここで顔をそむけてしまう。けど今は、

「グラセンも、シエラを引き受けた君達も、こうなる事は覚悟の上だったはずだろ。それでも、シエラをバテントスから奪還する価値有りと判断したから、たすけてくれたんだろ。なら、文句は言わない事だ。」

レックスは、やばいと思った。ライアスは、

「サラサに偽シエラがいる限り、逃げた本物はじゃまなんだよ。ど

のみち、このまま手をこまねいていれば、圧倒的な軍勢力の前に、エイシアは大陸の支配を受けてしまう。

だから、君達は急いでいるんだろ。まだ、間に合うからね。やつらが、来年の春、本格的にエイシア支配に向けて動き出す前に、レックスを王にして島をまとめあげなきゃならないからね。」

いつもとあきらかに違うシエラに、マーブルとミランダは、背筋にさむいものを感じてしまう。ライアスは続けた。

「本当は、ぼくがやりたかった事だ。いや、やらなきゃならない事だったんだよ。ぼくが、もっと大陸の動きに注意を払っていれば、こんな事態には、ならなかったかもしれない。すべては、ぼくの責任だ。」

「お前、だれだ。」

マーブルは、疑惑にみちた目で荷台の娘を見つめた。ライアスは、クスリと笑う。

「もう、分かってるじゃないか。レックス、君から紹介してくれよ。」

四、二度目の襲撃（1）

ナルセラの襲撃事件から数日が過ぎた。マーブルは街道を南下し、予定通りベルセラに向かっていた。

「ライアス、このまま街道でいいのか。この街道は、まっすぐベルセラにのびてるし、おれ達がどこに向かっているか、バテントスに教えているようなモンだぞ。」

マーブルは、荷台のライアスにたずねた。シエラは午後、荷台でよく昼寝をする。お姫様にとり、ガタガタとゆれる荷馬車での移動は、やはり負担だ。シエラが眠ると同時に表へと出たライアスは、体の負担をへらすよう荷台に横たわりつつ、剣をいじくっていた。

「もう、知ってるよ。グラセンが坊さんだから、どこの道を使ったって、向かう場所は一つしかないしね。」

「こっちは、いつ襲われるか、ビクビクしてんだぞ。」

「今は大丈夫。やつらの気配はない。ここの街道は、人の往来がはげしいから安全なんだよ。暗殺ってのはね、こっそりやるから暗殺なんだよ。」

「ナルラセの宿じゃあ、大騒ぎだったじゃないか。」

「あれはたぶん、ぼく達が予想外の抵抗をしたからさ。まさか、女の子があんなに抵抗するとは、想像できなかったはずだ。」

レックスは、

「おい、子供って、おれの事かよ。」

「他にだれがいるんだい。」

ライアスは、ムクツと起き上がった。

「ちょっと止めて。もよおしたから。」

レックスは、

「トイレかよ。お前、シエラの体だぞ。」

「別に。母親が、シエラが二歳のときに亡くなったから、ぼくがずっと、シエラのめんどろみでたんだよ。兄さんというよりも母さんだったよ。いつもいっしょに寝てさ。下の世話もずいぶんしたっけ。ちなみに、シエラのおむつは、ぼくがとったんだよ。あー、たのしかったな。シエラは天使みたいにかわかったしさ。もう一度、あのころにかえりたいな。」

ライアスは、ガサガサと茂みに消えた。ミランダが警戒しつつ、あとを追う。マールは、ため息をついた。

「ありゃ、病気だな。妹がかわいすぎて、バカになってる。おむつをとった？ 領主の跡継ぎのする事かよ。クリストンのライアスは気性がはげしく、策略家としても有能だって評判だったんだ。おれも、やつの代になったとき、一時期はドーリア公以上に警戒してたんだがな。」

「死んで、人間丸くなったんじゃないか。最初から、あんな調子だ

った。」

「シエラにとっついてまで、何をしようとしてんだろうな。過去のつぐないばかりじゃなさそうだしな。グラセンといい、よく分からんやつだ。まあ、こっちはたすかるがな。」

ライアスが、ミランダといっしょにもどってきた。手に何か持っている。

「レックス、見て見て。すごい物みつけたよ。」

と言い、枝にブスリとさした、大きなトゲトゲの緑色のイモムシをさしだした。

「うわ、おれ、イモムシはきらいなんだよ。グニャグニャして気持ち悪いしき。それ、すてろよ。」

マーブルの顔色が変わった。

「そりゃ、毒蛾の幼虫じゃないか。どこで、そんなもの見つけてきたんだ。成虫よりも毒はないが、それでもかなりの毒を持ってるんだ。さっさと捨ててこい。」

「ゼルム毒蛾の幼虫だよ。すごい毒で有名な。このあたりにいるんだね。さなぎになるために穴をほってたところを捕まえたんだ。空きビンに入れておけば、なんらかの役に立つと思うよ。」

ライアスは、ニコニコと笑いつつ、ミランダが用意した小さなガラスビンに虫をおとした。

「設備があれば、毒を抽出できるんだけどね。クリストンにいたころ、いろんな毒虫をつかまえて研究してたっけ。」

マーブルとレックスは、少し背筋がさむくなった。ニコニコと笑う顔の下にかくされている、ライアスのもう一つの顔を見たような気がした。

馬車は走り出した。ライアスは、しばらくビンをながめたあと、ランプに使う安物の油をビンに半分ほど入れた。そして、それをミランダにあずけ、また横になり剣をいじくった。

（刺客は、ぼく達がベルセアに入る前に襲ってくるはずだ。明日か、あさってか、少なくとも三日以内には必ず襲ってくる。

今度は、もっと大勢でだ。遠巻きにこの馬車を護衛しているグラセンの手下だけでは、人数的に対処しきれないだろう。バテントス兵が、この馬車を襲う前に、グラセンの手下が、どれだけ敵を減らしてくれるかだ。

あとは・・・、ミランダはともかく、マーブルとレックスはふうよりは腕がたっても、しょせん正式に訓練された戦士ではない。ぼくは、この体じゃ戦えないし、ミランダ一人にたよるのは無理がある。）

ライアスは、御者席のレックスを見つめた。

（とにかく守らなきゃ。やっと見つけた、ぼくの王子様だ。）

金色の髪が風になびいている。ライアスは目をほそめた。

（シエラが、一目惚れするだけの事はあるね。二人の仲も、まあまあになってきた。あとは、シエラがこの剣をわたせるかどうかだ。）

ライアスは、あくびをした。やはり、馬車の旅はこたえる。このまま、眠ることにした。ミランダがシエラに毛布をかけた。そして、シエラを守るよう、そばにじっとしている。マーブルは、レックスにささやいた。

（おい、シエラよりもライアスを嫁にしたらどうだ。かなり、たよりになるぞ。）

（なんで、そうなるんだよ。ライアスは、シエラのニーサンだぞ。）

（幽霊だから、もう関係ないさ。シエラの体に入っちゃえば女だしな。まあ、嫁は冗談として、おれとしては、ライアスにこのままいてほしいね。ライアスだったら、安心して、お前をまかせられる。おれは、ライアスを気に入ったんだよ。）

レックスは、あきれた。完全にシエラを飛び越し、ライアスだけになっている。マーブルは、

「ま、なるようになるわな。グラセンだけには気をつけなきゃな。おい、ミランダ、ジーサンにはナイショだぞ。」

「私は、なんでもかんでも報告してるわけじゃないわ。グラセン様が自らおわかりになるまで、だまっているつもりよ。」

シエラは、スースー寝息をたてている。マーブルは、ホッとした。

「ライアスは寝ちまったな。つまり、今日は安全って事だ。このまま、次の町に泊まろう。おれもなんだか、緊張続きでつかれちまった。」

「遊びには、いかないでちょうだいね。」

ミランダは念をおした。荷台に入ってくる風が冷たくなってきている。秋もだいぶ深まり、あと、ひと月もすれば本格的な冬がやってくる。ミランダは、シエラに毛布を一枚たした。

「寒いね。たすけてもらった時は、まだ暖かったのにね。」

この日は、めずらしく、二人きりで夕食をとった。シエラはぴったりとレックスに自分の体をよせつけ、宿への道を歩いている。星が、またたきはじめていた。

「私ね、レックス。クリストンいたときは、ふつうの人がどんなふうに生活してるか、まったく分からなかった。いつも、サラサの宮殿にいて、ほとんど外に出たことなかったから。兄様から話をきくだけだった。」

でもこうして、ふつうの人と同じように生活して、生きるという事は、楽じゃあないんだなって分かったの。自分で食事の用意したり、洗い物をしたり、買い物をしたり、ミランダさんを手伝ってるだけだけど、こうして、ふつうに暮らすだけでも大変なんだなって。」

「つらいのか。」

シエラは、首をふった。

「あなたとこうしているだけで、とても幸せなの。レックス。」

シエラは、いつのまにか、さん付けをやめていた。レックスは、シエラをだきしめた。そして、キスをする。唇をはなしたシエラは、ニヤニヤしていた。出てきた。レックスは、いいふんいきだったのにと口をとがらした。

ライアスは、

「よしよし、上出来。お互い気になる相手と、毎日生活をともにしていると、だれだって自然とこうなる。どうだい、恋人ができた気分は。」

レックスは、中身が入れかわった恋人をはなした。

「なんか用か。」

レックスは、ムツとしている。ライアスは、

「明日、山間部を通るんだね。襲撃は、明日あると思う。バテントス兵の何人かを、グラセンの手下が、さきほど見つけて処理したみたいだ。けど、グラセンの手下も戦える状態じゃない。数が多すぎたんだよ。でも、かなり減らしてくれた。今夜あたり、ミランダに連絡が届くはずだ。」

「残った連中が、明日やってくるのか。」

ライアスが、真顔になった。

「レックス、今回の襲撃は、最後の一兵まで命がけになって襲ってくる。なんとしても、ぼく達をここで処理する気でいるんだ。」

「それがどうした。どっちにしたって戦うしかないだろ。」

「ぼくは、いざとなれば、君だけを守るつもりでいる。二人を犠牲にしても、君だけは守るつもりだ。」

レックスは、ライアスを見つめた。

「おれは、お前に守ってもらうつもりはない。危なくなったら、お前だけでも逃げろ。」

ライアスは、フフンと軽く鼻をならす。

「悪いけど、ぼくにはそんな感傷なんて通じないんだよ。ぼくの人生は、感傷なんかで片付けられるほど、甘い人生じゃなかったもんね。悲惨な死に方したしね。」

ぼくの人生ってさ、ほんと短かったんだよね。結婚すらしてない花の二十六歳で、人生これからバラ色だってときに、戦争なんかおきちゃって、最後は死体すら残さず終わっちゃったもんね。

あーあ、考えてみると、ぼくってさ、産まれたときから、なんか不幸な人生あゆむように運命づけられてたみたい。その証拠にさ、父がダリウスを攻めると決めたとき、反対したのは、ぼくだけだったんだよ。

もっと、たくさんの人が、ダメつと言ってくると考えてたけど、みーんな、父をおそれて沈黙さ。とうぜん、怒りを買ったさ。ぼくはすぐさま、宮殿の塔に閉じ込められて、父がサラサをたつまで、コップ一杯の水と一切れのパンしか与えられなかった。餓死寸前さ。

叔父のサイモンが、サラサから出る直前、父にないしよで助けだしてくれなかったら、ライアスの命は十四かそこで終わってたろうね。それからもさ、いろいろあったんだよね。やっと領主になれて、ぼくの時代がきたかと思うまもなく、バテントスだしさ。」

レックスは、

「お前、おれ達の事、かばってくれてたのかよ。初耳だな、そりゃ。塔に閉じ込められて、餓死寸前だったって？ お前の親父、自分の息子にすらそうだったのかよ。」

「気性が荒いと言えば、そうだったし。かなりの気分屋。王座を奪えなくて、プライド傷つけられて、あんな事をしたしさ。ぼくは反対したんだよ。そんな事はしてはいけませんってね。ぼくだけが、クリストンじゃあ、君達の味方だったんだよ。」

「わかった、わかった。そんなにしつこくしないでいい。第一、きいてもないのに、なんで、お前の身の上話をきかなきゃなんないんだ。なんかまた、話がそらされた気がする。なんの話、してたんだっけ？」

「襲撃の話だよ。けど、身の上話は知ってもらいたかった。グチもきいてもらいたかった。だって、だれにも話す事できなかったんだもん。」

「おれに恩を着せるつもりで話したんだろ。その手には乗らないぞ。かばってくれた事には、とりあえず感謝するし、塔に閉じ込められたのは同情するけどもさ。」

ライアスは、ハアーツとため息をついた。

「ぼくは、父に似てると言われているんだ。どうして、あんな父に似てるなんて言われるのか、よく分からないけどもね。似てるとしたら、たぶん、塔に閉じ込められたとき、自分の無力さを知り、そうなったんだろうね。ぼくは、それからずっと父をおそれていた。いつまた怒りを買うか、こわかったんだ。」

「シエラはその事を知ってたのか。」

ライアスは、

「塔に閉じ込められていた事は、後で知ったようだ。そのかん、シエラは、サラサ宮殿から、サラサ郊外にある離宮へと移されていたしね。でも、ぼくが父をこわがってたのは、たぶん知らないだろう。ぼくは、弱みを人には見せなかったから。」

「ライアス、お前。」

ライアスは、うーんと背伸びをした。

「あー、いーな。やーっと安心して本音言える人、見つけた。ずーっとモヤモヤしてたけど、話してスッキリした。」

「よかったな、スッキリしてな。どうせ、バカ相手に話したって、どうって事ないって考えてんだろ。」

「うん、それもあるね。ね、ぼくの友達になってよ。ぼく、ほんとの友達って、あんまりいなかったんだよね。」

ライアスはまた、子犬のような無邪気な笑顔をむける。

「君とシエラのそばにいたい。シエラが許してくれるなら、このままここにいたい。シエラとして生きたい。」

「だったら、シエラに話したらどうだ。」

ライアスは、首をふった。

「まだだめだ。シエラはまだ、自分の事で精一杯だから。明日の事は伝えたから、ぼくはひっこむよ。くれぐれも、シエラを悲しませないでくれよ。」

ライアスは、レックスにだきつきシエラにもどった。

「寒いな。すっかり冷えちゃったみたい。急いで帰ろう。」

シエラは、そっとレックスの手をひっぱった。

四、二度目の襲撃（2）

レックスはシエラに、兄ライアスの事を話してくれとたのんだ。

「お前、兄貴の事、よく話してるだろ。だんだん興味がわいてきたんだ。神童で有名だったろ。どんな兄貴だったんだ。」

「兄様の事なら、なんでも話してあげる。うれしいわ。レックス、私の家族の事、どう考えてるか心配だったもの。」

「なんにも考えてないよ。けど、男として興味ある。お前の兄貴なら、なおさらだよ。」

シエラは、得意そうな顔をした。

「すごい、きれいな人。会えばきつとびっくりするわよ。それでね、すごく頭がいいの。女の人に、もてもてでさ。女だけじゃないわ。男の人にも人気あったんだからね。」

「それじゃあ、恋人の一人や二人はいたんだろ。」

「ううん、シエラが一番だって言ってくれた。私以上の女は、いないって。」

なんか、きょうだい、と言うよりは恋人に近いような関係だったんだな。と、レックスは思ってしまう。ライアスのシエラへの態度は、まさにそうだけど。

「お前、もう一人、兄貴いたんだろ。えーと、その。」

「シゼレ兄様。」

「そいつもすごいのか。」

シエラは、ちょっと考えた。

「地味系、かな。ライアス兄様とは、ぜんぜん似てない。子供のころは太ってたし。シゼレ兄様は僧侶になるために国教会で育ったの。たまに、宮殿にもどってきてたっけ。」

「なんで、僧侶なんだ。」

「約束かな。クリストンの跡継ぎはライアス兄様だったから、二番目は権力争いをさけるために教会に行かされるのよ。ライアス兄様が戦争で亡くなられて、シゼレ兄様が教会から連れもどされたの。けど、すぐに亡くなって。私、やっぱり一人ぼっちなのね。家族がみんな死ぬなんて。」

レックスは、シエラをだきしめた。

「そんな事はない。おれがいるじゃないか。シエラ、結婚しよう。おれと結婚して、いっぱい子供つくればいい。」

シエラは、ほほえんだ。

「ありがと、レックス。でも、私、ある人を見つけなきゃならないの。グラセン様と約束したのだから。その人を見つける事ができたら、そうしよう。」

レックスは、自分の長い髪を一本切った。それをシエラの指に結ぶ。

「この髪は、すぐに切れて無くなってしまいうけど、おれの気持ちだ。シエラの髪もおれの指にまいてくれないかな。」

シエラは、すぐさま栗色の髪を切り、レックスのごつい大きな指にまいた。二人は笑顔で宿へともどっていった。

翌日、馬車は山間部へとさしかかった。平坦でまっすぐな道の多い街道だったが、ここらあたりは山が多く、うっそうとした森に囲まれた街道が続く、しかも街道は山にそっているので勾配も激しい上、ぐにゃぐにゃとしており見通しもかなり悪い。

まさに、襲撃にはうってつけの場所だった。いつ襲われるか、何も知らないシエラをのぞく三人は緊張でパンパンだった。

そして、馬に水をのませる水場についたとき、緊張はピークに達していたが、このときは何も起こらず、一行は警戒しつつ街道を走っていた。

山間部の橋が落ちていた。マーブルはまたかと舌打ちをしたが、すでに引き返すこともできない時間帯に入っていたので、横道にそれ、わたれそうな浅瀬をさがす事にした。

橋が落ちたのは、ワナではないのだろうか、このまま進むと必ず何かが起きる。けど、引き返しても同じだ。

ライアスは、

「もう少し進んだら川原へ出てくれ。わたれそんな浅瀬を見つけた。」

マールは、

「その浅瀬、ワナじゃないのか。」

「たぶんね。けどもう、逃げ道はないよ。ミランダ、昨日あずけた
ビンはどこにある。」

「その箱の中です。割れないよう、白い布でつつんであります。」

「ビンの中に布をさいて入れるんだ。油には、幼虫の毒がにじみ出
ている。火をつければ、毒の煙がたつ。君にわたしておく。」

「わかりました。ライアス様は、どうなさいます。」

「ぼくは、レックスのそばにいる。それでいいか。」

マールは、ライアスの言わんとしている意味がわかった。

「そうしてくれ。そのボンクラをたのむわ。お前だけがたよりだ、
ライアス。ところで、お前、銃は使えるか。この前、いじってたろ。」

「銃、ああ、あれはいいね。バテントスの大砲見てて、ぼくもあんな
感じの武器を考えたんだ。もっとも、ぼくが考えたのは肩にのせて
かつげる、小形大砲だったけどもね。グラセンは、いいものを考
えたよ。」

マールは、手元にあった銃をライアスになげつけた。

「女の体でも戦わなきゃならんだろ。」

ライアスは返した。ライアスは、荷物の中から剣をとりだす。

「いらない。今のぼくの腕では命中はむずかしいからね。王家の剣があれば、じゅうぶんさ。」

「その剣、お前にたしかにあずけたぞ。それは、レックスの身分を証明する唯一のものだ。いざとなったら、お前の手でそれをレックスに返してくれ。」

「・・・それは、シエラの役目だよ。浅瀬が見えてきたよ。覚悟はいいか。」

三人は、うなずいた。

そこは、川幅が広がっており、流れもおだやかだった。中州があり、草が生えているところを見ると、足場を選ぶはわたれるはずだ。

ミランダが先行し、足場を調べつつ水の中へと馬車を誘導した。馬は多少ひるんだが、マールがたくみになだめつつ、馬は足を半分まで水につかりながら、ゆるゆると進んでいく。

川の半分までわたったとき、川上から丸太が数本流れてきて馬車を直撃した。馬のいななきが山間にこだまし、馬車は横転する。どこからともなく、バテントス兵が三人ばかりあらわれ、水の中へと

入っていった。

すでに対岸にわたっていたミランダは、小刀をぬき、敵と戦うべく川を走った。重い鎧をつけたバテントス兵の動きよりも、ミランダのほうが早い。ミランダは、兵が馬車にたどり着く前に切りかかった。

パーン、するどい音が響き、ミランダに氣をとられていた兵が一人倒れた。狙撃は正確で、撃たれた兵は水中で動かなくなる。

仲間が倒れた事で、動揺したバテントス兵のすきをつき、ミランダはあっというまに一人倒した。そして、最後の一人はまた、狙撃の餌食になった。

ミランダは、ばしやばしやと岸へあがってきた。マーブルが、周囲を警戒しつつ、ミランダのもとへかけよる。

「ミランダ、無事か。」

「なんで出てくるのよ。おとりは、私一人でじゅうぶんよ。」

「バカ、いくらお前が強くても、一人じゃ危険すぎる。けど、なんか拍子抜けだな。」

「あの三人も、おとりじゃなかったのかしら。手ごたえがなさすぎる。動きも、にぶかったしね。」

ミランダが、川の兵を見た。兵の一人の兜が脱げ、頭に血のにじんだ包帯をまいている。ミランダは、

「やはり、おとりね。怪我して、まともに戦えない連中を先に出してきた。バテントスは本気だって証拠ね。ここで、ケリをつけるつもりだわ。あの二人は？」

マーブルは、チラと背後を茂みを見た。

「結界の中だ。剣を使い、馬車の幻を出現させると同時に結界を張り、本物の馬車を見えなくして、ワナをかわすなんてな。グラセンもここまではできなかった。ライアスは、バケモンだな。」

ミランダは、川の中ほどで横転している馬車の幻を見つめた。幻は、さっきより存在感がうすくなっている。術が解けてきたのだ。

「マーブル、結界の中へもどつて。川の馬車が消えると同時に、すぐに新手が出てくるわ。」

「今もどつたら、場所を教えるようなモンだぞ。あの二人には、何があっても絶対出てくるなと言っている。おれ達だけでなんとかするぞ。」

ミランダは、周囲に注意をはらう。木や草が、サワサワと秋の風にゆれているだけだ。

「やつら、シエラ様とレックスをさがしているのね。あの二人の位置が分からないから、何もしないでいる。」

「なら、こっちから動いてさがすまでだ。」

マーブルが銃をかまえて、その場から動こうとしたとき、どこからとこなく矢が飛んできて、足元の川原につきささった。

「動くなと言う事かよ。こりゃ、こう着状態だね。」

マーブルは、矢が飛んできた方向をにらんだ。敵はもう、そこにはいないだろう。

結界の中のレックスは、

「やっぱり、おれも出るよ。これじゃあ、にらみ合いが続くだけだ。おれが出れば、敵も姿をあらわす。」

「さっきの矢を見たらう。君が出たとたん、今度は足元じゃなく筋肉しかない体にブスリだ。素人の君では、あの矢はかわせない。」

「言う事がいちいち腹立つな。悪かったな、筋肉しなくて。」

ライアスは、レックスの体をしげしげとながめた。

「立派な筋肉だよ。若くて、しなやかでさ。ほんと、もったいないね。そんない体もってるのに、荷物運びにしか使ってないなんてね。ねえ、レックス。乗り移ってもいいかな。」

レックスは、びっくりした。

「ダメ！ おれ、そういうのニガテ。とつつくのは、シエラだけにしてくれ。」

「いいじゃないか。友達なんだしさ。シエラと結婚すれば、君はぼくの弟なんだし。かわいそうな兄さんに体かしてくれたってさ。」

「だれが友達だ、兄さんだ。お前、このごろあつかましいぞ。」

シエラが倒れた。ライアスの霊は、有無をいわさずレックスに乗り込み、こんどはレックスの魂をシエラにおしこめてしまう。

「悪いけど少しかりるよ。君はそこで見ていてくれ。君の意識があると、うまく体を動かせないから。」

ライアスは、シエラの手から剣をうばい、シエラに金縛りをかけた。シエラの体に閉じ込められたレックスは、何かを言おうとしても体がまったく動かない。

ライアスは、荷台から片手剣をとりだし、結界の外へ飛び出した。予想通り、矢が飛んでくる。ライアスは、片手剣で矢をはじいた。

矢は、数本ライアス目指して飛んできた。だが、ライアスはたくみにかわしつつ、マーブル達のもとへと走った。

マーブルは、飛び出してきたレックスにびっくりしてしまう。

「バカ、もどれ。死ぬぞ。」

「ちがう。レックスじゃないわ。あの子にあんな事ができるはずがない。ライアス様よ。」

矢は、マーブルをねらって飛んできた。ライアスは、王家の剣を使い、マーブルの前に見えない盾を出現させ、矢をはじいた。

「油断するな、マーブル。」

レックスの声でさげぶライアスに、大理石はどう反応しているか分からない。ライアスが、あわてている大理石の横を通り過ぎ、剣を使い念力で対岸の岩をくだいた。

岩がくだけると同時に、かくれていたバテントス兵が姿をあらわす。ミランダが川を走り、大理石が銃をかまえた。その大理石めざして矢が飛んでくる。ライアスが、また大理石をかばい、銃が鳴り響き、対岸の兵は倒れた。

対岸に、武器をもった兵が二人出現した。そして、こっち側には四人。接近戦には、弾込めに時間のかかる火縄銃は不利なので、大理石は腰にさげていた片手剣を使う。

ライアスの動きは、まさしくプロだった。レックスの体の性能のよさもあり、苦戦している大理石をかばいつつ、戦い続ける。

結界の中で動けないレックスは、その戦いを歯ぎしりしながら見ているしかない。

（クソ。おれの体を好き勝手しやがって。おぼえているよ。けど、強いな。ライアスは、神童って言われてたけど武芸も強かったんだな。いや、強いなんてもんじゃない。ミランダとおんなじくらいじゃないか。」

戦いは、こちら側の勝利でおわった。大理石は、血のついた剣を川原に放り投げた。ドカッと川原にすわりこむ。

「全部で十人かよ。まともに戦ってりゃ、絶対勝ち目はなかったな。グラセンの手下に感謝しなきゃな。手負いの状態にして、こっちに送ってくれて。」

ライアスは、すずしい顔でたっている。片手剣は血でぬめぬめしていたが、体には返り血はまったくあびていない。マーブルは、

「お前がいてくれたおかげだ、ライアス。」

「この周囲から、敵の気配は消えたみたいだ。けど、長居は無用だ。ミランダ、悪いけど剣を洗ってくれないか。マーブル、立てるか。」

ライアスは、マーブルを立たせた。マーブルは、服が血にそまっていたが、傷は右腕に少しだけだった。

「あーあ。レックスのやつも、これくらい優しければな。しかし、あいつがよく体をかしたな。」

「めんどくさいから、レックスの魂はシエラにおしこめた。ぼくは、もう引っ込むから、あとはよろしく。」

レックスの手から王家の剣が消えた。消えると同時にレックスがなくなった。

「あんちくしょう。文句言おうとしたら逃げやがった!」

マーブルは、血にそまった服をぬぎ、それを茂みへと捨てた。

「うー、さむ。早く着替え出さなきゃ。ミランダ、剣を洗ったら肩をたのむ。」

マーブルは、川の水で肩を洗った。たいした傷ではないとはいえ、剣で切られた傷である。かなり痛むはずだ。レックスは、たづなは

自分がとることにした。

馬車は、川の浅瀬をわたったあと街道へともどった。もう、夕暮れである。シエラは、まだ眠っていた。町につくまで目を覚まさないだろう。

五、ベルセアの出来事（1）

ベルセアは、その名のとおり、ベルセア国教会が支配する宗教国家だ。ゼルムとカイルの間に位置しており、土地もせまい上、人口も少なく、国全体が教会でできているような国だ。

一行は、国教会の総本山がある、国と同じ名前の首都ベルセア市のグラセンの屋敷で、グラセンの帰りを待っていた。

「ここには、シエラの親戚がいるんだろ。シエラの母さんが、この出身なんだろ。母さんの実家があるんなら、あいさつしてきたらどうだ。ミランダも、せまいベルセアに、バテントスが入ってこないだろうって言ってるしさ。」

暖炉の前でぼんやりしているシエラに、レックスは声をかけた。

シエラは、かすかに笑った。

「おじい様もおば様も、もう亡くなられているし、母様の実家とはいえ、知らない人達ばかりよ。父様がした事を、いまだに許してはいない人達だしね。」

「家に閉じこもってばかりいると体に毒だよ。至少くらい、外に出たらどうだ。」

シエラは、ここについて以来、一步も外へ出ていない。グラセンの屋敷は、それほど広くはない。使用人も、中年の夫婦がいるだけである。

シエラは、

「退屈よ。でも、ここにくるまでが、ずっと緊張の連続だったから出たくないの。外が怖いって言ったら、たぶん当たっていると思う。」

「おれがついてるよ。危険があったら守るからさ。」

シエラは、少し笑った。レックスでは、自分を守りきれないくらい、シエラだって理解している。

「外も怖いけど、気がかりな事があるの。ずっと言えなかったけど。たぶん、信じてもらえないんじゃないかって。グラセン様がお帰りになったら、相談しようかって考えていたの。」

「おれでよかったら相談にのるよ。話してみろよ。シエラ、元気ないしさ。」

シエラは、ため息をつき考えた。

「兄様がいるって言ったら、レックス、笑うかな。」

レックスは、ドキリとする。シエラは、

「ふつう、頭がおかしくなったって思うわよね。でも、本当よ。兄様の気配を感じるの。あんな死に方なされたから、行くところ行けなくて、私にとりついたのかな。」

「兄様って、どっちのだ。」

レックスは、ドキドキしていた。ライアス兄様、シエラは小さく

こたえた。

「ライアス兄様は好きよ。亡くなられたとき、何日も泣いたわ。でも、思い出だけにしてほしかった。バテントスも怖いけど、兄様の亡霊も怖いの。」

「べ、べつにいいじゃないか。シエラの大事な兄さんなんだろう。なら、悪さなんてしないさ。きっと、シエラ、守ってんだよ。」

シエラは、首をふった。

「レックス、小さいころ、お母さん亡くしたんだよね。そのお母さんが、いまだにレックスにとりついてたらどう思うかな。死にきれなくて、自分の肉親にずっとまとわりついたらさ。」

「そりゃ、いやだよ、正直。でも、シエラの兄さんなら大丈夫だよ。シエラ、困らすような事はしないはずだ。」

シエラは、レックスを見つめた。

「どうしてそんなに、兄様をかばうの。まるで知ってる人みたい。」

レックスは、言葉につまってしまう。どうこたえても、ボロが出る。

「お、おれ、なんか飲み物もってくる。寒くなったし、あったかいの飲もう。」

と言い、とりあえずこの場を逃げた。シエラは、疑問に思った。

台所へと向かったレックスは、使用人の奥さんに飲み物を用意してもらいつつ、必死でドキマギしている感情をしずめていた。

（やばい。もう、ほとんど、ばれてるじゃないか。ベルセアきてから、あいつ、一回も顔ださないのは、そのためか。このままグラセンが帰ってきて、イクソシズムになったら、あいつ、追い出されてしまう。何か、何か、いい手はないのか。いっそのこと、おれが、あいつの霊をひきとるか。いや、それもおなじだ。グラセンにかかったら、イクソシズムだしな。）

レックスは、あれ？と思った。

（なんで、おれ、あいつの事、かばってんだ。ウザイと感じていたのに。いや、かばわなきゃ。あいつがいなくなったら、めっちゃくちゃ困るのは、おれじゃないか！）

レックスに逃げ場はない。シエラとの結婚はともかく、グラセンが帰ってきたら、すぐにでもマーレル・レイ、とくるだろう。今の自分では、とてもじゃないが王様は無理だ。

（ライアスがいてくれて、アドバイスしてくれたら、こんなおれでも王様やれる自信がある。とにかく、イクソシズムだけはだめだ。なんとかしなくちゃ。）

使用人が、飲み物をレックスにわたそうとしたら、レックスは台所から消えていた。レックスは、グラセンの屋敷にきてから寝てばかりいるマーブルをたたきおこす。

マーブルは今朝、久しぶりにフロに入ったので、体からいい香りがただよっていた。あまりの汚さに悲鳴をあげた使用人が、町の共

同浴場へおいはらった成果である。

「なんだよ、そんな事で起こしにきたのか。まあ、いずれ、ばれちまう事さ。あわてるところを見ると、お前、ライアスに惚れたのか。」

「冗談言ってる場合かよ。あんたも、ライアスなら安心するって言うてたじゃないか。おれ、あいつがいてくれたら、王様だってできそうな気がしてんだ。困るんだよ、イクソシズムされちゃあ。」

マールは、レックスのひたいを指ではじいた。

「お前、何、なさけないこと言ってるんだ。あいつかわらず、人にたよる事しか考えないやつだな。これじゃあ、シエラとの結婚は無理だな。」

「そんな事言ったって、バテントスをどうしていいか分からない。とにかく、ライアスがいてくれなきゃダメなんだよ。おれ一人じゃ、とてもじゃないが無理だ。」

マールは、息子の顔をじっと見つめた。

「やっと、怖^{おじけ}気づいたか。いままで反抗ばかりしてたものな。バテントスになんども襲われて、やっと目がさめたんだな。そう、それでいいんだよ。王になる事に怖^{おじけ}気づいたんじゃない、自分の無力さに怖^{おじけ}気づいたんなら、お前もやっと大人になってきたって証拠だ。ライアスの事は、おれからグラセンに話してみる。シエラには、あまり気にするなどでも言っておけ。」

「わるい、たのむ。」

レックスは、寢室を出て行こうとした。マールは、

「お前、ライアスをどう思ってる。ただ、必要なだけか。」

「よく分らない。けど、体の一部みたいに思えるときがある。なんていうかな、昔っから、あいつはおれのそばにいた、そんな感じかな。」

レックスは、マールの寢室から出た。窓から外を見る。どんよりとくもった空から、ポツポツとつめたい雨がおちてきている。

（恋愛とか友情とか、そんな感情とはちがう。なんだろう、この思いは。ただ、はなれたくない。失いたくない。そばにいてほしい。リクセンから、たいして時間がたつてはいないのに、もう何十年もいっしょにいるような気がしている。）

レックスは、シエラの部屋へ、さきほどの飲み物をもっていった。そして、つとめて明るくふるまい、ライアスに話題がおよばないよう、気をつかっていた。

だがそれは、シエラの疑惑を深めるばかりだった。

翌日、ミランダはシエラを、国教会の総本山にある大聖堂へとさそった。いつもは、旅行者やら巡礼やらでにぎわっている大聖堂も、昨日からシトシトとふる雨のせいで、ガランとしている。

シエラは始めて見た壮大な大聖堂に心を奪われていた。とくに天井画がすごい。ミランダは、

「こういう日でもなければ、ゆっくりする事はできませんわ。いつもは、押すな押すなの、すごい人だからですからね。」

「きれい。エイシア創造の話を題材にした天井画だわ。天の神ダリウスが光と風をあたえ、女神ベルセアが地をつくり、そこに人を満たした。人は、天と地のめぐみにより大地に栄え、国をつくり、創生の神ダリウスとベルセアをたたえるために、ベルセアがつくりし大地に国教会をつくり、そこに二人の神をまつた。」

「いったい、だれがこの物語を画にしたのかしら。物語がそのまま再現されている。たとえば、物語を知らなくても、画をながめるだけで分かってしまう。すごいわ。」

シエラは、天井画を順に見続け、最後にダリウス王家の始祖ミューティカの真下にきた。

「翼のある白馬にのり、黄金の髪と空の瞳をもつダリウスの娘ミューティカ。ベルセアより与えられし神の剣を持ち、双頭の白竜をしもべとし、エイシアを解放せん。レックスの御先祖様ね。」

ミランダは、びっくりした。シエラは、

「ごめんなさい。分かった。一目でね。」

「じゃあなぜ、剣をわたさないのでですか。」

シエラは、うつむいた。

「グラセン様は、王子様をさがせとおっしゃったのよ。レックスは、私の大切な人だけど、グラセン様のおっしゃる王子様ではないわ。」

ミランダは、うつむいているシエラを見つめた。グラセンがシエラを選ぶわけだ。ミランダは、シエラを聖堂のわきにならべてあるイスへと連れていく。

「シエラ様、あせる必要はないと思いますよ。グラセン様も、シエラ様のお気持ちを喜びになられると思います。」

「私、レックスが大好きなの。だれよりも好きなの。レックスだけなのよ。だからまだ、剣はわたせないの。」

「お祈りしましょう。レックスが一日も早く、王子様になれますようにと。」

シエラは、小さくうなずいた。

そのころ、レックスはグラセンの書齋にいた。書棚から本をひっぱりだし、眉間にしわをよせている。レックスが本を読んでいるときいたマールは、めずらしい事もあるんだな、と書齋へとやってきた。

「読めない字が多すぎるよ。おれって、こんなに無学だったのかよ。」

「勉強しなきゃならんときに逃げ回ってたからな。どこが読めないんだ。」

レックスは、マールに教えてもらいながら、本を読んでいた。これは、エイシアの歴史書の冒頭の部分である。

「ほら、あの剣、あの剣の事を、もう少し知ろうと思ってさ。あれ、魔法みたいな事できるだろ。けど、剣については、神剣としか書いてないんだな。」

マーブルは、頭をかいいた。

「あの剣が、ああいうモンだったなんて、王家ではだれも知らなかったはずだ。儀式でしか使わなかったしな。本物の伝説の剣かどうかも分からなかったしな。」

「グラセンは、どうして気がついたんだろ。」

「いじくってるうちに分かったんだろう。好奇心が強いからな。」

「ライアスは、これは自分の剣だって言ってたよ。」

「ライアスも王家の人間だからな。自分の剣になるはずだった、という意味じゃなかったのか。」

「おれもそうだと思ったけど、少し意味がちがうような気がするんだ。ライアスは、自在に剣を使ってた。グラセンが使うのとはちがう。本当に自在なんだよ。まるで、最初から、この剣の事が分かってたみたいにさ。荷物の中にしまっても、いつのまにか手にもってるしさ。おれ、なんとも見たんだよ。あいつの手に、剣が現れたり消えたりするのをさ。」

「そのおかげでたすかったんだ。なんせ、本物の神剣なんだしさ。」

「神剣で片付けるな。あの剣は、ライアスの分身なんだよ。あいつ、剣を大事にしていたし。」

レックスは、本を書棚にもどした。マーブルは、

「お前、何を言いたんだ。王は、ライアスの方が似合うとでも？」

「国教会の教えに転生があるよな。ミュティカは、ダリウスとベルセアと違って、伝説になっているとはいえ、一応、おれの御先祖になっている。」

「それがどうした。」

レックスは、少し考えた。言うか、言わないか、迷っているみたいだった。

「おれの推測なんだけどもな。ライアスがそうじゃないかと、ライアスはミュティカの転生なんじゃないかと。さっき、本を読んで、そんな気がしたんだ。」

マーブルは、あきれた。

「それだったら、ライアスはクリストンなんかじゃなく、ダリウス王家に産まれていたはずだ。なーにを言い出すかと思えば、くだらん。」

「いや、まちがいないと思う。ライアスがミュティカなら、グラセシも納得してくれるんじゃないか。」

マーブルは、今度はため息。

「寝言をいうのも、たいがいにしろ。例えそうだとしても、ライア

スはライアスだ。過去、だれであつたかなんて関係ない。それにもう、死んでいるんだよ。」

レックスは、立ち上がった。

「シエラはどこにいったんだ。屋敷に、いないけど。」

「ミランダと大聖堂だよ。外出嫌いのシエラは、大聖堂なら行くと言ったからな。今日は雨でガランとしているから、おちついて見学でもお祈りでもできるだろう。」

レックスは、書斎を出ようとした。どこに行くとのマールブルに、レックスは、

「ライアスと話がしたい。おれの考えが正しいか、問いただしてみ。あいつ、きっと、自分がそうだと分かつてるはずだ。」

レックスは、マールブルが止めるのもかまわず、雨の中、屋敷をとびだした。

レックスは、雨よけ用のマントの下に、王家の剣をかくしもっていた。そして、聖堂に、しずくをたらしつつ入ると同時に、かくしもっていた剣が強い光をはなつ。いきなり人が消え、レックスは一人だけ、ポツンと聖堂の中にたっていた。

「気がついたんだね、ぼくの事を。」

金髪で青い目をした青年が、そこにいた。この時代にしてはめずらしいほど、髪をみじかく切っており、白い首筋がはっきりと見える。男性とも女性ともつかない非常に美しい顔立ちをしており、

体全体がオーラのような光で満たされていた。

レックスは、青年を見つめた。青年は、

「グラセンのイクソシズム程度では、ぼくを追い払う事はできない。力の差が、はっきりしているからね。問題なのはシエラだ。彼女に拒絶されたら、ぼくは、いられない。」

「なら、おれが引き受けるよ。」

ライアスは、首をふった。

「シエラは、ぼくの命だ。ぼくは、彼女の意思には逆らえない。君に移ったとしても同じだ。」

「おれが無力だからか。今のおれでは、お前を守りきれないからか。」

「天空の神も、人間として生をえれば、ただの人だ。ぼくが、だれか分かると同時に、自分の事も分かったはずだ。ぼくと君は、魂がつながっているから。」

「ずっと、いっしょにいるって約束だったんだろ。たとえば、命がおわったとしても、おれはお前をはなすつもりはない。」

「ミュティカは、ダリウスの子であると同時に、ベルセアの子でもあるんだよ。二人の思いが同じでなければ、ぼくはここにいることができない。」

レックスは、持っていた剣をライアスにさしだす。

「お前のものだ。」

ライアスは、受け取らなかった。レックスは、

「シエラは何も知らないんだ。おれが今日、分かった事を話しても、まずは信じない。マールにお前の事を少し話しただけでも、バカにされておしまいだった。今のおれでは、それもしかたないさ。」

「まったく、いままで何やってたんだろうな。ワガママばかりで、マール困らせてさ。ライアス、命令だ。どこにも行くな。この剣を持ち、おれの助けとなってくれ。」

「生きて、肉体をもっていたら、それもできたさ。シエラの体に仮住まいをして、君のもとへとたどりついたけど、そろそろ限界かな。やはり、幽霊は幽霊でしかないんだよ。だれかの体を借りなきゃ、なんにもできやしない。」

ライアスは、さびしげにほえんだ。

「レックス、君とこうして、昔の姿で話ができただけでも、ぼくは幸せだった。シエラを大切にしてくれよ。その剣は、これからは君が使うんだ。君の眠っている力を引き出すよ。」

ライアスの白い指が、レックスのひたいをそっとつついた。レックスのなかで、何かがパリンと音を立てて割れたような気がした。とたん、はげしい頭痛におそわれ、その場にうずくまってしまう。

気がついたら、聖堂の扉の前でうずくまっていた。祭壇の前に、シエラとミランダがいる。頭痛は消えていた。レックスは、二人に

声をかけずに、また雨の中へともどっていく。

その夜、レックスは眠る事ができなかった。不思議な感覚。そして、知る前と知った後で、まったくちがってしまった自分。レックスは、寝たまま、そばにおいてあった剣を手にとった。

剣は、闇のなかで、かすかに光っている。以前は、この光は見えなかった。レックスは、剣に熱くなれと命じ、すぐに冷たくなれと命じた。剣は瞬間的に熱くなり、すぐに氷のように冷たくなり、もとにもどった。

レックスは、ひたいに手をあてた。

（聖堂から出てきてから、感覚が妙にするどくなった感じがする。するどい？ いや、いままで見えない感じない、人間の五感ではとらえられない、何かを感じはじめているんだ。剣が、反応したのもそのせいかな。）

そう言えば、聖堂で、ライアスが、眠っている力がどうのこうの言ってた。眠っている力、霊能力を意味してるのだろうか。レックスは、ベッドから起きた。じっと剣を見つめる。

（やるしかない。ライアスをとりのどすには、そうするしかない。おれがもっと実力をつければ、周囲の目もかわる。シエラだって、納得するはずだ。）

五、ベルセアの出来事（2）

それから、四日ばかり過ぎた日の夕方、グラセンがやっと帰ってきた。シエラとミランダは、今日も聖堂に出かけて、まだ帰ってき
てはいなかったので、グラセンは、マールブルとレックスを書齋に呼
び、先に話をした。

グラセンは、ゼルムの將軍の計らいで、ゼルム領主に会ってきた
と言う。

「領主様と会う約束は、わりと早く取り付ける事ができたんです。
ですが、なかなか会う事ができなくて、いままで長引いてしまいま
した。」

ゼルムは、私達がくる直前に、バテントスから条約を結ばないか
と持ちかけられていたようです。条約を結び交易してほしいとね。
その対策に追われていて、私との面会が遅れてしまったのですよ。」

「ゼルムがバテントスと条約だって、そりゃどうということだ。」

「バテントスも武力だけでは征服しないと言う事です。クリストン
を占領して条約を持ち出し、ゼルムに脅しをかけたんです。今の領
主様は、経費削減とかで軍の縮小をかけてましたからね。なめられ
ても仕方が無い事です。」

「で、条約はどうしたんだ。やめるよう言っただけだよな。」

「あの通行証を見せ、領主様に軍に対する考えを改めるよう進言し
ただけです。法王ならともかく、私の身分ではね。ほら、あなた方

が巻き込まれた火事。あれがバテントスがらみだと調べがついたよ
うで、ゼルム上層部は大騒ぎになっていましたよ。」

マーブルは、頭をガリガリかいた。

「クソ、なんてこった。けど、火事は、バテントスがらみだけで、
調べは終わっているんだよな。おれ達の事は、ばれてないんだよな。
」

「あなた方の遺体は出なかったですからね。出てたら、シエラ様の
御遺体でも突きつけて、逃亡にゼルムは手をかしていたとかナンク
セをつけ、今ごろ、条約を結ばせていますよ。いろんな意味で、あ
なた方はバテントスに利用されたのです。例え失敗したとはいえ、
領主様のお膝元でおきた事件ですからね。」

マーブルは、ため息をついた。

「ひょっとして、ナルセラの前で橋が流されていたのは、おれ達の
ナルセラ入りをおくらせるためだったのか。そのあいだに、ゼルム
に小細工をするために。」

グラセンは、うなづく。

「今、ゼルムは、バテントスにゆさぶりをかけられているんです。
あの手この手でね。そうやって、精神的にも追いつめていき、最後
は隷属させようとしているんです。実にいやなやり方ですよ。」

マーブルは、そうかと言った。レックスは、

「グラセン、バテントスは条約を結んでも、ゼルムにやってくるは

ずだ。軍で脅して、条約を盾にとって、クリストンみたいに占領するためにな。戦争無しでゼルムを占領するかどうかの違いだけではない。今は冬で、バテントスの動きもとまってるが、春になれば、きつとそうする。このままじゃあ、ほんとに島丸ごとやられちゃうぞ。」

マーブルとグラセンは、レックスの顔を見つめた。

「なんだよ。おれの顔になんかついてんのかよ。」

マーブルは、

「いや、熱でもあるかと思ってな。」

「おれが、まともな話すんの、そんなに変かよ。こう見えたって、いろいろと考えてんだよ。」

グラセンは、笑う。

「アレクス様のお考えと、私の考えは同じです。クリストンには、ゼルムのそばに、中州の城という、その名のとおりの真ん中にある城塞があります。そこを起点にゼルムを襲うはずですよ。」

ダリウスは、クリストンと山脈でへだてられているので、攻略はあとになるでしょう。カイルは海軍を少しもっているだけで、ゼルムが終われば、何もしなくても手に入ると、バテントスは考えてるはずですよ。」

あとは、ダリウスに軍を進めて、偽シエラ様を王にしろと言えば、完了というわけですね。」

レックスは、

「ダリウスは軍もってんだろ。抵抗しないのかよ。」

マーブルは、手をふった。

「もっててもカスだよ。ドーリア公のとき、あっさり負けちゃったもんな。王の軍隊だ、官軍だと栄光に、あぐらをかいているだけの軍なんだよ。」

「アレクス様。バテントスは相手をよく調べております。ナルセラといい、その国のツボについて戦いをいどんでくるのです。クリストンが真っ先にねらわれたのは、そのためでしょう。」

どうしてとたずねるレックスに、マーブルは、

「クリストンは、ライアスの代になっても、三国とは完全にもとには、もどらなかつたんだよ。ライアスが、親父の不祥事の尻ぬぐいにあちこち行ったが、かんじんの王がいなけりゃ話にならん。孤立していて、攻めても、どこも助けにこないとバテントスは見抜いた。事実、そのとおりだったしな。」

レックスは、ひざの上でこぶしをぎゅつとにぎった。グラセンは、立ち上がった。

「そろそろ、夕食にしましょう。残りの話は、シエラ様もまじえて、夕食のあとでお話します。」

レックスは、

「おれ、ちょっと部屋に行ってくる。メシ、先に食っててくれよ。」

「お前、腹はすいてないのか。このごろ、何かあると部屋にいるな。」

「なんでもないよ。シエラはまだ、聖堂から帰ってきてないんだろ。シエラを待ってるだけだ。」

部屋へもどったレックスは、ベッドにすわり、剣をもった。意識を集中させる。中州の城、中州の城。ぼんやりとだが、雪にまみれた川中の城が見えてきた。

この城は、長いあいだ使われてはいない。だが、秋口からバテントスが出入りをし、使える状態にまで回復していた。城では、バテントス兵がいそがしく動いている。ゼルムは、この状態を知っているのだろうか。

気がつく、目の前にグラセンがいた。こわい目で、レックスを見ている。

「アレクス様、様子がちがうと感じていましたが、いつのまにそのようなお力を。」

レックスは、苦笑した。

「やっぱり、すぐに気がつくんだな。あいつが、いなくなるわけだ。」

「あいつとは？」

「あんた、シエラを驚かせたくなくて、ずっと気がつかないふりをしてたんだろ。安心しろ、もういなくなった。さがしても見つけれない。」

「やはり、ライアス様でしたか。あなたの力を解放させたのですね。」

「どうやって、おれ達の事を知ったんだ。シエラをおれの嫁に選んだのは、そのためだろう。」

「そこまで、お分かりになられるとはね。ライアス様が、そばにおられたので、覚醒が早まられたようすな。」

レックスは、真顔になった。

「おれは、おれでしかないんだよ。無学で字もまんぞくに読めない書けないな。だから、お袋を女王にしたんだな。」

「そのとおりです。私もライアス様と同じなんですよ。結果として、同じような役目をしているのです。使命といったらよいでしょう。私は、国教会の秘密に通じておりましてね。ある意味、法王よりも、さまざまな事を知っているのです。」

その中に、神の転生の予言がございまして、その予言の時期が、今と一致している事に気がついたのです。それで、さまざまな秘儀を試した結果、わかったのです。

ですが、その時は、ドーリア公とあなた様のお母上が、王位継承でもめている最中でしたので、冷や汗をかいたのも事実です。もう

少しおそれれば、あなたを王とする事など不可能だったはずです。」

「お袋は、劣勢だったはずだ。ドーリア公で決まりかけたのに、ひっくり返すのに、法王まで動かしたんだろ。いくら高位僧侶とはいえ、枢機卿でもないあんたが、よく法王を動かせたな。何をしたんだ。」

「ですから、使命と申し上げたのです。ダリウス王家始祖である、ミユティカ様よりも、あなた様のほうが上なのです。」

「ライアスとシエラも、同じようにして気がついのか。」

「予言では、神が転生されるとあるだけで、どの神かまではわかりませんでした。それで、片っ端からさぐったのです。でもまさか、主神三体とは、考えもませんでした。ライアス様が、お亡くなりになられたのは、まさに悲劇としか言いようがありません。」

「ああ、悲劇だな。だったら、あいつを認めていいんだよな。たとえ、幽霊でもな。」

グラセンは、目をつぶった。

「死者は、やはりこの世にかかわってはいけません。この世は、生きている人間の手でつくられなければならないのです。ましてや、他人の体をかりて行動するなど論外です。」

「だが、そのおかげで、おれ達は助かったんだ。」

「シエラ様に、一番負担がかかります。シエラ様のお気持ちを考えてください。」

「おれにとっては、ライアスは死人だろうがなんだろうが、大事なモンだ。シエラがいやなら、おれが引き受ける。」

「ならなぜ、去られたのですか。やはり、死者としての負い目を感じていたのでしょうか。」

「あいつは、かならずもどってくる。あいつは、おれの子供だ。子供は親のそばにいるモンなんだよ。」

「魂の縁ですか。まさに神話のとおりですな。現実世界でも、このような事が起きるとはね。」

「おれが分かったのは、あいつとシエラの関係だけだ。昔、何があったかなんて、分かったわけじゃない。とにかく、もどってきたとしても、あいつには手を出すな。おれが言いたいのは、それだけだ。」

グラセンは、ため息をつく。

「マーブルによく似てますよ、あなた様は。子供を守ろうとすることがね。これから、どうなさるおつもりですか。」

レックスは、剣をかるくふりまわした。

「ゼルムの事情は、だいたいわかったよ。カイルはどうかな。まだ、春までには時間がある。それまでに、もう少し詳しく、この島の状態を知りたい。」

「そのあとは。」

「シエラと結婚して、クリストンへ行こうかな。どのみち、なんとかしなきゃならない。ライアスがいてくれたなら、かなり助かったがな。グラセン、クリストン行くには、ゼルムにもどったほうがいいか？」

「おすすめできません。中州の城がありますからな。軍も春にむけて、集結しているはずですよ。道はけわしいですが、ダリウスからはどうですか。ですが、そのあとは、どうなさるおつもりですか。シエラ様とお二人では、何もできますまい。」

レックスは、グラセンは自分をためしているな、と感じた。事実、どうしていいか分からない。ここは、すなおに知恵をかりよう。

「あんたの考えを教えてくれないか。もうすでに、なんらかの手はうってあるんだろ。」

グラセンは、ほほえんだ。

「シエラ様の叔父上、サイモン様に連絡をとってあります。サイモン様をたよられてはよろしいかと存じます。お手紙を書かれてはいかがですか。」

「その手があったな。けど、手紙書こうにも、おれ、字がな。おれの手紙だとは、信じてもらえないだろうな。」

「シエラ様に出してもらえばよいのですよ。」

レックスは、首をふった。

「シエラは、あんたにあずけておくよ。危険にはさらしたくない。シエラはもう、じゅうぶん苦しんだ。それと、さっきおれが話した内容は、とうぶんのあいだ、マールには言うなよ。おれが、剣を使える事もだ。」

「私からは、マールに話す事など何もありません。廊下がさわがしいですから、シエラ様がおもどりになられたようです。食堂にまいます。」

レックスは、剣をベッドにおいた。レックスと入れ違いに部屋へと入ってきたミランダは、グラセンにあいさつをすませたあと、シエラがレックスの正体に気がついていることをつける。

「今日は、驚く事ばかりですな。ひさかたぶりに、お二人の顔を見たと思ったら、こうですから。シエラ様が、自ら剣をわたすまで待ちましょう。そのほうがよろしいはずです。」

「レックスと話していたようですが、何を話されていたのです。」

「お前もいろいろと気がかりでしょうが、今は見守っていてあげなさい。お二人とも、大人になろうともがいているようですからね。」

グラセンは、少しさびしげにほえんでいた。

一行は、グラセンと相談した結果、カイルへ行くことにした。グラセンがカイルの領主と直接会い、カイルが今後どうするか、考えをきくためだ。

レックスは、シエラをベルセアに置いていこうとしたが、シエラはレックスとはなれたくなかったので、どうしてもついていくと言いい張り、バテントスに見つからないよう、変装するとの条件で連れに行くことにした。

シエラは、髪を切った。フワフワとしたやさしい栗色の髪を、バツサリと首筋で切ってしまったのである。そして、男の子に変装した。

ずいぶん、思い切った事をしたものである。シエラは、

「私だって、いつまでも子供じゃないわ。逃げ回って、おびえるのも、もうたくさん。クリストンのシエラとして、少しでも何かできるのなら、なんだってやります。」

レックスと、はなれたくない一心からでた言葉ではあったが、その場にいた者達を感服させるにはじゅうぶんだった。

シエラは、レックスの変化に気がついていて。何が、レックスに起こったのか分からない。けど、このままでは、自分はおいていかれる。

いつそのこと剣をわたそうか、とまで思いつめたが、シエラはやめることにした。今、わたしたら、自分のあせりを知られてしまう。

シエラは、馬車の中で、さむくなった首筋にフカフカのマフラーをまいていた。レックスは、シエラのみじかい髪をみて、髪と目の色こそちがうけど、ライアスにそっくりだと感じていた。

六、マデラの罌(1)

カイルの首都、マデラ市にやってきた翌日、グラセンはレックスだけをつれ、朝早くマデラ宮殿へと出かけた。カイル領主セシルに、法王の内々の御用のための使者という名目で会いに行ったのである。

グラセンとレックスが行ったあと、かなり遅く起きたマーブルは、すぐにどこかへ消えてしまい、宿で退屈を持てあましていたシエラは、ミランダとともに町を散歩する事にした。

マデラはこの時期、よく晴天が続く。気候的にも島の最南端に位置しているせいで暖かく、冬だというのにコートもマントもいらない。雪もめったにふらず、クリストンの雪にうもれた冬しか知らないシエラにとり、ここは別天地のようだった。

ぼんやり道を歩いていると、馬に乗った少年がよってきて、シエラをジロジロ見たあと、声をかけてきた。

「あんた、ねーちゃんか、にーちゃんか？ どっちにしたって美形だね。」

髪をみじかくし、少年のかっこうをしているとはいえ、シエラは美少女でめだつ。すれちがう人がみな、男か女か、興味をしめしていたようだったので、それで声をかけられたのだろう。

「どう見ても、ねーちゃんだな。男装の令嬢かよ。こりゃいいね。あんた、なんて名だ。」

十四か五か。シエラより年下なのは確かだ。シエラは無視した。

「さてよ。無視することあねえだろ。あんた、旅行者だな。どっからきたんだ。」

ミランダは、

「しつこいわね。ナンパだったら、別の子に声をかけなさい。」

「おお、こわ。威勢のいい女だな。おれ、威勢のいい女はきらいじゃないけど、あんた、年上すぎるよな。栗色の女の子の名前、教えてくれよ。」

シエラは、うざったそうに少年を見た。

「シエラよ。教えたから、どっか消えてよね。」

シエラは機嫌が悪い。このごろのレックスは、何かにとりつかれたように、剣ばかりいじくっている。声をかけても生返事ばかりで、自分には以前ほど関心をはらってほくれない。

少年は、うれしそうに笑った。

「シエラか。いい名だな。おれ、ロイドってんだ。ロイド・ゼスタ。」

シエラは苦笑した。ゼスタと言ったら、領主の名前ではないか。

「おれ、あんたをむかえにきたんだよ。グラセンとかいう坊さんにたのまれてさ。知らないとは言わせないぞ。宿いったら、だれもいなかったもんな。それでも、けっこうさがしたんだぜ。その機嫌の

悪そうな顔、なおせよ。せつかくの美人がだいなしだぜ。」

シエラは、

「ロイド・ゼスタなんて、きいたことないわよ。ここの領主様のセシル・ゼスタ様なら知ってるけどね。」

ロイドは、

「カイルの領主セシルには、十歳年下の弟がいるんだ。マーレル・レイの寄宿学校に去年までいたんだよ。バテントスのせいで、たのしい寄宿生活もおわっちまったんだがな。まあ、次男坊の名前なんて、知らなくてどうぜんか。」

シエラは、カイルの領主に弟がいたなんて知らなかった。国をつげない次男坊なんて、長男が死ぬまで表にでないから、知らなくて当然である。シエラのもう一人の兄シゼレも似たようなものだった。

「あんたの事は、セシル兄さんからきいてるよ。昔、兄さんと婚約してたんだろ。ドーリア公が、あんな事したばかりに破談になっちまったけどさ。」

「たしかに、そんな時期もあったわね。でも、私が三歳くらいのころよ。婚約してたのは、一年かそこらだったはずよ。私も大きくなるまで知らなかったわ。」

「あんた、フリーだろ。あのデカイ金髪とは、なんの関係もないんだよな。」

シエラは、ロイドから視線をそらした。ロイドは、

「ジーサンのボディーガード兼使用人だときいたけど、なんせ、見た目が見た目だろ。宮殿の女どもがさわいでたしき。身分なんか、カンケイないって事になってないかなー、なーんて心配してたんだ。」

ミランダは、

「言いたい事があったら、言いなさい。あんた、男のくせに、まどろっこしすぎるわ。」

「黒髪の姉ちゃんはだまってな。おれは、シエラと話してんだ。」

シエラは、足をとめた。

「恋人よ。でも今は、そうでもないみたい。髪をばっさり切っちゃったせいかもしれないしね。これで、御満足かしら。」

「じゃあ、おれと婚約しようよ。あんたなら大歓迎だ。男装してんの気に入ったし、その気の強いところもいい。どんな女か興味あったんで、使用人にまかせず、あんたをむかえにきたんだけど、会って正解だったと言う訳だ。」

シエラとミランダは、あきれた。シエラは、

「何を考えているのよ。私と婚約したって、カイルにはメリットはないわ。バテントスの攻撃対象になるだけよ。」

「次男は国をつげないんだよ。おれは坊主になるのがいやで、マーレル・レイへ行っただ。兄貴は体が弱いから、今、補佐をやって

るけど、どのみち一生冷や飯食いだ。クリストン行って、一旗あげたいのさ。」

「あなた、バカじゃない。あのバテントス相手に、どうやって戦うというの？　ライアス兄様でも負けたのよ。」

ロイドは、ムツとしたようだ。

「おれを、負け犬なんかといっしょにするな！　ライアスは負けたが、おれは負けない。絶対、バテントスをおっぱらってやる。とにかく、四の五の言ってないで、宮殿にきてくれよ。兄貴が、あんたに会いたがってるんだよ。」

ずいぶん、威勢がいい次男坊だと感じた。シエラは、レックスもこのくらい、はつきりしてくれたらいいのにな、とつい思ってしまう。

（レックス、私の事、もうなんとも思っていないのかな。ライアス兄様の気配が消えて、やっと安心したと思ったら、レックスが、ああなっちゃうんだものね。兄様の霊は、レックスにとりついたんじゃないかと思って、グラセン様に相談したんだけど違うと言われたし、本当にどうしたんだろう。）

シエラは、ロイドに連れられて、マデラ宮殿へとやってきた。南国の町にふさわしい、あでやかな宮殿である。宮殿についてすぐにロイドはいなくなってしまう、出迎えた使用人の案内で、シエラはセシルの執務室に連れて行かれた。

ミランダが案内された客室には、レックスがいた。あいかわらず、剣をいじくっている。ミランダは、ため息をついた。

「あんた、ライアス様が自在に使ってんの見て、自分でもなんとかすれば使えると考えてるの。無理よ。あんた、そういう能力持っていないじゃない。」

レックスは、顔をあげた。

「ライアスのやり方見てて、マネでもすれば、なんとかなると思っ
てさ。ところで、ミランダ、町で、あやしいやつらを見かけなかつ
たか。なんか、気になる動きをする連中を見つけたから。」

「どんな連中なの？ 私が歩いてきたあたりには、そんな人はいな
かったわ。」

「町の人間と区別がつかないよ。けど、何かをさがしてるみたいで、
目抜き通りとかウロウロしていた。ここへくるとちゅう、つけられ
てなかったか。」

ミランダは、

「私の注意力にも限界があるわよ。素人の動きならともかく、諜報
員ともなると、むずかしいわね。ところでなんで、そんな事がわか
るのよ。」

レックスは、ギクリとする。

「い、いや。グラセンが、ここへくるとちゅう、だれかの気配を感
じるとか言ってたからだよ。」

「あんた、その剣、使えるんじゃないの。いじくってばかりいたの

は、そのせいなんですよ。」

「だから、マネしてるだけだって。いつか、使えたらいいかなって、それだけだ。」

「マーブルも気づいているはずよ。剣を見つめるあんたの目つきが、ライアス様そっくりだしね。なら、下手なウソをつかないで正直に言いなさい。」

レックスは、フーと息をはいた。

「ちょっとだけだよ。ほんとにちょっとだけ。練習中と言ったらいいのかな。その程度。」

「どうやって、剣、使えるようになったの。能力なんて持ってなかったはずよ。」

レックスは、苦笑した。

「眠ってただけだ。ライアスが、おれの能力を起こしてくれたんだよ。この剣を使えて言ってるさ。」

「眠ってただけね。まあ、そのとこの解釈はいいわ。私では、よく分からないしね。使えるなら使えるにこした事ないわ。使えれば助かるしね。どうしたの、レックス。元氣無いわね。剣が使えるようになった、うれしいんじゃないの。」

レックスは、首をふった。

「おれの中に、とんでもない力を感じるんだよ。この力が目覚めて

から、日に日に強くなっていくんだよ。制御できないのにさ。いつ、暴走するか怖くてたまらないんだ。シエラに知られるのも怖い。もし、おれがふつうじゃないと知ったら、シエラはきつと、おれからはなれていく。」

「だから、あんなに必死になってたのね。」

ミランダは、レックスから剣を取り上げた。

「しばらく私があずかつてるわ。あんたのとてもない力も、この剣無しじゃ出す事できないはずでしょ。少し、この剣からはなれなさい。シエラ様、あんに相手に相手されないんで、最近、機嫌悪いから。」

「シエラ、ライアスとよく似てるな。さすが、きょうだいだな。ライアスの姿は、聖堂で一度だけ見たんだよ。あれだけ似てれば、髪と目の色さえ変えれば見分けがつかないな。」

「でしょうね。私もそう思ってた。でも、シエラ様には、その事は口がさけても言わないでね。ライアス様の亡霊で、ずいぶんまいていたから。」

「お前、ライアスに会ったことあるのか。」

「ベルセアにいらしたときにね。私も女だから、興味があったのよ。遠くからだったけども、今でもよく覚えているわ。」

「一目惚れしたんじゃないか？」

レックスは笑う。ミランダは、

「あこがれたのは確かね。まさか、あの時のあこがれの人と、しばらく旅するなんて、考えてもいなかったわ。」

「ときめかなかったか。」

「シエラ様の姿で声も同じ。中身は、たしかにライアス様だけど、女の子相手じゃ無理ね。さめた、といったほうがいいかもね。あこがれは、あこがれのまま、とっておくのが一番かしら。」

「今、つきあってる男はいるのか。」

「気になる男がいる事はあるわ。でも、ふりむいてはもらえないみたい。」

「ミランダほどの美人相手に何やってんだよって感じかな。お前の気になる男って、ひょっとして、おれ？」

ミランダは、剣でレックスの頭を、かるく小突いた。

「十年早いわよ。冗談言ってるヒマがあったら、シエラ様をだいじになさい。ロイド・ゼスタ様って知ってる？」

「あの生意気なガキか。シエラ、むかえに行ったんだろ。おれんとききて、シエラの特長とかごちゃごちゃきいてたよ。言い草が、かなりムカついたがな。」

「シエラ様にプロポーズしてたわよ。クリストン行って、一旗あげるそうよ。」

レックスは、びっくりした。

「シエラ、なんてこたえた？」

「気になるのだったら、シエラ様にきいたら？」

レックスは、そわそわしはじめた。ミランダから剣を取り返そうとしたが、ひっこめられてしまう。

「あんた、何かにたよるのもいい加減にしなさい。マーブルにたよって、ライアス様にたよって、今はこの剣なの？」

「わかったよ。そんなに怒る事ないじゃないか。」

「私は、これから町に出て、あやしいやつらをさがしてみるわ。」

「ついでにマーブルをたのむよ。東通りの三丁目あたりに、赤い看板の居酒屋があるんだ。そこで、酔いつぶれているみたいだからさ。」

「東通りの三丁目の赤い看板ね。マーブルの行動を監視するなんて、とてもよい心がけね。じゃあ、行くわね。」

ミランダは、剣を持ち、出て行った。レックスは、何もする事がなくなった。

（グラセンのやつが、おれが必要になるかもしれないと言うから付いてきたけど、シエラがきた以上、出番はなさそうだな。もどってくるまで昼寝でもすっかな。）

「ヒマそうだな。だったら、おれにつきあえよ。」

ロイドが、客室の扉でニヤニヤしている。レックスは、露骨に嫌な顔をした。

ロイドは、

「機嫌悪そうだな。おれが、シエラにプロポーズしたのが、そんなに気にいらぬか。さつき、その事で兄貴にしぼられたよ。でも、あきらめたわけじゃないからな。」

レックスは、じろりとらんだ。ロイドは、

「そんな顔するなよ。あんな美人、いつまでもほっとくほうが悪いんだ。それよりも、見せたいモンがあるんだよ。」

「見せたいモンじゃなく、はっきり言え。でなきゃ、寝る。」

「もうすぐ正月だろ。レスリングの奉納試合があるんだよ。おれが今年、それを取り仕切るんだ。それに出る、いい選手がいなくて。」

「当然、お断り。おれは見世物じゃない。」

「ま、そう言うと思った。この宮殿から何人か出るんだ。今、宮殿北にある武芸場で練習してるんだよ。あんだ、強そうだし、どうせ兄貴の話は長引くし、ヒマなら選手達の相手になって、遊んで欲しいんだよ。あんだ、強そうだしさ。」

「長引くってどれくらいだ。」

「夜までかかるかもな。兄貴が、今夜は宮殿泊まってけってさ。」

レックスは、ちょっと考えた。夜まで、こんな客室で退屈はいやだ。レックスは、ロイドのさそいにのることにした。

そこは、熱気ムンムンだった。いかにもムサイ男どもが、汗臭い汗をしたたらせ、練習にはげんでいる。ロイドが入ってくると手をとめ、いっせいに敬礼。

「練習ごくろうさん。お客さんだよ。お前らと遊びたいってさ。」

選手達はレックスを見て、なんでこんな優男が、とばかりの視線をなげつける。ロイドは、

「見た目で判断するなど、いつも言ってるだろ。おれの目に狂いはなければ、ここで一番の選手、おい、ファア、お前だ。レックスとか言ったな、ちなみにここの一番と二番の差は話にならんからな。ファアは、四年連続優勝をしてる。」

ひょろりと背の高い、二十代後半の男がやってきた。ロイドは、

「レックス。お前の実力は、ここの二番に匹敵するはずだ。つまり、互角の二番じゃ、つまらんだろう。それで、一番のファアと遊んでくれ。」

「おれ、レスリングなんてやった事ないぜ。ルールも知らないし。それをいきなり一番かよ。」

「とっくみあいのケンカだと考えてくれ。ルールは、相手をコテン

パンにやつつけること。さあ、はじめ！」

「そりゃ、お前のルールじゃないか。わ、待て。まだ、準備が。」

六、マデラの罠(2)

ミランダは、あやしいやつらをさがしていた。注意深く、あちこちさがしたつもりだったが、それらしい人物は見つからなかった。

ミランダは、東通りの三丁目へとやってきた。赤い看板は、すぐ見つかった。マールは、店のテーブルで大いびきをかいている。ミランダは、マールを叩き起こし、フラフラのマールを引っ張るよう、宿へと帰ってきた。

「まったく、朝からよく飲めるわね。ナルセラの事があってから、たしかに夜遊びはしなくなったけど、これじゃあね。」

「ぎゃーぎゃーわめくな。んだよ、いい夢見てたのによ。」

「どうせ、女の夢なんでしょ。酒と女しかない男だもんね、あんたは。」

マールは、フーと酒臭い息をはいた。

「おれが、なんの夢見ようが勝手だろうが。よく、おれがいる場所が分かったな。」

「町中、かけずり回ってればね。」

「なんか、見つかったか。」

ミランダは、首をふった。

「今のところはね。けど、マデラに侵入してる仲間には、気をつけるようつたえておいたわ。」

「レックスは、帰ってないようだな。シエラはどうした。」

「宮殿よ。グラセン様に呼ばれたの。たぶん、長くなると思う。夜まで帰ってこなければ、宮殿に泊まるかもね。」

マールは、そうかと言った。そして、

「なあ、ミランダ。お前、だれかときあっているのか。」

ミランダは、はあ？という顔をする。マールは、

「レックスは、もうすぐ、おれの手をはなれる。そしたら、おれの役目はおわる。その、もし、お前がかまわなかったら、おれと所帯もたないか。ダリウスのクラサという田舎に、おれの土地があるんだ。信頼できる人間に管理をまかせてあるから、おれが行方不明のままでも人手にわたる心配は無い。そこで暮らさないか。」

ミランダは、びっくりした。

「あんた、酔っぱらって、変な事言わないでよ。びっくりしたじゃない。」

「酔った、いきおいじゃなきゃ、こんな事言えるかよ。お前は、いい女だ。すこーしばかり気が強いがな。いい女だ。ずっとそう思ってた。もし、だれともつきあってなかったら、おれと結婚してくれないか。」

「いきなり、言われたって。」

ミランダは、困ってしまった。マールは、

「やっぱり、四十五の男とはいやか。」

「いやとは言っていないわよ。ただ、とつぜんすぎて。」

マールは、ミランダの手をつかんだ。

「じゃ、いいんだな。とつぜんだけいいんだな。」

「少し考えさせて。バテントスやら何やらでピリピリしてるのに、結婚なんて持ち出されても、どう返事していいのか分からないわ。でも、あんたはきらいじゃない。ううん、ずっと気になってた。」

マールは、ミランダをだきしめた。

「幸せにできるか分からない。おれはすでに一人の女を不幸にしている。けど、お前を大切にしたい。ミランダ、お前が好きだ。」

ミランダは、苦笑した。今日は、プロポーズ日和らしい。

夕方になり、シエラが客室にきたとき、レックスは、ボコボコになった顔をタオルで冷やしていた。

「ど、どうしたの、その顔。」

「ロイドにさそわれて、レスリング選手の相手をしたんだよ。いき

なり、一番と戦わされて、このザマだ。」

「負けちゃったの？」

「こっちは素人なんだぜ。ロイドのやろうに一杯食わされたよ。あいつ、腹いせに、おれをレスリングさそってボコったんだ。くやし
いから、宮殿の従業員食堂で昼飯食ったあと、また行って殴り合い
してきた。」

「お昼さそいに来て、いなかったわけね。どこ行ったのかと心配し
てたのよ。セシル様がね、夕食どうかって。ロイド君もいっしょす
るって。」

レックスは、ため息をついた。

「また、ロイドかよ。おれ、あいつの顔は見たくないんだ。ガキじ
やなきや、一発ぶんぐってやるとこだった。自分じゃ、おれにか
なわないから、一番選手をあててきたんだしな。」

シエラは、レックスからタオルをとり水でひやして、ふくれあが
った目にあてた。

「ヤキモチよ。レックスがうらやましくて、しょうがないのよ。私
にとって、やっぱり、あなたが一番かな。」

ほほえむシエラを見て、レックスは、ほんわりとした優しさにつ
つまれてしまう。

「シエラ、その髪、似合ってるぜ。お前、美人だから、なんでも似
合っちゃまうんだな。」

「美人だから、なんでも似合うはよけいかな。でも、うれしいな。変装すめられて、自分でもやりすぎたと反省してたもの。髪を切る必要なんて、なかったんじゃないかって。」

「シエラはシエラだ。髪切っても男装してても、目の前には、おれの好きなシエラしかない。ひさしぶりにキスしてほしいよ。」

「こんな顔じゃあ、ふんいきでないな。でもまあ、いいか。」

セシルは、やせた顔色の悪い男だった。また、二十半ばだというのに、十も歳をとってるように見える。けど、性格はおだやかで、ただの使用人のレックスにも丁寧に接してくれた。

「すてきな青年ですね。これでは、シエラ様もお心を奪われるというもの。私もかつて、使用人の女性に、身分違いの恋をした経験がありましたね、ずいぶん悩んだものです。結局は領主としての責任上、ベルセアから妻をもらいましたけどもね。」

「セシル様もそうだったのですか。その相手の女性は今は？ お付き合いとかしてたのですか。」

セシルは、ほほえんだ。

「私は、自分の思いをかくしてしまいましたから、その女性は私の思いなど知りません。私が結婚してまもなく、その女性も仕事をやめてしまいましたからね。たぶん、結婚したはずです。なつかしい思い出ですよ。」

そうですか、シエラはつぶやくように言う。セシルは、

「シエラ様、今がチャンスですよ。彼とさっさと結婚してしまいなさい。あなたが国に帰られたら自由はなくなります。私同様、領主という立場にしばらくしてしまいます。けど、既成事実をつくったうえで帰国ならば、どうしようもなくなります。私が証人になりますから、明日にでも宮殿の祈祷所で式をあげなさい。」

ちよつと待て、ロイドが口をはさんだ。

「待てよ。おれのプロポーズはどうなるんだよ。おれが、この金髪よりも先にしたんだぜ。こいつ、まだしてないはずだよ。」

レックスは、

「もうしてあるよ。ゼルムでだ。ごたごたしてたから、式をあげるひまがなかったんだよ。」

ロイドは負けない。

「使用人のお前に、シエラの国がとりもどせるかよ。おれはな、マーレル・レイの学校で、いろいろと勉強してきたんだ。無学の使用人の男なんて、シエラの足手まといにならあ。」

セシルは、

「ロイド、失礼を言ってはなりません。身分は制度上、たしかにありますけど、人は大地の上に平等にたっているんです。太陽も風も身分をえらびません。国教会も、そう教えているでしょう。彼にあまりなさい。」

ロイドは、ダンと席をたち出て行ってしまった。セシルは、

「申し訳ございません。なにぶん、世間知らずの子供でして。両親が早くに亡くなり、病弱な私では、領主の仕事だけで精一杯で、あの子の親代わりはできず、大変、ごう慢でワガママな少年に育ってしまいました。」

グラセンは、

「いやいや、元気のよい弟御ですな。若い者は、あれくらいでなければなりません。学校での成績も優秀だったでしょう。自信が、お顔に満ちあふれております。彼は、羽をのばす場所をさがしているのではないですよ。」

と言い、ほがらかにほほえむ。セシルは、赤くなった。

「まことに申し訳ございません。厳しく言いつけておきます。弟は、自分の我をおさえる事を知らなくてはなりません。」

シエラは、セシルがなぜここまで、レックスに気を使うのか分からなかった。セシルの身分違いの恋が、セシルの人間観をつくったのは分かる。けど、必要以上に、ただの使用人のレックスに気を使う理由があるのだろうか。

レックスは、おもしろくもなさそうに皿をつつついていた。顔の腫れは、だいぶひいてきている。若くて体力が並以上にあるレックスは、体の代謝も活発で、怪我の治りも早い。

セシルは、

「ファーが、自分の顔にパンチを入れただけでも、たいしたものだと感心してましたよ。私もそう思います。」

レックスは、ファーってだれだと思ったが、すぐにあの一番だと分かった。

「ボッコボコにされたんだよ。リベンジしようとしたけど戦ってくれなかった。代わりに二番、三番とやったけど、やっぱりファーをぶちのめさないと、気がおさまらない。領主様から命令してくれよ。明日、おれと戦うようにさ。」

セシルは、

「ファーは、私が命令しても、あなたとは戦いませんよ。彼は、自分に実力がおよばない相手とは、いっさい戦わない主義なんです。たとえ、無理に戦わせたとしても、防御だけで何もしないはずですよ。」

「つまり、子供を相手にしてるのと同じと言う事かよ。ロイドといい、なんかムカつくな。」

「ファーには、すぐにあなたの実力が分かったはずですよ。ですが、ロイドの気持ちも考えたんでしょう。ファーは、ロイドが幼いころより身の世話をしてくてますからね。彼は、ロイドの執事なんですよ。」

レックスは、ますますおもしろくなかった。グラセンは、

「ひさしぶりに汗をかいて、なまった体をほぐしたのでしょう。レ

ックス、もうそのくらいで、その不機嫌な顔をしまいなさい。負けてくやしかったのなら、実力をつけて、再度いんどんだらよいだけです。セシル様に失礼ですぞ。」

セシルは、ほほえんだ。

「実にたのしいですよ。私は自分がこうですから、元気な人を見ると、なんだがパワーをもらった気分なのです。今夜は、ぐっすり眠れそうです。」

セシルは、かるく咳きこんだ。

「失礼しました。そろそろ、おひらきにしましょう。長くなりましたので、みなさま、おつかれのはずです。今夜は、ゆっくりとお休みください。」

セシルは、そそくさと席をたった。廊下から、はげしい咳きこみがきこえる。長い話は、セシルの体力ではかなりの重労働だ。

そして、翌日、朝早く、レックスはセシルに呼び出された。使用人にセシルの私室に案内してもらう。青白い顔のセシルが、にこやかにむかえてくれた。

「よく、眠れましたか。本来ならば、私の方から、ごあいさつに出向かねばならないのですが、陛下。」

レックスは、広い室内にいくつかあるイスに、てきとうにすわった。

「グラセンからきいたのか。夕べのあんたの態度が気になってたか

らな。陛下はやめてくれ。おれは今は、ただの使用人だ。」

「グラセン様は、カードは簡単には切りませんよ。陛下の事は、うかがってはおりません。陛下は、おぼえておいでにならないみたいです。ダリウスからいらした、あなた方親子を、数日ここでかくまっていたのです。私は、そのかん、あなた様のお相手をしていたのです。」

そして、御立派になりましたね、と付け加える。レックスは、

「だから、陛下はやめてくれって。耳の辺りがかゆいんだよ。それに、でかくなっただのは体だけだ。自信のあった腕力も、プロの前では子供あつかいだっただけ。おまけに、字もまんぞくに書けない、読めないだし、王族としてのふるまいも知らない。」

「シエラ様のお力をかりればよいのです。読み書きなど、あとでいくらでも身につきます。王としてもふるまいも、シエラ様のたすけをかりれば、どうにでもなるでしょう。」

レックスは、ため息をついた。

「そうなるんだよな。結局、何から何までたよることになる。知り合いの女から言われたよ。おれは、なんでもたよってばかりだって。」

「最初だけです。何も知らなければ、人にたよるしかありません。教えてもらったものを、自分のものにしてしまえばよいのです。そのうち、すべてを御自分の力で解決できるようになるでしょう。」

「シエラは、グラセンから王家の剣をあずかっている。王子を見つ

けて、わたせつてな。シエラ、おれに気がついてるはずだ。何カ月もいっしょにいるしな。けど、まだわたししてもらってない。おれが、たよりないからだ。」

セシルは、

「わたし機会を考えているだけかもしれませんよ。わたしたら、シエラ様にも逃げ場はなくなりますからね。」

昨日、ずっと彼女と話をしていて、迷いがある事に気がついたのです。口では、責任とかどうとか言っていましたよ。けど、迷いがある。相手が、バテントスでは気がひけるのは、私も同じです。

けど、領主は、それを表に出してはいけないのです。シエラ様は、御自分が領主としてやっていけるか、最終的には王妃としての責任を負えるか、自信が無いのでしょうかね。」

「そりゃ、おれだって同じだよ。でも、やらなきゃなんないんだ。自信が無くてもな。」

「ですから、夕べ、御結婚をすすめたのです。シエラ様に覚悟をしていたためにです。やはり、王が必要なのです。エイシアをもう一度、一つにまとめるためには、やはりダリウスの正統なる宗主が必要なのです。」

やはり、ライアスがいてくれたら、レックスはギュツとこぶしをにぎった。

「おれは、シエラをバテントスとの戦いにまきこみたくない。あいつ、もうさんざんいやな思いをしてるからな。けど、やっぱり、お

れ一人じゃ無理だ。身近にいて、たすけてくれる人がどうしても必要だ。おれ、シエラと結婚するよ。あんたに証人たのむ。」

「かしこまりました。で、式はいつ。」

「あんたとグラセンの話が終わってからでいい。そのあと、おれはシエラにきちんと求婚する。この話はロイドにないしよだぜ。あいつ、じゃましてくるかもしれないしな。」

セシルは、ホッとしたようにほほえんだ。

「ロイドには、用件をたくさん言いつけておきますよ。シエラ様には、私の方からもさりげなく御結婚をすすめてみます。そろそろ、相談役がやってくる時刻です。あなた様は、退散したほうがよろしいでしょう。」

レックスは、セシルの部屋を出たとき、向こうから一人の僧侶がやってくるのが見えた。

僧侶は、レックスとすれちがいざま、うさん臭そうににらみ、こはお前のような者がいてよい場所ではない早々に立ち去れ、とかなんとか言いながら、セシルの部屋へと入っていく。

レックスは、フンと鼻をならし昨日の武芸場へと向かった。朝練が始まっているころだ。

六、マデラの罠(3)

領主のセシルの午前はいそがしい。シエラとグラセンとの昨日の続きは、昼もだいぶすぎたころ、やっと始まった。昨日は、セシル一人だったが、今日はバースとかいう、いかにもえらそうな顔をしたベルセア国教会の坊さんが同席していた。

バースは、機嫌が悪かった。

「セシル様、このような重大なお話に、なぜ昨日、わたくしめをすぐさまお呼びにならなかったのですか。教会の年中行事の儀式など、後回しでもよかったのです。」

「とつぜんの来訪だったのでな。大切な儀式の最中のお前に声をかけるのは、気がひけたのでな。」

バースは、目の前の少年のようなクリストン領主の娘をにらんだ。

「グラセン様、あなた様は、この娘が本物のシエラ姫だと信じておられるのですか。シエラ姫は、サラサにいるはずですよ。」

「バース殿。あなたは、私をおうたがいで。この方はまちががなく、シエラ様です。」

「証拠はあるのですか。」

セシルは、

「そのお方は本物ですよ、バース。お兄上様のライアス公と瓜二つ

です。お前も、ライアス公を御存知でしょう。」

「たしかに似てますな。けど、似ている者ならいくらでもおります。」

シエラは、兄のライアスと似ている者なんているはずないと思った。シエラは、ライアスより美しい人間は男女問わず見た事がない。

「私は本物です。今は証明できませんが、私はクリストンのシエラです。バテントスに護送されそうになった私を、グラセン様がたすけてくださったのです。」

「話になりません。すぐにお帰りください。グラセン様、あなた様もです。これ以上、我が主を悩ませるなら、いくら高位僧侶のあなたでも、我が国の法に従ってもらいます。」

グラセンは、ため息をついた。

「シエラ様、帰りましょう。話す事は、昨日であらかた終わっています。セシル様がどうしても相談役の意見をききたいとおっしゃったので、宮殿にやっかいになりましたが、もうその必要はないようです。」

シエラとグラセンは、席をたった。セシルがあわてた。

「お待ちを。バース、謝罪なさい。シエラ様は、たしかに本物という証拠はないのですが、偽者という証拠もないのです。お前のほうで、それを立立てできるのなら、私はお前を信じます。ですが、できないと言うのでしたら、いまずぐ謝罪してください。」

グラセンとシエラは、バースを見つめた。バースは、

「グラセン様、あなたがどういうお考えで、法王の名をかたり、カイルに接触したのかはききません。ですが、カイルは、あなた方とは無関係です。お引取りを。」

二人は、セシルの書斎を出て行った。セシルの手は、ブルブルふるえている。

「バース、お前はなんと言う事をしてくれたのです。カイルを思えばこそ、私はシエラ様のたすけとなりなかった。シエラ様の信頼をえて、彼女にこれから先の事を決意させれば、バテントス対策に手詰まり状態の現状に光がさすはずだったのです。なのに、ゆいいつの機会を、お前はつぶしてしまった。」

バースは、

「申し訳ございません。私は、グラセン様は、このような大事に茶番を演じる方ではないと信じております。ですが、シエラ様はサラサにいるのです。もし、本物にかかわったとなれば、カイルは本格的にバテントスを敵に回してしまいます。」

「お前の進言するバテントスとの条約についてか。あの、はてしなく不平等な。」

「クリストンの二の舞になるよりは、ましです。」

セシルは、

「神剣をもち、異国より、この大地を解放せし英雄ミュティカ。黄

金の髪を風になびかせ、空の色の瞳で、翼ある白馬にのり大空をかけめぐり、ダリウス王家の祖とならん。」

バースは、

「歴史の本にも、教会の教義書にもある一説ですな。彼女が、今の時代に生きていたら、バテントスも、かの地へと払ってくれるでしょうな。」

セシルは、両手をにぎりしめた。

「私には、あのお方の姿が、ミュティカ様にかさなったのです。黄金の髪と、あのお方は新緑の瞳をしていますが、あの若々しい活力にみちた姿は、まさしく過去の英雄の再来を感じさせてくれました。あなたも今朝方、廊下ですれちがいませんかでしたか。あの方が、三年前、マーレル・レイを去られた方です。」

バースには信じられない。セシルは説明した。

「シエラ様がどうしても必要なのです。陛下のお心は、シエラ様一つにかかっていますから。話がつきしだい、このマデラ宮殿で結婚式をあげさせる予定だったのです。陛下は、そのあと、必ずクリストンへ向かうと信じて。」

「証拠はあるのですか。前領主様が、王子をかくまった事実は知っておりますが、セシル様の御記憶のなかの陛下のおもかげだけでは、その者が王だという証拠にはなりませんよ。」

「グラセン様が、お連れしたのなら本物でしょう。彼は、マルガリーテ女王を即位させた人物です。彼が十三年、守り続けていたとし

ても当然でしょう。」

「なら、なおさら、王のお相手はベルセアからえらぶべきです。あのような国を失った、しかも、ドーリア公の娘などダリウスが納得するはずがない。なにゆえ、グラセン様は、あのような娘をえらんだのか。」

「理由があるはずですよ。私達には分からないね。バース、すぐに謝罪して、もどってきてもらうようにしてください。このままでは、カイルの立場はない。」

バースは、少し沈黙したあと、

「やはり、このままお帰りねがいます。グラセン様とあの娘には、かわらぬほうが身のためです。顔色が、すぐれませぬな。寝室で、少しお休みください。私は仕事がありますので、これで失礼します。」

体の弱いセシルは、このがんこ者には逆らえない。ここのところ、バテントス対策でキリキリしており、夜もロクに眠れず、セシルは体調をすっかりくずしていた。

シエラとグラセンは、レックスをつれ、宮殿から出ようとしたとき、いきなり宮殿の警備兵にかこまれてしまった。警備兵は有無を言わず、レックスとシエラを拘束し、グラセンを門の外へと追出す。

レックスは、シエラと引き離されたのち、窓のない真っ暗な部屋に閉じ込められた。部屋の前には監視兵が二人、扉にはカギ、逃げ

る事はできなかった。

（シエラ、シエラはどこにいるんだ。ひどい事されてなきやいいけど。けど、どうしてこうなったんだ。セシルの命令か。いや、昨日と今朝の態度を見れば、こんな事するはずない。いったい、だれが。）

じりじりと時間ばかりが、むだに過ぎていく。どれくらい待っただろうか。扉の前からドサツと音がきこえた。

「レックス、はやく。」

ミランダが、顔を出した。

「シエラは？」

「地下牢に閉じ込められてたわ。仲間がたすけたはずよ。」

ミランダは、レックスの手をグイとひっぱる。

「西門で、マーブルとグラセン様が待ってるわ。すぐにマデラ出るわよ。こまかい話は馬車でね。」

ミランダは、人目をうまくさけつつ、レックスを西門までつれてきた。西門にはロイドとファーとレスリング部数人がいた。レックスは、一瞬みまがえるが、ロイドは、

「早く逃げろ。警備兵は、おれ達が、できるだけひきとめるから。そのあいだにマデラから出るんだ。シエラはもうきてる。馬車は門の外だ。」

「ロイド、お前は。」

「おれの事は心配するな。シエラをたのんだぞ。」

警備兵がやってくるのが見えた。ミランダは、レックスをまたひっぱり、馬車へとおしこむ。シエラが、だきついてきた。マーブルは、馬車を一目散に走らした。

マーブルは、

「セシルは今、具合が悪くて寝ているらしい。ロイドも、セシルの用事で出かけて帰ってくる道すがら、西門に向かっているおれ達と出くわしたんだよ。おれが説明するまで、なーんにも知らなかったようだ。地下には毒が用意されてたんだ。助けるのがもう少し遅ければ、シエラは毒をのまされてたかもしれん。」

グラセンは、

「どうやら、バースのしわざのようですな。私達をかなり邪険にしましたからな。バテントス怖さにしたことでしょう。宮殿は脱出できましたが、マデラから、はたして出られるかどうか。」

レックスは、

「ミランダ、剣はどこにある。おっかけてくる兵の動きをしらべる。」

「シエラ様のそばの荷物よ。」

レックスは、剣に集中しようとしたが、心が乱れているせいで、まったく分からない。

「グラセン、パスだ。剣を使って、お前が調べてくれ。つくしろう、こんな時にライアスがいてくれたら。」

ライアスときき、シエラはレックスを見つめた。レックスが、剣をグラセンにわたそうとしたら、町の出口付近で兵が待ち伏せしているのが見えた。バースの手回しの早さにムカつく。馬車で強引突破しようにも、数が多すぎる。

「みんな、息をとめて！」

ミランダが、前方にむかい何かをなげた。爆発する。煙がもうもうとたち、兵士達がゲホゲボ涙をながしつづ、その場に倒れこんでしまった。

「ライアス様からあずかっていた毒蛾の幼虫よ。ライアス様はあのあと、爆発するよう改良してたのよ。しばらく動けないわ。」

馬が苦しそうにいないたが、人間と体の大きさがちがううえ、あつというまに毒の煙を突破したので、目が多少充血するだけなんです。そして、走れるだけ走った後、林の中でマールはつかれた馬をとめた。荷台にあった水を馬にのませる。

「ふー、なんとか助かったな。レックス、もう少し剣をうまく使えるようになれ。ライアスの代わりにもならん。」

「しょうがないだろ。だれも教えてくれないんだしさ。そうだ、グラセン、お前が教えてくれよ。」

グラセンは、乱暴な馬車に気分を悪くしたようで、茂みで苦しうにしている。ミランダが、グラセンの背中をさすった。

シエラは、

「どういう事？ みんなして、なんの話をしているの。なぜ、ライアス兄様が出てくるのよ。」

マールとレックスは、顔を見合わせた。レックスは、気まずそうにシエラから視線をそらしつつ、こたえた。

「ライアスが、お前に体を使って、おれ達を助けてくれたんだ。もう、いないがな。」

パン、シエラはレックスのほおをたたいた。

「兄様となんの話をしたのよ。私の体使って、何したのよ！」

「お前、なんか、えらいかんちがいしてんな。ライアスは、おれ達を助けてくれただけだ。おれ達は、シエラが覚えている以上に、バテントスに襲われてんだよ。そのつど、ライアスが助けてくれたんだよ。あいつがいなきゃ、おれ達は今ここにはいない。さっきのミランダの毒の爆弾だって、あいつが、おれ達のために残してくれたんだ。」

「じゃあ、なんで、私に兄様の事を教えてくれなかったの。私、一人で悩んで、すごく不安だったのよ。」

「ライアスは、お前の体を使ってる事に引け目感じてたんだよ。ど

れだけ、お前に気を使つてたか知らないだろうがな。けどもう、いないんだよ。だから、これ以上、ぐちゃぐちゃ言うな！」

「ひどいわよ、みんなして、ひどいわよ！」

シエラは、ワツと泣いた。マールブルが、いい加減どなにしろと怒鳴る。

「馬が水をのみ終わった。こんな林でグズグズできっか。できるだけ早くカイルを出ないと、やばい事になるんだぞ。シエラ、つかまりたいのか？」

シエラは、泣きながら首をふった。レックスは、

「だまっていた、おれも悪かった。すまない。さ、馬車に、」

ヒュンヒュンと矢が飛んでくる。木々にかくれていた鳥がいつせいに飛び立ち、林がさわがしくなった。足の速い騎馬隊が、向こうからやってくるのが見えた。

ミランダは、しまったと思った。気分の悪いグラセンと、レックスとシエラのケンカに気をとられていて、敵が見えるまで気がつかなかった。

矢が馬にあたる。騎馬隊は二十騎近くいたので、とても勝ち目はない。いつも近くにひそんでいるグラセンの部下も、足が遅れているらしく助けに現れなかった。

たちまち、とりかこまれ抵抗するすべもなく、つかまってしまった。カイル兵の動きはすばやく、あつというまに縄につながれてしまう。よく切れる重いオノが取り出され、シエラがその前にひきず

られた。

やめろ、とレックスがさげんだが、すぐに頭をなぐられ地面に倒され動けないよう、兵達にふみつけられた。強くなぐられたせいで、意識がもうろうとしている。

（レックス、レックス、しっかりして。この剣を。早く！）

ライアスの顔が脳裏にうかび、レックスはいつのまにか、荷台に置いたはずの王家の剣を手にしていた。シエラの首をねらったオノがふりおろされ、シエラの細い首にあたった瞬間、コナゴナにくだけちった。

レックスは、びっくりしている兵をおしのけ、たちあがり、シエラをつかんでいる兵をなぎたおた。そして、剣にすべての怒りをこめ、自分達を襲った者達へとぶつけた。

ドン、と林が爆発する。気がつくと、周囲の林は焼け焦げたようになり、自分達をおそった騎馬兵達は、焼死体に変わりはてていた。

レックスは、青くなり、シエラ達の姿をさがした。すぐに見つかった。さほど離れていない場所、そこだけ焼け焦げていない場所に、四人は眠るようによりそっていた。

ホッとすると同時に、光とともにライアスが現れ、レックスを見つめる。そして、剣をつかんでいるレックスの手を取った。

「この剣はね、人の思いを引き出し増幅させる機能がある。君が爆発させた憎悪の力があまりにも強くてね。カイル兵どころか、君もみんなも、ふき飛ばしてしまうところだった。自分の思いを制御し

つつ使わないと、こういう事故は、これからなんどでも起きる。気をつけるんだ。」

「いつから、そこにいたんだ。いなくなったんじゃない。お前が守ってくれたのか。」

ライアスは、ガクツとひざをついた。

「これだけで、精一杯。君達を守るだけで。ぼくは、消えたと見せかけて、感知されないよう自分の身の回りに結界を張って、君達のそばにずっといたんだ。さよならしたけど離れたくなかったから。でも、もう。」

ライアスの体が光を失い、それと同時にすきとおってきた。

「こんどこそ、お別れだ。シエラとケンカしないでね。さようなら、ぼくの大切な王子様。」

ライアスは、スーッと消えた。レックスは何がなんだか分からない。手にしていた剣をほうり投げ、わーっと大声をあげ、その場に倒れこむよう気を失った。

マデラ宮殿の客室で目をさましたら、すでに二日が経過していた。そばにいたマーブルから話をきくと、あのあと、ロイドがかけつけ、自分達を保護してくれたらしい。

バースは自殺をしたと、マーブルは重い口調でつけた。

「バースは、バテントスにおどされていたんだよ。シエラがマデラ

に向かっているから、きたら暗殺しろって手紙が、バースの部屋から見つかったんだ。おれたちゃ、ワナにかかりにきたようなモンだ。」

レックスの顔が、こわばった。自分達の行動は、バテントスにつぬけだった。

マーブルは、

「おどされていたのは、バース一人だけだ。セシルもロイドも今回の件については、まったく知らなかったようだ。」

バースの暗殺目的は、あくまでもシエラだけだったが、セシルがお前の正体に気がついたせいで、お前まで拘束されてしまったんだよ。シエラみたいに地下牢に入れなかったのは、お前が本物かどうかきちんと調べてから、どうこうするつもりだったらしい。

まあ、どっちにしたって、お前もシエラと同じになってたろうがな。偽シエラがいる以上、バテントスにとり、お前達はじゃま者でしかない。」

レックスは、なんでバースがおどされたのかと疑問に思った。ゼラムは、領主が直接おどされた。マーブルは、

「バテントスは、合理的な考えをするやつらだ。バテントスは、カイルの実力者は、相談役だと判断したんだよ。なんせ、セシルの断りもなしに、独断で騎馬隊を動かせるしな。」

けど、バースはやっぱり、ただの坊主だよ。今になって考えると手際が悪すぎる。結局は、おれ達に逃げられ、騎馬まで出すはめに

なり、セシルに問いつめられる前に自殺しちゃったもんな。」

バースはたぶん、突然、宮殿に現れたシエラにあせり、きちんとした暗殺計画をたてられないまま、ああするしかなかったのだろう。

レックスがこの町にきて、すぐに感知した、あやしい人影。今となっては、たしかめようがないが、彼らはバテントスではなく、バースの手の内の者で、自分達がマデラにいつやってくるか監視してたのではないか。

（シエラの姿が変わっていたから、おれ達を見つけられなかったのだろう。髪のみじかいシエラは、遠目では男にしか見えないからな。）

レックスは、なんだか悲しくなった。

「自分の国だけが助かれば、それでいいのかよ。エイシアは、四つの国と一つの宗教国家で一つなのによ。」

「十三年も王不在が続けは、そんなモンだ。」

レックスは、ベッドのわきにある王家の剣を見つめた。

「王家の剣、怖いモンなんだな。おれ、カッときて、バカやっちゃった。もう少しで、みんなを殺してしまうところだった。」

マーブルは、ポリポリ頭をかいた。

「お前のバカは昔からだろ。ベルンじゃ、カッカして馬車をひっくり返すしな。けどなんで、林がああなって、騎馬連中がああなった

のか、みんな必死で調査してるようだが、どうがんばっても答えは出んだろう。まあ、おれ達全員が無事で結果良しだ。すんじまったことは、もうわすれろ。」

「ライアスが助けてくれた。ひょっとして、ベルンのときも、シエラが軽症ですんだのは、ライアスが守ってくれてたせいかもしれない。おれ、ほんとにバカだ。もし、もし、ライアスがいてくれなかったら、おれ。」

レックスの目から、ぽろぽろ涙がこぼれた。大理石は、ふるえる息子をそっとだきしめる。

「お前にも、つらい思いばかりさせたな。守ってやると、絶対守ってやると決めてたのに、守りきれてなかったんだな。」

無骨な大理石の手が、レックスの金色の髪をなでている。レックスは、たまらなくなり、大声をあげて泣いた。

七、もうひとりのシエラ（1）

マデラで襲われた以上、ベルセアのグラセンの屋敷も安全ではない。レックス達はセシルと相談し、となりのダリウスへと行く事にした。グラセンは、襲撃事件のせいで体調をすっかりくずしてしまい、マデラから動けそうにもなかった。

マーブルは、

「カイルとダリウスの国境を越えると、クラサという土地に出る。クラサは、おれの土地だ。今は、人に管理をまかせてあるが、そいつの家まで行けば、おれ達をかくまってくれる。」

クリストンが、すぐとなりだが、国のさかいは、けわしい山脈でしきられていて、道らしい道はつながっていないから、とりあえずは安全だろう。そこで、シエラの叔父さんとやらの連絡をまとう。」

失った馬車の手配は、セシルがしてくれた。ついでに身分証も偽造してくれる。旅立つ日の朝、セシルはレックスに一通の封書をわたした。

「あなた方の結婚証明書です。式を私の手で行えなかった事を残念に思います。」

「まだ、結婚してないのに、こんなもの受け取れないよ。」

セシルは、ほほえんだ。

「では、グラセン様にでもあずけてください。シエラ様をたのみま

す。あのような状態にさせてしまつて、責任を感じております。バテントスの事がなければ、回復までおあずかりしたいのですが、今は謝罪以外、方法も言葉もみつきりません。」

シエラは今、心を病んでいる。一日中、ぼんやりしており、話しかけてもほとんど返事はしない。襲撃事件で受けた、ひどいショックのせいでこうなつてしまったのだ。

こんな状態のシエラをつれて、はたして旅を続けられるか、みんな疑問に思ったが、旅を続けるしか、シエラが生きていくすべはない。ゴトゴトとゆれる馬車からのぞく空を、シエラはうつろな瞳で見上げていた。

無理もない、マーブルはため息をついた。ずっと、うざったく感じていたが、懸命にレックスをおいかけ、いっしょにいるために髪まで切つてしまったシエラを、いじらしく、そして息子の嫁として愛おしく思い始めていたからだ。

せめて、ライアスがいてくれたら、マーブルはそう思わざるをえなかった。レックスもたぶん、おなじ思いだろう。

レックスは、シエラに王家の剣をわたした。シエラの指が無意識に動き、しっかりとにぎりしめる。

「おれがもっとしっかりしていれば、こんな事にならなかつたんだ。守つてやると約束したのに。」

レックスは、おちこんでいた。マーブルは、少し考えたあと、

「今夜から、お前がシエラといっしょにいるんだ。セシルから、結

婚証明書をもらったんだろ。偽の身分証も夫婦になってるし、別々にいると、あやしまれるぞ。」

レックスは、あわてた。

「お、おれ、女の子といっしょなんて困るよ。まだ、結婚してないのに。それに証明書は、グラセンにあずけちまった。」

マーブルは、ジロリとにらんだ。

「とにかくいっしょにいろ。そのほうが、今のシエラにとっていいはずだ。シエラはもう十八だ。成人した大人の女なんだよ。それに、おれは、ミランダと夫婦って事になってんだよ。」

レックスは、ピンときた。

「お前、なんでこんな毒女に手を出したんだよ。ヤキがまわったのかよ。それとも、四十半ばでモーロクしたのかよ。」

荷台から、ミランダのこぶしがレックスの後頭部を直撃した。クラクラする。マーブルは、

「ま、そういう事だ。おれがだれを好きになるか、お前には関係ないだろ。お前は、さっさとシエラとくっつけばいいんだよ。」

レックスは、困ってしまった。今の状態のシエラを、どうめんどろ見ていいか分からない。シエラの症状は、日常生活に、あまりさしつかえなかったのが、不幸中の幸いだった。

レックスは、シエラと今夜からいっしょ、と考えるだけで頭がモ

ワツとしてしまう。

（やばい。変なモウソウが。し、しっかりしろ、おれ。シエラは今、病気なんだぞ。ちゃんと、めんどろみなきや。そ、そうだ、妹だ。妹と思えばいい。）

レックスは、荷台のシエラを見つめた。シエラは、剣をしっかりとぎりしめたまま、あいかわらず空を見ている。今の話はたぶん、耳に入っていないだろう。

宿についたレックスは、シエラの手をひき寝室へとむかい、シエラをベッドにすわらせた。やっぱり、ドキドキする。レックスは、とりあえず声をかけることにする。

「あ、あの、シエラ。その、えと、おれ、なんにもしないから。きがえるんだったら、向こうむいて、」

シエラの手が、レックスの手をにぎった。

「ごめん、レックス。いろいろと心配かけて。分かってるの、なにもかも。でも、でも・・・！」

シエラは頭をかかえ、ベッドからおり床にうずくまる。死の直前まで行ったあの時の恐怖が、シエラの心をしびりあげる。

「ご、めん、レックス。ごめん。」

シエラは、床にうずくまったまま動かなくなった。目はうつろだ。レックスはシエラをベッドにすわらせた。正気にもどっても、すぐにこうなる。マデラを出て十日がすぎている。シエラは回復するの

だろうか。

レックスは、王家の剣を持ち、シエラをだきしめた。よい方法はないのだろうか。ライアスがいない今、自力でシエラを助けなければならぬ。

（ライアス、おれに力をかしてくれ。たのむ。）

祈りにも似た思いだった。いや、祈りだったのだろう。レックスの脳裏に、一人の女性が現れた。レックスは、その女性に見覚えがあった。思わず、すがりつくよう助けをもとめる。女性はうなずき、ベル、と名乗った。

「シエラは今、二歳にもどり、母親とライアスとすごした、やさしい時間の中にいます。その世界から、シエラを連れ出す事ができるのは、ライアスだけでしょう。二歳のシエラは、あなたを知らないのですから。」

「ライアス、ライアスは、どこにいるんだよ。」

ベルは、少し目をふせた。レックスは、なんとなくいやな予感を感じた。

「あなたに覚悟がありますか。あの子の、ライアスのすべてをうけいれる覚悟はありますか。」

「ライアスとシエラをとりもどせるなら、おれはなんだってやる。何をすればいいのか教えてくれ。」

ベルは、

「昔、ある異国の男が、この島を支配していました。ミュティカが戦い、死においやった男です。この男の魂は、そのときの憎しみから、この地をのろう魔物になってしまいました。男は、ミュティカに復讐するために、彼女の魂が転生する時を待っていたのです。」

そして、クリストンに介入し、さまざまな方法で、転生したミュティカの魂に闇をつくるべく、ライアスを追いつめていきました。ライアスが死してのち、その魂をとらえ、自分がいる世界へと引きずり込み、自分と同じ苦しみを味あわせるために、ライアスの魂を汚し続けていたのです。」

けど、ライアスは、あなたとシエラへの思いが強く、シエラの中に留まることができました。シエラは私の魂から出た者ですから、シエラの中にいれば、魔物は簡単にはライアスに手を出せません。ですが、シエラの拒絶が強まり、ライアスは出ていかざるをえなくなってしまうたのです。」

「ライアスは、シエラから出たあと、おれ達といっしょだったって言ってた。魔物の話が本当なら、なぜライアスは無事でいられたんだ。シエラから出ていたのにさ。」

「あなたの思いが、ライアスにつながっていたからです。私もできるだけ、ライアスを守っていました。ですが、あの剣の事故により、力を使い果たしたライアスは、自分の意識すら保てなくなり、本来逝くべき世界へと、魔物の力により、ひきずりこまれてしまったのです。」

私は、ライアスを守るためには、シエラの中に置く事が最善だと考えています。ですが、シエラにはシエラの意志があるので。私

の本意ではないとはいえ、どうしようもありません。」

「じゃ、なぜ助けに行かないんだ。そこまで、あいつの事を考えていたならさ。」

「ライアスが拒絶したからです。」

「拒絶？　ライアスが、お前をか。自分の魂の親であるお前を拒絶したのか、ベルセア。」

ベルセアは、悲しげな顔をした。

「あなたに、自分の本当の姿を知られなくなかったのでしょうか。以前のあなたならともかく、霊的なものが分かりつつある今では、自分がどういふ状況におかれているかを、ごまかす事はできなくなりつつありますから。」

レックスの手が、ブルブルとふるえはじめた。

「うそだ。おれは信じないぞ。ライアスがそんなだったなんて、おれは信じないぞ。」

ベルセアは、

「あの子のいる場所へ、あなたをおくります。真実は、その目でたしかめてください。」

レックスは、ベルセアによって、遠慮なく行くべき場所へとつきおとされた。手にもつ、ミュティカの剣とともに。

そこは、雪がまいおりる戦場だった。地面に、ふりつもっていないところを見ると、冬のはじまりかもしれない。

ワーツと言うかけ声と、ガチャガチャする甲冑の音。馬のいいなきとパカパカとかけめぐる足音。剣がはげしく交わる音、さらにドーンドーンという、耳をつんざくような音は、たぶん大砲なのだろう。

だが、音はきこえても、レックスの目には、モヤモヤとした黒い物が、はげしく動いているようにしか見えない。

ベルセアの声が響いてきた。

（まだ、あなたの力では、すべてを見通すには無理があります。はつきりしないものは、無視してもかまいません。）

レックスは、

「ここはどこだ。どこかの戦場みたいだが。」

レックスからは、ベルセアの姿は見えない。響いてきた声も、レックスの内側からきこえてきていた。

（ここは、ライアスが最後に生きた場所です。ライアスの記憶の中の世界。ライアス自身が、わすれたいとねがっている世界。ライアスは、自分がもっともいたくない世界に、閉じ込められているのです。）

「地獄って、もっとドロドロしたモンだとばかり思ってたぞ。ここは、ふつうの戦場じゃないか。やたら、薄暗いけどさ。」

（この世界は、そんなに深い場所にはありません。地獄の上の世界です。魔物は、もっと下にひきずりこみたかったようですが、下にいくには、魂をもっと穢けがさなくとはいけないのです。魔物は、この世界のライアスをもねらっているのです。魔物が、ライアスをもっと穢す前に助け出してください。）

「ライアスは、どこにいるんだ。」

（さがしてください。きっと、見つけられます。あなたの安全は私を守ります。ですから、あなたはライアスの説得だけに集中してください。）

七、もうひとりのシエラ（2）

レックスは、ただっぴろい戦場を見回し、しかたなしに歩き始めた。

（どこもかしこも似たように世界だな。こんな広い場所で見つけられるのかよ。けど、さむ。雪のせいだろうけど、体が冷えると言うよりは、心が冷えるといったほうがいいかも。すごく、つめたい。）

手にもつ剣が、ほんのりとあたたかかった。レックスは、どんよりと暗い空からふりしきる雪を、いまいましそうにながめた。

（ライアスが死んだのは、たしか冬のはじめだったな。そのあと、シゼレが領主になって、最後の戦いにいんどんだってきいたけど、これもあっさり負けてサラサは陥落したんだよな。）

レックスは、地面に大きくあいた穴の前で足をとめた。なんとなく、気にかかる穴だった。剣に意識をあつめ、この穴があいた時間を再現してみる。この穴は、ライアスの死だった。

レックスは、穴の中に降りた。ライアスは、死体も残さなかったと言っていた。えぐれた地面にそつと手をあてる。レックスは、手をあわせ、ライアスのために祈った。

レックスは、殺気を感じ、急いでに穴から脱出した。ドーンという音が、レックスが先ほどまでいた穴の中で爆発する。大砲か、と思ったが、いやな気配を感じ上を見ると、上空に黒くて大きなものがただよっている。

その黒いものが、大砲の弾のようなものを、レックスめがけてぶつけてきた。レックスの手が自動的に動き、頭上に巨大な盾を出現させる。盾が、レックスを守ってくれた。

（なんだ、これ。おれがやったんじゃないぞ。そうだ、ベルセアだ。彼女がやっているんだ。）

また、手がかってに動き、今度は黒いものめがけて、剣から光弾を発射させる。光弾にあたった黒いものは、姿をはっきりと現した。

巨大な黒いドラゴンだ。レックスは、ふるえあがった。

（ドラゴン？ まじかよ。まさか、こいつが例の魔物？）

ドラゴンは、憎悪にみちた赤い目で、小さなレックスをにらんだ。ぞっとするような、つめたい視線だ。ドラゴンは、レックスめがけて火をはいたが、ベルセアの結界によって、さまたげられる。

こんなバケモノ、相手にしたって絶対勝てない。この場合は、素直に逃げたほうがいい。レックスは、逃げ出した。

ドラゴンは、漆黒の翼で、おいけてきた。そして、情け容赦なく、レックスに攻撃し続ける。もし、ベルセアの守りがなかったら、この世界で即死していただろう。

（こいつ、どこまでおいけてくるんだ。しつこい！）

レックスは、逃げるのをやめた。人間の足とドラゴンの翼とでは分が悪い。

「やい、ドラゴン。お前、ライアスを知ってるだろ。お前につかまっているのは分かっているんだ。さっさと出せ！」

きつとまた、ベルセアが守ってくれるはずだ。逃げても逃げ切れないのなら、やるだけやってみるまでだ。ドラゴンは、攻撃してこなかった。

「出て行け。ここから、すぐに出て行くんだ。ここは、お前のくる場所ではない。」

重く、つめたい声が響いた。

「ライアスを出せ！ おれのライアスを返してくれれば、すぐにも出て行ってやる。」

「なぜ、ライアスにこだわる？」

「お前には関係ない。とにかく早く出せよ！ このままじゃあ、シエラが助からない。あ、」

関係ないとか言っておきながら、シエラの事をしゃべってしまった。レックスは、自分はバカだとまた思ってしまう。

ドラゴンの憎悪に満ちた表情が、少し変化したように見えた。

「そのシエラとかいう小娘は、なぜ助からないのだ。怪我か病気にでもなったのか。」

レックスは、ドラゴンの瞳をじっと見た。そして、

「今のシエラは、魂のぬけがらなんだ。オノで首をおとされかけて、ひどいショックを受けて、そうなってしまった。シエラは、ライアスとすごした時間にもどっている、ベルセアが言っていた。その時間には、おれはいない。いるのは、母親代わりだったライアスだけだ。たのむ、おれといっしょにきてくれ。」

ドラゴンは、レックスを見つめた。そして、なぜ分かったのかとたずねる。レックスは、

「小娘と言ったろ。シエラだけじゃあ、関係ないやつは小娘とは分らない。」

ドラゴンの姿が煙のように消え、白い馬と、いつも見なれている髪のみじかいシエラが現れた。

「バカだと思ってたのに、意外と細かい事に気がつくんだね。たった一言、うっかり小娘と言っただけで、ぼくの正体を見抜くなんてね。君はしつこいよ。あれだけおどしたのにな。さっさと、逃げ帰ってくれるのを期待してたのに。」

シエラの姿をしたライアスは、馬の白いたてがみをなでた。レックスは、

「お前、なんで、シエラなんだ。その白い馬は、どこから出てきたんだ。」

「ぼくが、どんな姿をしていようが、君には関係ないよ。この子はね、白竜はくりゅうというんだ。伝説にある、ミュティカの翼ある白い馬さ。馬のように見えるけどドラゴンだ。さっきのドラゴンは、ぼくと白竜が合体してた姿なんだよ。君をこわがらせようと思ってさ。」

ベルセアの声が、またレックスの心に響いた。

（今のライアスは、もとの輝く姿をとれません。この世界に堕ちた者の宿命なのですから。気をつけてあげてください。）

レックスは、ライアスに手をさしのべた。

「帰ろう。こんなとこにいてはいけない。おれといっしょに帰ろう。」

ライアスは動かなかった。レックスをにらみつけるよう、見ているだけだ。地上にいるときのライアスは、自分をこんな目では決して見なかった。心を病^やんでいるのは、シエラだけではない。ライアスもずっと、心に深い傷をかかえている。でなければ、こんな世界に捕らわれるはずもない。

（ライアスは、塔に閉じ込められて餓死寸前だったと言っていた。いくら、反乱に反対したとは言え、子供にそこまでひどい仕打ちをする親がいるなんてな。

マールは、確かにどうしようもない男だけど、おれに、親としての愛情をそいでくれた。おれが、マデラで泣いたときも、おれの気がすむまでだきしめてくれた。

シエラの母親は、シエラが小さいころに死んでいる。子供だったライアスにとり、父親はたった一人の親だったはずだ。もし、おれがライアスだったら、やっぱり、たえきれないだろうな。）

レックスは、白い馬とよりそっているライアスを見た。心の中か

ら、ベルセアの声がきこえる。愛してあげてほしい、と。

（愛してあげてください。その子は、あなたの子ですから。その子の名前は、シエラ。ミュティカの幼名。）

レックスの心がふるえた。シエラ、そうだ、おれはいつもシエラと呼んでいた。

「シエラ、帰ろう。おれといっしょに。」

ライアスは、ハッとしたようにレックスを見つめた。レックスは、
「お前、前にシエラとして生きたいとかなんとか言ってたろ。なら、シエラとして生きればいい。ライアスは死んだんだ。もう、遠慮なんかする必要はない。お前はシエラだ。さあ、おいで。」

ライアスは、どうしていいか分からないようだった。さしのべられた手から逃げるよう、白竜のうしろに回る。レックスは、

「その白い馬もつれていこう。お前の友達なんだろ。こんなところまでいっしょだなんて、よっぽどお前が好きなんだな。」

「く、くるな。なにを言われても、ぼくはここから動かないぞ。だいいち、君はおせっかいなんだよ。なんで、こんなところまでくるんだよ。」

「だから、お前の妹がピンチなんだって。シエラがあのままだったら、おれだって困るんだよ。」

「医者にみせればいいだろ。もう、ぼくには関係ない。」

レックスは、馬のうしろからライアスをひっぱりだした。そして、だきしめる。

「すまない。おれが無力なばかりに、お前達二人とも、こんなにさせちまった。今から、おれがお前の親になる。だからもう離さない。愛している、シエラ。」

ライアスは離れようと、レックスの腕の中でもがいた。レックスは、ぎゅっとだきしめ、ライアスのひたいにキスをし、栗色のみじかい髪をそつとなでた。

「今の姿がいい。こうしてだきしめる事も、髪をなでる事もできるしな。ライアスの姿のままだったら、さすがにできないしな。お前は、女の子でいいんだよ。おれのちっちゃなシエラでいいんだよ。お前、おれに、ずっとこうしてもらいたかったから、今、シエラの姿をしてるんだろ。だったら、意地はらないで、最初からすなおにそう言えよ。」

ライアスの目から、涙がこぼれた。ライアスは、うっうっとレックスの胸にすがり、泣き始める。ライアスは、父さんとおぶやいた。気がつくと、レックスはもとの宿にいた。

シエラの姿をしたライアスが、ぼうぜんとしているシエラの顔を見つめる。そして、シエラの体に入った。レックスは、たのむ、と心の中でつぶやく。まもなく、シエラの顔に表情がもどった。

シエラは、

「兄様がきてくれた。もう心配ないって言ってくれた。私、バカだ

ったわ。あんなに邪険にしてさ。」

「ライアスは、おれが引き受けるか？」

シエラは、首をふった。

「このままでいいの。私、兄様にあまえてばかりで、何もしてあげられなかったから。あの子ののぞみは、私といっしょに、あなたのそばにいる事。だから、このままでいいの。」

「無理してんじゃないのか。あいつ、いろいろと問題あるし、変なのにも、ねらわれてるしさ。」

シエラは、少し笑った。

「確かにね。でも、私のたいせつな兄様よ。私といっしょにいてくれた方が、安心するし心強い。殺されそうになった、あの時の恐怖は完全にはぬぐいきれないけど、兄様がいてくれるだけで、自分を見失わずにすむしね。」

そして、レックスが持っていた剣を見つめた。

「グラセン様との約束を守らなきゃね。その剣、かして。」

シエラは、レックスから剣を受け取った。

「はい。私からあらためて。おくれてごめんね。」

「いつから気がついてた？」

「会ってすぐによ。これも縁かな、って思っちゃったわ。さ、受け取って。」

レックスは、わたされた剣を、すぐにシエラに返した。

「これは、お前の中のライアスにだ。持ち主に返すよ。おれは、この剣をまだうまく使えない。へたくそが持ってたって役にはたたんからな。ライアス、いやもうシエラか。あとで剣の使い方を教えてくれ。」

八、クラサの真実（1）

レックス達は今、クラサの町はずれにある大きな屋敷にいた。この屋敷は、クラサの地主である、サクセス家（マーブルの本名は、ウォーレン・サクセス）が別荘として所有していたものだった。

屋敷には、老夫婦が住んでいた。彼らはもとはマーレル・レイのサクセス家に長年つかえた執事夫婦で、マーブルが宮殿に入り婿したとき、別荘とクラサの管理をまかされ、移り住んできたのである。

十三年ぶりに姿を現した主人を、老夫婦は涙をながしてむかえた。生きて、帰ってきてくれると信じて、ずっと待っていてくれたのだ。

マーブルは、宮殿が焼けたときから、もう帰るべき家はないと思っていた。だがそれは、思い過ぎだった事に、老夫婦の涙を見て気がついたのである。

（もう、どこにも行く必要はない。マデラで考えてたとおり、ここでミランダとくらそう。はなやかなマーレル・レイとちがって、何もない田舎町だが、ここがいい。）

マーブルは、クラサにきてまもなく、この事をレックスにつげた。レックスは、それもいいんじゃないかと笑っていた。

今日も、屋敷の敷地内にある鍛冶小屋から煙が立っている。ここのおじいさんが、農作業に使うクワとかフォークを趣味でつくっている、小さな鍛冶小屋だ。

マーブルは、母屋の窓から鍛冶小屋をながめていた。

「今日も朝から鍛冶場かよ。もう、昼過ぎだつてのに、あきないもんだな、シエラ（ライアス）は。鍛冶仕事が好きなら、ここのジーサンのいい相手だな。」

レックスは、

「銃を改良してんだよ。あの銃、かなり使い勝手が悪いみたいだ。第一、まっすぐ飛ばないしさ。それに、変なクセがあるみたいだし。あんなもの、よくあんたが使ってたって、シエラ、感心してたよ。」

「まっすぐ飛ばなきゃ、銃の口をずらして撃てばいいんだよ。うんと遠距離ならともかく、近距離なら、どっかにあたるんだよ。」

いい加減なマーブルらしい答えである。レックスは、

「シエラは、あの銃を戦争で使うつもりでいるんだ。やっぱり、接近戦よりの遠距離からの攻撃のほうが有利だしさ。シエラの叔父さんが山越えて、もうすぐこっちくるじゃないか。叔父さんに見せるつもりなんだ。」

シエラの叔父サイモンが、こちらに向かっている。問題の山脈を越えての来訪である。山脈の向こうのクリストンは、今の季節、雪にうまっている。雪は山で止まり、こっちはカラッとしたつめたい風のみだ。

マーブルは、

「山越えか。クリストン側の山は、雪で道なんか分からなくなってるのにな。遭難そうなんしなきゃいいがな。」

「シエラは心配ないって。クリストンの諜報やってた人だから、あ
あいう雪の山道もなれてるって。叔父さん、おれに早く会いた
いっ
てさ。」

「ライアスの事を、そのサイモンとかいう叔父は知ってるのか。」

「たぶん。シエラ、この前手紙かいてたから。そうだ。あんた、ラ
イアスの事で、グラセンを説得してくれるって言ってたよな。あれ、
どうなってんだ。」

マールは、頭をポリポリかいた。

「わすれてた。けどまあ、だいじょうぶだろう。それに、お前達だ
けじゃあ、クリストンをどうこうするのは、むずかしい。グラセン
も分かっている。」

「やっぱりな。約束わすれるの、あんたの十八番なんだよな。」

「なにが、十八番だよ。ったく、口だけは、一人前なんだな。レッ
クス、クリストン行ったら、シエラの言う事をちゃんときけよ。今
のお前は、なんにもできない、ただの青二才なんだからな。分かっ
たな。」

「しつこいな。なんども繰り返すなって。そんなに信用できないの
かよ。」

マールは、ハーツと息をはく。

「いままでが、いままでだったからな。まあいい。おれは出かけて

くる。夕方までには帰るから。」

「どこ行くんだよ。ここんどこ、毎日だな。」

「おれのジーサンの墓参りだよ。ジーサン、ここが好きだったからな。墓はマーレル・レイじゃなく、ここにあるんだよ。おれのマーブルって名も、ジーサンがかわいがってた、ブチ犬の名前からとったんだ。」

「じゃあ、おれも行くよ。ずっと、屋敷にいただけで、あきあきしてんだ。」

「お前はダメだ。お前の顔は、この田舎じゃ目立ちすぎる。マデラ宮殿じゃあ、使用人の女どもに、すぐ顔をおぼえられたってきいたぞ。こんな大事な時期に、お前を必要以上、人目にさらしたくないんだ。」

「だからって、どこにも行けないなんて拷問だよ。墓って、この屋敷の裏山にあるんだろ。裏山だったら、人目なんて関係ないじゃないか。」

「おれは、一人で墓参りしたいんだ。ジーサンに話す事もたくさんあるしな。それに、裏山にも、ときどき町人が入ってくるんだよ。退屈してんなら勉強でもしろ。字もまんぞくに書けないんじゃない、クリストン行っても笑われるだけだ。ここには、何冊か古い本がある。ミランダにでも教えてもらえ。」

マーブルは、行ってしまった。レックスは、勉強はきらいだ。窓がコンコンとなり、シエラが顔を出した。

「ヒマなら、外でてきなよ。改良が終わったから、試し撃ちにつきあえよ。」

これは、ライアスの方のシエラだ。シエラのめくりあげた腕に、火傷のあとがあるのをレックスは見つけた。シエラは、

「うんと冷やしたから、もう痛みはないよ。マーブルが、出かけたみたいだけど、どこへ行ったんだ。マーブルにも試してもらいたいんだ。」

「ジーサンの墓参りだってさ。おれも連れてってくれとたのんだけど、ことわられた。人目には、さらしたくないって。」

シエラは、まじまじとレックスの顔を見た。

「顔立ちの良さはかくせないんだよ。君はやっぱり王家の人間だよ。こんな田舎じゃ、どうしたって目立ちすぎる。」

「いままで、そんな事は、一回も言った事がないのにな。クラサにきたとたん、こうだし。」

「しばらく、ここに留まらなきゃなんないからね。町の人に顔をおぼえられて、そこから足がつくとも限らない。まあ、用心にこしたことはない。ここは、町外れで、しかも大きな屋敷だから、君を閉じ込めるのにはちょうどいいんだよ。それに、マーブルだって町には行っていないんだよ。知り合いに会ったら、やばいからね。ほくも出てないしね。」

シエラが、レックスの腕をつかんだ。

「さ、早く出てきてよ。あとで、マールにも撃たせて、感想きかなくちゃ。」

で、その夜、レックスは、以前から疑問に感じていた事を、シエラにたずねた。

「なあ、お前ら、いったいどうなってんだ。お前の体には、二つの魂が入ってんだろ。きゅうくつとか、せまいとか、そんなのなのか。」

シエラは、

「うーん、なんて説明すればいいんだろ。魂が、かさなって、一つになってる感じがな。せまいとか、きゅうくつとか、そんな感覚なんてないよ。けど、以前よりいろんな事ができるようになったし、分かるようになっちゃった。」

「そりゃ、ライアスがいるからだろ。神童なんだぞ。だから、おれによこせと言ったんだよ。」

シエラは、あきれた。

「しょせん、レックスの考えって、そんなものなのよね。結婚してから、ほんと、見たくもない、いろんなものが見えてきちゃったし。」

「悪かったな。それより、夕方、ミランダの仲間が、ここへたずねてきたみたいだけど、なんか報告受けてないか。」

「いつもの定時連絡ね。そうそう、グラセン様がベルセアにお帰りになられたって。体調、よくなったんだね。よかった。」

レックスは、寝室のテーブルにおかれた本を見つめた。

「シエラ、クリストン行く前に、おれに勉強教えてくれよ。夕方、あんまり退屈だったんで、ミランダに教えてもらってたんだ。勉強きらいだけど、字くらい書けなきゃな。」

「うん、立派な心がけだね。でも、私の先生はきびしいよ。」

翌日もまた、シエラは朝早くから銃をいじくっていた。昨日、試し撃ちで不具合が見つかったので、そこを直しているのである。レックスは、ミランダに勉強を教えてもらっていた。マーブルは、また墓参りである。

レックスは、雑誌にきたない文字を練習しつつ、

「なあ、ミランダ。墓参りって、そんなに行くものかよ。毎日だぜ。」

「マーブルの両親は、マーブルが八、九歳の時に、はやり病で二人とも亡くなっているのよ。マーブルは、おじいさんに育てられたの。たった一人の肉親で、おじいさんは、とても、かわいがってたらしいわ。」

ミランダは、レックスの文字のつづりを直した。レックスは、

「それは知ってるよ。けど、毎日だぜ。ジーサンに話す事なんて、

そんなにあるのかよ。」

「話は最後までできなさい。そのおじいさんがね、マーブルの花嫁をたいへん、心待ちにしてたのよ。けど、花嫁の顔を見ずに亡くなられたの。マーブルはね、あなたが産まれたとき、人にたのんで、おじいさんの墓に花の木を植えたのよ。春になったら、黄色の花が咲く木をね。たぶん、その木を見に行ってるのよ。」

レックスは、文字を書く手をとめた。ミランダは、

「あの人、あなたのお母さんを、まだ忘れてないのよ。ううん、忘れるなんて無理ね。あなたのお母さんは、たしかに存在したんだものね。その木を見て、いろんな思い出にひたっているのだと思うわ。」

「マーブルは、お前といっしょになるって決めたんだらう。」

ミランダが、新しい紙を用意した。そして、インクの残量をたしかめる。

「そうね。私と結婚する前に、過去を整理しているのだと信じたいけど、このごろ迷いがあるのよ。ほんとうに、あの人といっしょになるのが正解なのかなって。」

「どういう事だよ。好きなんだろ、マーブルが。」

ミランダは、少しだけ考えてから口をひらいた。

「他にすべき事があるんじゃないかって。自分の居場所も、ここではなくて、そこにあるんじゃないかってね。結婚する前の迷いと言

えば、そうかもしれない。」

「クリストン行くなって事か。それとも、こんな田舎じゃ不満って事か。」

ミランダは、首をふった。

「分からない。だから、迷ってるの。」

「あのバカ親父が、はっきりしないのが悪いんだな。おれから言っておくよ。もう、墓には行くなって。それでも行くんなら、そんな木、おれが切り倒してやる。」

ミランダは、笑った。

「親父なんて言葉、はじめてきいたわよ。父さんって呼んであげたら。きっと、喜ぶわよ。」

「気持ちを素直にして告白するよ。父さんって呼びたい。ずっとそう思ってた。けど、逃げるために、何もかも捨てなきゃならなかったんだ。マーブルも、おれの事、アレクスって呼んでないしさ。」

「おたがい、照れくさいのね。ま、しょうがないわね。さ、勉強、勉強。集中。」

レックスは、うるさい母親ができたみたいだと感じた。マーブルと結婚すれば、ミランダは義理の母になる。

それで、この日もこんな感じでおわった。

八、クラサの真実（2）

リクセンから、ずっと続いていた緊張した日々から解放され、のんびりとした時間にもなれたころ、シエラの叔父サイモンが屋敷に到着した。

「シエラの叔父のサイモンです。姪が、大変お世話になりました。亡き両親と、兄二人にかわり、お礼申し上げます。」

サイモンは、その場にいたマールとミランダにたいし、深々と頭をさげた。マールは、

「シエラを助けたのは、グラセンだ。礼だったら、グラセンに言え。おれ達は、やつのたのみで、シエラの面倒をみていただけだ。」

「いずれ、ベルセアに行き、直接お礼を申し上げるつもりです。ところで、シエラはどこですか。シエラの夫となられた、あなたの御子息にもお会いしたいのですが。」

ミランダは、

「二人は今、町へ買出しに行っています。シエラ様がどうしても手料理で、あなた様を歓迎したいとおっしゃられましたので。もうしばらくしたら帰ってくると思います。」

マールは、

「ここで、旅のつかれがとれるまで、ゆっくりするといい。ただし、町には出ないでくれないか。ここに、客がきているのを、あまり知

られたくないんだ。シエラの事は、手紙で知っているよな。信じられないかもしれないが事実だ。ライアスは、シエラといっしょだ。」

サイモンは、

「信じざるをえないでしょう。手紙の筆跡も内容も、ライアスそのものです。シエラでは、あのような確な手紙は書けません。はじめこそ疑いましたが、何通もとどけば、疑う余地などなくなります。」

マールブルは、ライアスが、サイモンへの手紙をミランダにたくしっていたのは知っていたが、そんなに何通も書いてたなんて知らなかった。

「じゃあ、こっちの事情は、あらかた知ってるな。息子は、シエラといっしょにクリストンへ行きたがっている。だが、まったく役にはたたん。それだけは、覚えておいてくれ。おれは少し出かけてくる。」

マールブルは出て行った。日課となってしまった墓参りだろう。マールブルが、サイモンに敵意をいだいていることは確かだ。ミランダは、その事をサイモンにわびた。

サイモンは、

「それだけの事を、我々はしたのです。この場で、彼に殺されたとしても、しかたないと思っていました。十三年前の事を、謝罪しようとも考えていましたが、今の御様子ではとても口には出せません。なのに、シエラを保護してくださり、結婚までさせていただいて、叔父としては感謝の言葉もつきません。」

「あの、サイモン様は、お一人でここへ？」

サイモンは、ほほえんだ。

「冬山は、私一人では無理ですよ。供を数人つれてきています。ミランダさんのお仲間と、今ごろあいさつをかわしてますよ。」

「もし、お疲れではなかったら、鍛冶小屋へ御案内させていただいてもよろしいでしょうか。シエラ様から、自分がいないうちにサイモン様がいらしたら、例の物を見ていただくよう、言い付かっておりますから。」

「例の物？ 手紙にあつた銃ですか。それはぜひ拝見したいです。案内をおねがいします。」

サイモンは丁寧な男だった。ミランダのような女にも、身分の高さなど感じさせない、自然な態度で接してくる。ミランダは、レックスをあずける以上、どんな男かと多少警戒はしていたが、これなら心配なさそうである。

シエラは、レックスとともに町で調達した食材をもち、帰り道を急いでいた。レックスは今、王家の剣の魔法により、屋敷のおじいさんに化けている。シエラもおばあさんだ。

レックスは、

「そろそろ、もとにもどしてくれよ。ジーサンなんてやだ。」

「まだ、町から出たばかりよ。だいたい、レックスが屋敷から出た
いって言ったのよ。姿見られちゃまずいし、この方法しか思いつか
なかったの。だから、もう少しだけガマンして。それに、私もおば
あちゃんなんだしさ。」

「いいな、いいな。ライアスがいるやつは。なーんの苦労もなく、
あの剣つかえるんだもんな。おれなんか、いまだにうまく使えない
しさ。」

「また、その話。いい加減あきらめたら。それに、私だって、あの
子がいなきゃ剣はうまく使えないわよ。レックスと同じように、自
分でも使えるように練習してんのよ。それに、ライアスなんて言っ
ちゃだめよ。あの子、自分はシエラだって決めちゃったんだしさ。
レックスの事、父さんって呼びたいみたいよ。」

レックスは、ブンブン首をふった。

「それだけはやめてくれ。気持ちだけにしてくれ。おれは、まだ十
八だ。自分の子供もいないのに、あんなデカイのに父さんなんて呼
ばれたくない。」

シエラは、あきれたようにレックスを見つめた。

「親になるって約束して、あの子をつれてきたんじゃない。責任は、
しっかりとってもらわよね。そろそろ、変装をとくわよ。」

レックスは、もとにもどった。

「あいつが表に出ていると、やたら甘えてくるんだよな。子猫みた
いに、ペタペタしてくるしさ。なんか、幼児返りしてるみたいなん

だ。まあ、かわいいといえそうだけどさ。」

「あの子は今、とにかく甘えたいの。だから、好きなだけ甘えさせてやって。そのうち、もとにもどるわ。」

二人は、屋敷の前までできていた。レックスは足をとめた。

「シエラの叔父さん、どんな男なんだ。おれには、昔の事があるから、なんか怖いイメージがあるけど。」

「レックス、クリストン行くの、やっぱり不安？」

「かもな。でも、行くしかないんだよ。おれが決めたんだしさ。」

パン、と銃声が響いてきた。サイモンがきている。シエラの顔は、パツと明るくなった。手にしていた荷物をレックスにあずけ、走っていった。

シエラの手料理は、ミランダの指導もあって、なかなかのものだった。夕食は、シエラのたえまないおしゃべりと、サイモンの気のきいた話で笑い声がたえなかった。

レックスも、サイモンの飾らない人柄に安心したようだ。この老夫婦もまじえた、この日の夕食は実に楽しいものだった。

ただ一人をのぞいては、である。

そして、翌日、二人の若い夫婦と、これからの事について話を終えたサイモンは、マールブルが出かけている墓へ、二人に案内しても

らう事にした。

墓は、見晴らしのよい場所にあった。マーブルは、天気がよければ、一日中ここにいます。マーブルは、丘のかれた草にすわり町をながめていた。

サイモンは、

「気持ちのよい場所ですね。ここからは、クラサの町が見わたせる。」

「だろ、ここは、ジーサンのお気に入りだったんだ。右側にある木、今は冬で枯れているけど、あの木はレックスが産まれたときのモンだ。春になったら、レックスの髪と同じ色の花が咲くんだよ。ジーサンにひ孫の誕生を教えたくてな。」

「あなたに伝えたい事があって、ここへきたんです。屋敷では、口に出すことがむずかしかったので。」

「十三年前の事か。すんだことだ、忘れてくれ。」

サイモンは、マーブルのそばにひざをついた。

「義兄は、ドーリア公は、マルガリーテ様憎しだけで、マーレル・レイを襲ったのではないのです。確かにそれもありましたが、別の理由もありました。」

「・・・今さら、何、言われても、おれにはピンとこないんだよ。でも、それであんたの気がすむのなら話だけでもきいてやる。憎しじやなきゃ、何があったんでんだよ。」

「十三年前に、すでに海の向こうの動きをつかんでいたのです。ドーリア公は、その当時から、バテントスの他国への侵攻を知っていたのです。」

マーブルは、

「それがもし事実なら、なんだって、マーレル・レイを襲ったんだ。」

「バテントスは、そのころからエイシアに目をつけていたのです。ドーリア公は、海の向こうの情報収集を熱心にしてましたからね。いずれ、やってくると確信した義兄は、マルガリーテ様の前の王、つまり自分の兄に内々にその事を相談してました。」

話をきいた王は、ドーリア公をまじえてのダリウス国会を開催を決め、バテントスの襲来の危機を公表するつもりでした。ですが、その矢先に、あの狩猟際の事故が起きてしまい、結局、国会の開催もバテントスの襲来の件も、棚上げされるかたちになってしまったのです。」

腹違いのマルガリーテは、ドーリア公と気があわなかったのは事実だ。しかも、政治能力も皆無で、バテントスなど最初から話にならないのは分かっていた。

王位継承に敗北し、あせったドーリア公は強引な方法を選んだのである。クリストン軍の、マーレル・レイ侵攻である。軍事力でおどし、退位させるのが目的だった。王は、マルガリーテの幼い息子でもかまわなかった。自分が後見人となれば、それでいいからだ。

その結果は、マルガリーテの自殺。そして、王子の失踪。ドーリア公が、あっさりと兵を引き上げ、クリストンに帰ったのも、マーレル・レイは、もはや、自分を受け入れないと知ったからである。

だが、宗主がいないエイシアは、バテントス以前にバラバラになってしまう。王子は、どうしても見つけなければならぬ。ドーリア公は、そういう思いで、レックスをずっとさがしていたのだ。

サイモンは、

「あなたに、この話が真実だとおしつけるつもりはありません。でも、現実にはバテントスはやってきて、クリストンは真っ先にねらわれてしまいました。義兄も、死ぬまぎわに、自分のした事を後悔していたようです。」

サイモンは、頭を地面におしつけた。マーブルは、いまいましてに見つめる。そして、重い口をひらいた。

「忘れろと言ったはずだ。過去の負い目を背負っている男に、息子をたくす事なんてできないんだ。もういい。」

マーブルは、視線をそらした。サイモンは、頭をさげたまままだ。シエラが、サイモンのえり首をつかみ、乱暴に顔をひきあげる。

「うそだ！ そんな事、ぼくは信じないぞ。あの男に、そんな思慮深い考えがあったなんて、信じるもんか！」

レックスは、シエラをおさえた。サイモンは、えり首をひっぱられたせいで、ゲホゲホしている。シエラは、

「ぼくの、ぼくのあの苦しみはなんだって言うんだよ！　それが真実なら、なぜ、ぼくに話してくれなかったんだ。だから、みんな、反対しなかったって言うのかよ！　ぼくは、一ヵ月も閉じ込められて、餓死寸前まで追いつめられて、それで、それで……！」

シエラは、ワツとレックスの胸に顔をうずめた。サイモンは、苦渋にみちた顔をしている。

「すまない、ライアス。言おう言おうと思っていたが、話せずじまいだった。」

シエラは、

「信じないよ。絶対信じないよ。話してくれたとしても、絶対、絶対信じない。君はいつも、あの男の顔をうかがっていたね。クリストンは、あの男がすべてだったからね。だれも逆らう者などいなかったからね。ぼくは、あの男にきらわれてたんだろ？」

サイモンは、何もこたえない。シエラは、

「きつとそうに決まってる。でなきゃ、反対したくらいで、実の子供にあんなひどい事をするもんか。でも、もういい。ぼくには、レックスがいる。レックス、たのむよ。ここからつれだしてくれ。ぼくは、歩けそうもない。」

レックスは、泣いているシエラをだきあげた。ちらと花の木を見る。マールがいつのまにか立ち上がり、その木をなでていた。

「マール、これが真実だそうだ。けど、お前にはもう関係ないよな。やな話をきかせちゃったな。お前も忘れて眠ってくれ。おれも忘れ

「るからさ。」

九、父さんの忘れ物

シエラは、ずっと泣いていた。レックスは、ずっとだきしめてた。シエラは、そのうち眠ってしまった。目がさめたら夕方だった。

シエラは、はれぼったくなった目を水でひやしていた。

「ひどい顔。目が真っ赤。叔父様もあんな事、話す必要なかったのにね。私も、はじめて知ったけどさ。」

レックスは、

「マーブルのやつも、ショック受けてたみたいだ。さっきやつともどってきたけど、ムツとして部屋に閉じこもっちゃったしな。」

「サイモン叔父様も、苦しかったんでしょね。それに、父様も、言い訳なんかする人じゃなかったしね。」

「ライアスはなぜ、父親にきらわれたんだ。反乱に反対して、きらわれただけじゃあない気がするんだよ。それ以前に、なんかあったんじゃないのか。反乱に反対しただけで、塔に閉じ込めるなんて、おかしいと感じてたんだ。」

シエラは、少し考えた。

「分かんない。兄様の記憶しらべても、よく分からないの。兄様が小さいころは、きびしかったけど大切にされてたわ。母様の死んだあたりになるのかな。このあたりから、父様の態度が、よそよそしくなってきたみたい。兄様、かなり困惑してる。母様の死が関係し

てるのかな。」

「女房死んで、さびしかったんじゃないか。それで、ライアスは母親によく似ていて、顔を見るたびに思い出すから、そうだったんじゃないのか。」

シエラの母親は、シエラが二歳かそこらのとき死んでいる。シエラは、母の顔は知らない。

「それも分らないの。母様が死んだとき、父様、サラサにある母様の肖像画、みんな燃やしたんだよね。私、母様の事は、みんなからきいただけ。美人だったのは確かよ。私の髪と目の色は、母様と同じ栗色なんだよね。」

「でも、お前、心神喪失してたとき、母親の幻がそばにいたんだろ。幻をつくれるくらいなら、ある程度は覚えてるって事じゃないのか。」

「うーん、今となっては、はっきりしないんだよね。あの時の記憶は、かなりあいまいだしさ。けど、考えてみれば、金髪で青い目ってのは、ライアス兄様だけだったな。シゼレ兄様は、父様とおなじ黒だしさ。」

「金髪と青い目は、ダリウス王家の特徴だって、マールブル言ってたよ。おれの緑の瞳は、マールブルからもらったんだけどもさ。けど、この金髪は、母さんからのモンだったって。ライアスの金髪は、王家のモンじゃないのか。」

レックスは自分のサラリとした金色の髪を手にとって、シエラに見せた。シエラは、

「かもね。ライアス兄様は、レックスほどじゃないけど、とてもきれいな金髪してたしね。王家の人は、レックスのお母さんの前の王様も金髪だっけいてるし、黒だった父様のほうが、めずらしいくらい。私、兄様の髪、すっごくうらやましかったんだ。」

「その栗色も、あったかそうでいいよ。結局、ライアスの原因は分からずじまいか。それさえ分かれば、もう少し、あいつの事、分かっただけなのにさ。」

「ごめんね。でももう、この話は、これくらいでやめとこ。さわられたくない過去の傷なんだしさ。今、あの子、眠ってるけど、起きたらたぶん機嫌悪いよ。あまり、変な事きかないでね。」

「なら出すな。機嫌直るまで、お前の中に閉じこめておけ。」

その夜遅く、マールはミランダに、マール・レイに行きたいとつづけた。忘れ物を取りに行きたいと言う。ミランダは、

「それは、かまわないけど、忘れ物って何？ 逃げる時、だれかに預け物でもしてたの。」

「モノじゃない。十三年前の忘れ物さ。それを取りに行かないと、おれはお前といっしょになっても墓参りばかりしてしまう。すまん、ミランダ。」

ミランダは、ため息をついた。

「あやまる必要ないわ。行きたければ行けばいいでしょう。でも、

あんた、ほんとに、私といっしょになりたいの？ 本心から、そう望んで求婚したの？」

「ほんとにすまん。けど、おれの十三年の意味を、もう一度ちゃんと考えて整理したいんだ。サイモンの話を信じたわけじゃない。信じてしまえば、マールの死はむだになる。おれが、必死でレックスを守りぬいた意味もなくなってしまうんだよ。」

「マーレル・レイに行けば、その答えが分かるとでも。」

マールは目をふせ、床を見つめている。ミランダは、

「あんた、息子が手をはなれたから、さびしいんでしょ。私は、待っていたほうがいい？」

「おれは、身勝手な男だよ。下手すりゃ帰ってこないかもな。でも、一人には、なりたくない。やっぱり、お前には、ここにいてほしい。」

ミランダは、いい加減にしようと思ったが、だまっている事にした。今のマールに、何を言っても無意味だ。

次の日の昼過ぎ。クラサの町に旅芸人の一座がやってきた。サイモンがきてから、屋敷の空気が重苦しくなっている。シエラはまた、おばあさんに姿を変え、ミランダといっしょに町へ出かける事にした。

何もない田舎町では、ときおりおとずれる旅芸人は唯一の楽しみだ。大人も子供も、このときばかりは仕事の手をとめ、芸を見にあ

つまってくる。

町の広場は、見物人でいっぱいだった。大道芸は、田舎のドサマわりとは思えないほど芸が立派で、シエラはひさしぶりに楽しんだ。

シエラが、特に気に入ったのは、お手玉だった。芸人の男の体のあちこちから、とりだされた玉は、あつというまに増え、芸人の手をすきまなくクルクルまわっている。その見事な動きに見物客は歓声をあげていた。

「楽しかったね、ミランダ。レックスにも見せたかったな。」

帰り道、シエラはそう言った。ミランダは、

「見れるかもしれませんよ。町の人の話では、夜になると、芸人がそれぞれ各家庭をまわるそうです。こんな田舎じゃ、一回芸を見せただけでは、あんまり稼ぎはないですからね。」

「屋敷にもきてくれるかな。おじいさんとおばあさん、お金持つてるから、きつときてくれるよね。あのお手玉の芸人さんがいいな。」

ミランダは、笑った。

「さあ、どの芸人がくるかは運ですね。夕食を早めにして待ってましょう。ところで、ライアス様の御様子はどう？」

「しばらくダメかな。心を閉ざしちゃったみたい。カラに閉じこもっている、そんな感じ。できるだけ、表の事は分らないようにしてる。目と耳をふさいでいる状態。あ、叔父様との話なら心配ないわ。あの子の知識と能力は使えるもの。これからの事は、私がちゃ

んとやるから。」

そうですか、ミランダはつぶやいた。

で、その夜、早めの夕食の後、シエラとレックスは夕食を食べた後のテーブルで、芸人を待ちながら、サイモンとごちゃごちゃ話をしていた。

シエラは、

「うん、クリストンのだいたいの事情は分かったわ。豪族達の協力もとりつけたし、あとは銃の量産ね。手紙でたのんでおいた鍛冶屋さんには集まってるかしら。いままでつくっていた武器とは、だいぶちがうから大丈夫かな。」

サイモンは、

「実は、大砲をまねてつくってみたんだよ。見よう見まねだったから、使い物にはならなかったがね。銃は、ライアスが書いた詳細な設計図があるから、なんとかなるだろう。」

「あの試作品は、持ってっていいって。グラセン様が最初におつくりになられた銃とは、だいぶ構造がちがってしまったから、改造前の銃になれたマールさんには使いにくいみたい。」

「それは助かる。実物があるなしじゃあ、だいぶちがうからな。ところでシエラ、お前達はいつクリストンへくるつもりなんだ。私としては、明日にでも、お前達をつれていきたいが。」

シエラは、レックスの顔を見た。レックスは、

「おれはいつでもかまわないよ。けど、しばらくのあいだ、身分はだまっていてほしいんだ。あんた、おれの事は、だれにも話してないよな。」

「知ってるのは、私がつれてきた部下だけだよ。口がかたい連中だから安心していい。」

レックスは、ホッとした。シエラは、

「じゃ、決まりね。」

シエラは、窓を見つめた。芸人は、まだこないのか。レックスは、「さっきから、窓ばかり見てるな。なんか気になる事でもあるのかよ。」

もう、そろそろ寝る時間だ。シエラは、がっかりした。

「やっぱり、こんな町外れにはこないか。楽しみにしてたのにな。」

おじいさんが顔を出した。やっときたようだ。お手玉芸人だった。シエラは、大喜びでミランダ、そしてしるるマールを寝室からひっぱりだした。

芸人の男は、にこやかにあいさつをした。そして、威勢のよい掛け声とともに、玉をとりだし、クルクルまわしはじめる。玉の数はドンドン増えていき、まわす玉の高さは、天井にぶつかりそうになる。おばあさんが、お金を数え始めた。

「ね、すごいでしょ、レックス。あんなにたくさんの玉、体のどこに、かくしてんだらうね。」

芸人は、すばやい手の動きで、また体をさわる。そして、とりだした何かを、シエラとレックスめがけて、それぞれ投げつけた。

シエラのそばにいたミランダが、反射的にシエラを床に押し倒す。指の長さほどのナイフが、壁につきささっていた。芸人は、すぐさま家から姿を消した。ミランダが追いかけたが、見失ったようで、すぐにもどってきた。

レックスはマーブルをかかえていた。マーブルの右肩は血がにじんでおり、全身が、はげしくけいれんしている。サイモンが、壁のナイフをぬき調べ、首をふった。

「ゼルム毒蛾です。この毒は、牛一頭を簡単に殺します。まさか、旅芸人とは。」

マーブルは、けいれんする手で、レックスの顔をなでた。

「ア、アレク、ス。アレク。」

ニコツと笑ったあと、マーブルのけいれんはやんだ。

逃げた芸人は、サイモンとグラセンの部下につかまりしだい、毒を使い自ら命を絶った。この芸人は、エイシアの人間だった。

サイモンは、

「雇い主が知られるくらいなら毒をあおぐ、まちがいなくプロの仕

業だ。バテントスに雇われたんだろう。残りの芸人もつかまえたが、どうやら無関係のようだ。あの芸人は、数日前に一座に加わったばかりらしい。」

サイモンは、自らの失態を責めていた。警戒してたのは、バテントスだけで、エイシアの殺し屋までは注意がなかった。

シエラは、

「私がマーブルさん、ひっぱってきたから。あのまま、お部屋にいたのなら。」

シエラは、顔をおおう。サイモンは、

「自分を責めるな。彼がいなければ、レックス君が死んでいたはずだ。子を失った親の痛みは、とてもつらいものだ。彼は、笑っていたはずだよ。」

「レックスがかわいそうよ。ミランダさんも。」

サイモンは、シエラをだきしめた。そして、

「芸人は、お前とレックス君だけを正確にねらった。バテントスはまちがいでなく、レックス君に気がついていて。お父上を埋葬したら、すぐにクリストンへ向かおう。ここも、安全ではなくなったんだ。」

シエラは、涙とともにうなずいた。

おじいさんが、涙ながらにつくった棺にマーブルをおさめ、出発

の用意をおえたあと、みんなは裏山に向かった。そして、マーブルの祖父のとなり穴をほり、そこへ埋葬する。

レックスは、木を見つめた。さわろうと手をのばしたが、やめた。この木は、あまりにも父のおもかげを残しすぎている。

レックスは、シエラに向かい、

「ゆうべ、ミランダと話したんだ。マーブルは、マーレル・レイに行くつもりだったらいい。忘れ物を取りに行くってさ。」

シエラは、

「忘れ物って何？」

「分からない。ミランダの話をきいても、おれにはピンとこなかった。だからさ、シエラ、その悪いけど、クリストンには先に行ってくれ。おれは、マーレル・レイに行く。そこで、マーブルの忘れ物がなんだったのか、しらべてみたいんだ。」

シエラは、びっくりした。

「ちょ、ちょっと待ってよ、レックス。叔父様の話、きいたでしょ。レックス、正体ばれてるのよ。また、ねらわれたらどうするのよ。私もいっしょに、」

レックスは、手で制止した。

「一人にしてほしいんだ。一人で、いろいろ考えてみたいんだよ。このまま、クリストン行っても、おれは、お前にオンブにダッコだ。」

それもしかたないと思ったけど、やっぱりいやだ。だから、こんな自分でも、できる事があるか考えてみたい。マーブルの忘れ物が分ければ、それも分かると思う。たのむ、行かせてくれ。」

シエラは、レックスの顔を見つめた。サイモンは、シエラの肩に手をおく。

「好きなようにさせてあげなさい、シエラ。まだ、春までには時間がある。レックス君、私とシエラは、君の帰りをクリストンで待ってるよ。」

シエラは、王家の剣をレックスにさしだした。そして、無理に笑顔をつくる。

「お守りよ。」

レックスは、受け取らなかった。

「これは、お前に必要だ。それに、おれが持つてると、必要以上に正体がばれてしまう。おれの事は心配するな。まあ、一人で行くといっても、しょせん、一人じゃないはずだしな。」

レックスは、ミランダとサイモンの顔を見た。ミランダは、

「私は、あんたのあとを、コソコソつけていく気はないわよ。その甘ったれた顔も見あきてるしね。シエラ様についてくわ。」

サイモンは、

「私の部下は、君が危険だと判断しない限り手助けはしない。一人

旅で困った事があっても傍観しているだけだ。これをもって行きなさい。旅費だ。たりなくなるころに、また送ろう。」

「金なんてもらえないよ。日雇いでもしながら行くつもりだよ。」

「時間が、かかりすぎる。春までには間に合わないぞ。遠慮しなくてもいい。これは領主の金だ。つまり、君の財産なんだよ。」

レックスは、受け取った。サイモンは、

「君が産まれた町を一度見てきなさい。次に行く時は君は王なのだから。」

レックスは行ってしまった。シエラは目をこすった。ライアスが顔を出し、サイモンを横目でにらむ。

「シエラが、かわってとたのんできたから、出でただけだ。しばらく一人になりたいって。」

「そうか。あいかわらず妹思いだな。昨日は、すまなかったな。」

「ぼくは、お前を、ゆるしたわけじゃない。ぼくに隠し事は、二度としないと誓え。こんどしたら、お前を八つ裂きにしてやる。」

サイモンは、肩をすくめた。

「やっと、クリストンのライアスがもどってきたな。お前は、そのくらいでちょうどいいんだよ。私はお前のその生意気で威勢のいいところが、気にいってるんだ。」

もう一人のシエラは、フンと鼻をならした。そして、クリストンの方向を見る。

「雪山なんて、ぼくはごめんだね。一気に山脈を飛び越える。白竜、姿を現せ！」

よく晴れ渡った青空に、白いドラゴンが姿を現した。白竜は、シエラ達を乗せた後、白い翼をはためかせ、クリストンへ向けて一気に飛翔する。だが、白いドラゴンは、人の目には、白い雲にしか見えなはずだ。雲は、スーッと青空に白い軌跡を残し、山の彼方へと消えていった。

第二章へ続く。

九、父さんの忘れ物（後書き）

長い物語の序章とも言える、第一章をご一読くださり、ありがとうございます。ごさいました。一章の物語は、主人公レックスの父親であるマーブルの物語となっています。マーブルは性格的には、かなり問題のある父親です。決して理想的な父親像ではありません。ですが、信念の人でもあります。苦しい中、ひたすら運命を耐え、そして命がけで自分の息子を守り、何一つ見返りをのぞまず、愛する息子を次の時代へとたくすために、生きたぬいた一人の男です。彼の生涯は、その後のレックスに深い影響を与えます。物語の主人公は、父から子へと受け継がれ、新しい物語が始まっていきます。第二章もお楽しみいただければ、作者としてうれしかぎりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7227w/>

千年王国ものがたりエイシア創記

2011年11月21日06時55分発行